

川柳塔

昭和四十二年一月九日
昭和五十八年八月二十五日
昭和五十八年九月一日発行
（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六七六号



日川協加盟

No. 676

九月号

58年度 同人総会と

二賞発表句会

日時 昭和58年10月2日（日）午後一時開場
場 なにわ会館

地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車南

電話 06・772・1441番

▼同人総会

午後2時～3時30分

・司会・西田柳宏子／開会の辞・河内天笑／挨拶・

西尾栞

【議事】①会計報告・高杉鬼遊 ②事業経過報告・

香川酔々 ③質疑応答／閉会の辞・宮口笛

生

▼二賞発表句会

午後5時30分から

おはなし

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題

【髪】

【礼】

【舞】

【富】

席題 当日二題 各題三句
会費 五百円

西尾 栞

宮尾 あいき 選

西田 柳宏子 選

若柳 潮花 選

橘高 薫風 選

川柳塔社

協賛川柳大会

大阪築城400年まつり

わが大阪の繁栄を呼びもどすために、大阪二十一世紀協会はいろいろの計画を実施されようとしています。その初頭を飾るものに、この十月一日から大阪城公園に、大阪城博覧会が開幕されることとなりました。

われわれは、この催しをいやが上にも盛り上げる一助として左記の通り協賛川柳大会を催すこととしました。ふるって御参加下さることを願ひします。

日時 昭和58年10月30日（日）
場所 大阪城（博覧会）内
豊国神社事務所

電話（06）941-0229

開会のことは
宿題 当日難感

奥田 白虎
永田 帆船 選

西尾 栞 選

久保田 以兆 選

敷内 千代子 選

深尾 吉則 選

中尾 飛鳥 選

龜山 恭太 選

兵衛 点
当日難感は5句、その他は3句
締切午後2時

会費 五百円（パンフレットその他代）
出席者に記念品贈呈

主催 大阪歴史の散歩道川柳吟行会

後援 財団法人大阪二十一世紀協会
電話（06）831-1120七

無字の書と無絃の琴

人は有字の書を読むを解して
無字の書を読むを解せず
有絃の琴を弾するを知りて
無絃の琴を弾するを知らず
迹を以て用い
神を以て用いず
何を以てか琴書の趣を得む

文字で書かれた書物を読むことが出来ても
文字で書かれていない書物、即ち宇宙の真理
など読みとることは出来ない。

絃のある琴はひくことが出来ても、絃のない
琴、即ち万物のかななる調べは解すること
が出来ない。

マンシヨンの昼の密室 水中花
マンシヨンの母の遺影に桃一果
マンシヨンのデッキチエアに夢浅し
マンシヨンに置手紙あり 冷蔵庫
マンシヨンに旅の一句がかけてあり

兎に角形だけにとらわれていては、その真
髓に迫ることは出来ないのだ。

有名な詩人、陶淵明は絃を張っていない粗
末な琴を、いつも手元に置いて、無絃の琴を
かき鳴らすまねをして楽しんだという。或る者
がわけをたずねたところ

「ただ琴中の趣を識るのみ、何ぞ絃上の声
を勞せん」と答えた。

心できけばよい、耳で聞く必要はないとの
意味であつた。

きびしい熱帯夜の続く今日この頃、菜根譚
の一節を掲げて、心頭を滅却せんとす。柳人
諸兄姉のご自愛を切に祈る。

西 尾 栗

川 柳 塔 九 月 号

座右の句

かまきりはかなはぬまでもふりあげる

(剣花坊)

私の句

極楽も地獄も集う原爆忌

阿部 柳太

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

無字の書と無絃の琴

西尾 栞 (1)

路郎師と出雲そば

尼 緑之助 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (30)

■川柳太平記(64)《川柳の群像》浅井五葉

東野 大八 (34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (十二丁・十三丁)

黒川 紫香選 (36)

水煙抄

黒川 紫香選 (38)

58年度二賞候補作品中間発表

橘 高 薫 風 (52)

秀句鑑賞

同人吟

橘 高 薫 風 (33)

水煙抄

板尾 岳 人 (55)

路郎師と出雲そば

尼 緑之助

かねて句集刊行を胸に温存していたが、大正十五年(昭和元年)以来の作品を整理するのが大仕事に思えて躊躇が続いた。九月には出すと決心、準備に着手、古い資料を出して見ると、往時の若さ、そしてその時代に再会したようで苦笑続出、又「忘却」という事実

に慄然とした。

勿論私は故麻生路郎門、句集編集に当り師の思い出がのしかかって来たのは当然。

昭和二十一年、敗戦後の窮迫混乱時、川柳雑誌支部二十周年記念大会を十一月十日師の出席を得て開催。その翌日、茅屋に御来駕を願った際、あり合わせの紙に一筆懇請

疎開の子縛のおびするまでに慣れ 路郎

すらすらと書かれた短冊、現在でも目の前に飾っている。申し訳ないが名作とは思えないが、当時としては胸に迫るものを持っていたように思う。そして筆のついでに書かれ

月原宵明自選百句		(56)
西田柳宏子自選百句		(58)
愛染帖		(60)
■書評		
句集「新京都」		(64)
「率直」		(66)
一路集「稼ぐ」		(66)
「見る」		(67)
初歩教室		(68)
柳界展望		(70)
本社八月句会		(72)
各地柳壇（佳句地10選／高田博泉）		(77)
編集後記		(87)
薫風・酔々・鬼遊・史好		(87)

座右の句

一步出ずれば我れ旅人となる心

私の句

角兵衛獅子 太鼓に母の影を貼る

飯田悦郎

(栗)

たのが「蓬山亭」、君の庵号だ、と。爾來使わ
せて頂いている。

午後お供をして松江市に、川雜松江の歓迎
座談会、松江大橋のたもと「なにお旅館」故
勝谷山川児居（十人ばかり）その夜一人宿泊
翌朝のこと、山川児が差し出した短冊数枚、
能筆な師はさらさら片付けられる。そしてそ
の中の一枚を頂戴した。

男同士会話短かし旅の宿

路郎

一読ギョツとした。前夜散会后からこの朝
までの間は二人きり、正に「会話短かし」で
あった。連日の疲れからだだったかも知れない
が、元来の話下手がもたらした無愛想。

三十一年十月、三十周年記念にも御来会を
願ったが、前夜、大杜町の旅館、NHKの録
音、筆名島洋之介（翻訳作家で大杜町長）氏
司会、師を中心に私も加って「出雲あれこれ」
のてい談（翌日放送）記念大会後の懇親会に
名物、出雲そばを供したところ、至極お気に
入ったようだった。後日、大阪の新聞に「名
物にうまいものあり」という師のコラムが載
った。文芸町長や、まだ若かった師の笑顔が
よみがえって来る。尚、同町長の計らいで出
雲大社特別参拝も思い出した。

川柳塔

西尾 葉選

大阪市 西出 楓 樂

松原市 谷垣 史好

コマーシャルの洪水溺れてなるものか
血圧が言わせた言葉で済みますか

不完全燃焼して世を丸く住み

沸点の低いお方を持て余す

気楽さは今日も振子に身を任す

八十の平均寿命を寒う聞く

さて暇が出来たら休きしみ出し

八尾市 高杉 鬼遊

片方の耳が逃がさぬよい噂

蟻病んで列におくれる風の街

老いぬれば百荷に余る母ひとり

母と子の想いは同じ海の青

妻の絵の中に他人が一人いる

減税もさることながらタイガース

海の恋ちまたもいつか秋の風

子供教育について(三句)

岸和田市 高橋 操子

教育公害の元犯人はお母さん

結果論ばかりが母をかきたてる

伸び伸びの子供天国作りたい

豆を煮る根気コトコト心煮る

夏負けはさせぬと母の台所

街中の血潮がさわぐ祭り来る

大阪市 津守 柳伸

したたかな女と燃える夾竹桃
針仕事女の幸を糸切齒

お見舞に通える幸も炎天下

腹筋も縄飛びもしたほうき星

流行を決して追わぬ赤トンボ

天の川星のロマンをそつと抱く

島根県 堀江正朗

好き嫌いな音は好みを許さない

じれったい時計とと思う妻の留守

喜びを味わう舌に四季があり

ここからはビールが運ぶ笑い声

音に耳向けて退屈せぬ留守番

気ぜわしい音で日暮れの雨が落ち

奈良県 香川酔々

万葉の旅に犬養節ひびく

島の灯はみんな掟の夜光虫

羽衣を纏うて母は子を捨てる

六道の辻で振舞酒に酔う

休肝日などと洒落ても酒が欲し

豊年が雷さまとやってくる

兵庫県 遠山可住

休養をとれと一病与えられ

座りたい椅子が男に一つある

早いとこ謝っておく子沢山

銀行が来て定年の気にさせる

上品な歩幅香水効いている

山売って雨の恐さにいま気づき

松原市 玉置重人

平凡な明け暮れ四恩のありがたき

磯の香に寿命が延びる街育ち

色即是空ととてももの話です

軍艦マーチ好きな首相とパチンコ屋

管理人すこし慌てた非常ベル

管理人やつと覚えたゴミ出す日

大阪市 江城修史

嫁が来て父の日一日輝けり

落丁に似た人生の黄昏よ

浮き草の哀しさ風をば憎む日も

故里が見えるか君よちぎれ雲

一期一会風の便りもない浄土

指太く太く妻の掌働く掌

和歌山市 浦野和子

炎天に狂う日もあり夾竹桃

花咲かす捨身を種は知っている

ねむの花わたしに夢をくれますか

躁鬱の狭間を埋める米をとぐ

スキヤンダルかごめかごめの輪を解いて

抱いた手の温みを母は忘れない

竹原市 小島蘭幸

退院の光ひとすじあるばかり

退院の七キロ瘦せた父の眉

命拾いの傷を勲章だと思ふ

切符買う男追いつめられている
長い目で見ようよ積木ひとつ積む
となり新築向い増築梅雨明ける

羽曳野市

榎本吐来

妥協する五十の知恵の阿呆らしさ
熟年の男の夢が他愛ない

道草と言うまい青春は子等のもの
平穏な午後を紫陽花そそのかし
ネックレスぐらいで愛が繋げるか
夕日落つ捨身の頃が懐しや

松江市

小林孤呂二

能ある鷹で静かに辞めてゆく

ぶつきたい言葉を役人いつも抱き
一茶とておなじ中のくらしへ生きる欲
好き嫌いよく似て夫唱婦随なり
真四角へ住めるしあわせ離さない
ヘッドワーク鈍くなつたね酒の席

米子市

八木千代

人形を救う枕が一つある

指切りを信じてつづけて眠くなる
泣きやんだしるしに小さい木を植える
逆風も知った少女の髪かざり
しあわせな枕は一人しか知らぬ
罪を沈めたままゆっくりと潮が引く

米子市

林瑞枝

かけ茶碗埋もれていつか地に還る

豆のつる伸びて天突く白昼夢
嘘ひとつ礫のように胃に落ちる
気取り屋のハートに薔薇の甘い風
輪の中の倅せごっこならよそう
一幅の絵としてフアインダーを覗く

桜井市

岩本雀踊子

老いて行く怖さが鏡の中にある
忘却の旅とは少しきざ過ぎる
口にせぬ愛の深さを知ってるか
引きぎわを知ってる男の計算器
ロボットに感情線のないあんど
満点に近い夫に酒を酌ぐ

伊丹市

桎谷寿馬

大正の妻縁側に居る浴衣
思いがけぬ賞を浴衣のまま受ける
朝顔の浴衣素足に咲いている
宵祭ひよいとたこ焼買う浴衣
裂かれても紺の香りのする浴衣
栄転の浴衣へピンと糊利かす

大阪市

川口弘生

光年は数え百年しか生きず
妻病んで妻に甘えた過去疼く
けし粒ほどの命だけれど我が命
見る為の芝居へ見せる為の服
賽銭箱み仏様も稼いで居
適当な弱さ持つてて縁糸

和歌山市 西山 幸

道化師の道化ぶりにも飽いてくる

いつからか僻み干涸びてた言葉

亡父母からの電話を今日も待っている

あさがおの朝の素顔を羨めり

梳る月日にいつか夢瘦せて

来るこない来る諦めの暦剥ぐ

大阪市 本間 満津子

どうでもええのにあれ着て見これ着て見

どこにも何んも無かったように陽が沈む

相談を財布にしたら止めなさい

百円がとこきいて下さい不動さま

蝶ばかり追いかけて蟻を踏み潰し

ものさしの古さに悔ゆることばかり

島根県 堀江 芳子

酔い機嫌祭り囃子を遠く聞き

花屋から岐れみちゆく花の彩

下駄好きと知って素的なのを貰い

結んで開いて話は尽きぬ女たち

舌打ちを一つそれから夫無口

老いても女ばかりの華やかさ

一点にしばって男燃えつきる

満腹の果て社会面狂いだす

おおらかな欠伸次男の貌になる

忍従の足跡道になっていた

岡山市 時末 一灯

中流の上でも下でも疎外され

偏屈と決める物差し狂ってる

米子市 小西 雄々

妥協して自画像汚してはならず

ライバルへ不戦勝など望まない

雨雲へコンピューターの指示を待つ

本心を見抜いた母の瞳をおそれ

遠吠えの時代もあったわがドラマ

母逝って歳月早し沈丁花

岡山県 嘉数 兆代賀

天と地の絆の中で陽がのぼる

限界とは言いたくはない深呼吸

風は九月熟年の彩で吹く

気まぐれな雨に打たれている無策

つまずいた石の言葉を聞いている

生き恥は晒したくない日の写経

吹田市 藤村 女

コーヒーを少し残して見合すみ

ぬか袋父が磨く床柱

なんとなく父が好き仁義礼智信

我が家の宝白寿の祖母元氣

一生を子に賭け車輪の軸となる

島根県 松本 はるみ

旅枕遠く潮騒聞く残暑

たくらみと知らず瀬音に酔いしれる

あつさりと妥協しました歩道橋

平凡な妻がガラスの靴をはく
燦々と西陽は仏眠らせる

くちなしが匂うて亡母の忌となりぬ
梅雨空にきりきりしやんと花菖蒲

下関市 国弘 半休門

筆不精暑中見舞いも片便り

年寄りの子守りで短気な子を直す

慎重と言う逃げ口上で時稼ぐ

短気を出すなど金魚屋掬わせる

姉妹都市郷土人形交換会

行き先はミステリーですスリルです

大阪市 神夏磯 道子

何事もなかったような名月よ

深山のアザミは棘まで柔らかい

忘れたで片づく涙だったのか

あの人は逝かれたそうなそうですか

すだれから洩れる話はしれている

姑の忘れ上手を見習おう

倉敷市 小幡里風

ジャスミンの匂う扇子へ近ういる

窓開けて高原の駅です深呼吸

太陽の狼狽女の臍焦がす

銃口へとまる雀は撃たれない

スピーチの扇子に何か書いてある

臍下丹田お灸で五臓の眼を覚まし

八尾市 高橋 夕花

花一本あればことたる誕生日

七月のページは何故か泣き虫よ

天の川そして二人は流される

女らしさを隠した鏡が嗤ってる

梅漬ける確かな姑の顔をして

表札の奥にやさしい椅子がある

寝屋川市 稲葉 冬葉

七月の女ルビーを嫌い抜く

脚線美泣かぬ女のトウシューズ

雨だれのひとつ私を捉えてる

ガスメーター上つています苺ジャム

秘めてあるくるみボタンの罪の数

再会のラストチャンスに遠くいる

尼崎市 奥山 美智子

花ざくろ母の香りの荷が届く

カレンダーめくれば九月の風になる

思いきや沸騰点にまだなれぬ

木綿針女の意地を押し通す

呱呱の声地球の自転ずつしりと

神さまも嘘をつきたい時がある

藤井寺市 吉岡 美房

妻を恋い妻を語れば山が哭く

細い指強い絆をはなさない

饒舌のあとの孤独は何なのか

眼鏡拭き弾むところを整える

少年の笑顔性善説をとる

異端者になりたくなくて旗を振る

唐津市

浜本 久仁於

平田市 久家 代仕男

旅馴れてひとりの席を広く寝る

執刀の医者 of 無口を信じきり

指切りの哀しいまでに白き手よ

猿でさえ男の座禪組んでいる

世の中のいちばん短い籤を当て

嫁姑なかよく女の謀りごと

倉敷市

野田 素身郎

出雲市

原

独仙

元海軍も子供プールで息が切れ

取巻きの世辞が判断狂わせる

諍が続いて茶碗欠けたまま

増幅されて本当らしくなる噂

青畳ビールが冷えて妻が居て

大阪市

小出 智子

富田林市

岩田

美代

逝く夏のさみしさがある冷蔵庫

盗みたいものがいっぱいある他人

曇りのち晴女は微笑をとりもどす

順当というものがあゝ孟蘭盆会

仏を送って小さな旅を思いたつ

大阪市

西森 花村

島根県

小砂

白

汀

国鉄の後追いかけて米価上げ

初仕事米価値上げをきめました

日の丸を見れば老人居てる家

禁煙をした分息子喫い始め

病人のありがとだけは忘れてず

通学も裸足むかしは泣かぬ子で
ステテコへ箸から漏れた冷奴
釣竿を納めた途端釣りあげる
日帰りの旅でも土産待つ妻で
文鎮の重さを試す夏の風

梅雨末だ中国山脈雲が垂れ

老醜を鏡はあんまり素直なり

満ち足りた夫婦に刺激欲しい時

そもその縁は民宿での出会い

恋知らぬ無垢な背です新茶摘む

信じたくない風は南から

藍しほり浴衣が未練包んでる

八月の陽に干す褌せて来た思考

月満ちて欠けても思うことひとつ

八月の雲はエレジーの音符なり

サインコサイン孫に脅しをかけられる

粗衣まとう神はなにごと企むか

鎌首をもたげた芥子の面がまえ

特老に生き恥さらず花ざくろ

巧言令色標識つけて泳がされ

堅物の一面見せた隠し芸

倉吉市

奥谷

弘

朗

約束も公約だから当てにせず
喝采の無い花道で夢がさめ
サングラス少し悪妻めいてくる
坂道を後押す妻がいて足りる

竹原市

森井菁居

信じ切る吾子の船出に青い空
美しい嘘に友情詰めてある
満ち潮を待つ釣竿の期待感
どだい無茶な教育ママが敷くレール
我が道を行く熟年の影法師

松江市

舟木与根一

正直に生きてて投票気がのらず
フォークでつづけば西瓜の味がにげ
夏草がのびて噂の父子家庭
自画像をピンクを混ぜず塗ってみる
目立たない看板老舗は誇りもつ

今治市

越智一水

転動がま近で目くら酒を飲み
台所こども胡瓜の音がする
気まぐれは許そう雨の七変化
風の道風で育った花が咲き
老いて尚生きる喜び秋の風

松江市

柳楽鶴丸

何んといつても今日の主役は紅一点
素直なことが長所であり短所です
勉強です遊ぶ事も飲むことも

延着を喜ぶ駅前の縄ノレン
変り者がいて馬鹿がいて阿呆もいた

東大阪市

竹中綾珠

大阪時間ばやけばつきぎやってくる
明日あるを信じて今日も寝るとする
晩成も夢で終って早や定退
長生きの生きる事にも倦いてくる
昼寝から覚めた所へ出る西瓜

豊中市

安藤寿美子

二三步の距離がどうにもちぢまらず
荒梅雨が樋の痛みを教えたり
ウエストが出せる仕立のズボンです
出張の旦那が帰るから掃除
依頼状文法からして間違ってる

鳥取市

小林由多香

嘘を組む心鏡にのぞかれる
ほどほどの化粧で寡婦をわきまえる
保育器の指十本を確かめる
風鈴の音へ夏ばていたわれ
風へ回りうわさに耳澄ます

松江市

恒松叮紅

合鍵の夫婦を誘う祭り笛
仁術へやたら葉袋儲けすぎ
土匂う自家菜園は収穫期
ロボットにいつか年功序列来る
番組を狂わせテレビ延長戦

京都市 都倉求芽

反対から見れば山の向うの幸に住む
ムクムクと雲も背のびがしたい午後
列島を高血圧に道路網

捨て犬の尻尾やたらにもう振らず

自画像をえがくに絵の具がまだ足りぬ

米子市 増田竹馬

クラス会恩師はいたく酔い給い

方言は故郷の手形として温め

七人の囲み破って軒しのぶ

猫のひたい譲るに親の夢も添え

贈られた視力いたわるサングラス

香川県 岡田拳法

行革反対労組社党で頼れない

桐喝へ反核サギは抗議せず

反核では米ソ英仏中棄てず

浸されてたまるか反戦より抑止

誰のために憲法九条あるのだろ

神戸市 中村ゆきを

戦争をしない約手を探そうよ

老いの恋名儀を二つ考える

暗がりて浴衣を直す盆おどり

呑みほして行くあてのない空ジョッキ

もの言えば出ていくお金貝になろ

鳥取県 林露杖

花閉じて宵待つ松葉牡丹かな

廃屋の蓼索漠合歡の花

般若打つ面師の貌に棲む菩薩

また延びた寿命に余生模索する

熱帯魚ミセスの情事白昼夢

八尾市 大路美幸

言いかけたことば飲み込む中年で

せせらぎに慰められている熟年

鯖寿司の鯖の厚みに母が棲む

秋祭り捨てた故郷の音がする

言いつ分はそれぞれにある飯茶碗

堺市 大道美乙女

針箱の底で燃えてる花言葉

孫誕生無視は出来ない嫁の位置

奴唄好きな風来てくるり舞う

別れから絵になりそうな小ぬか雨

芸術の眼は裸婦像へ釘づける

奈良県 村上春巳

散髪屋鏡の中で世辞を言い

子の居ない気楽さなどと他人は言う

花鋏水子地蔵の分も切り

グラジオラス沢山咲いた墓参り

お墓への道にカンナの咲く日照り

岡山県 白岩文衛

亡きひとと語れば山の湯があふれ

神盗り地うばいきシャモなりわれも

マリモ青く丸く旅愁極まれり

霧ふかく還らぬ島をひた隠す
地の果てのベレケの水に掌を浸ける

宝塚市

傍島静馬

海底の穴場に海女の今日がある

おべんちやら単細胞をしびれさす

母親の怒った顔をまだ知らず

新薬より祖母によく効く置き薬

長寿以外おやじに何も取柄ない

柳井市

弘津柳慶

アンケート本音チョッピリ隠しとき

下車駅へ来て居睡りは目を覚し

アリランを歌えば過去が沁々と

旅に出て又々雨よ雨男

その一票軍靴に続くと知っててか

諫早市

原田明春

かくし芸俺の職業ききたがり

ランドセル肩寄せあつて歩いてる

四捨五入余りの中に俺がおり

八卦の嘘も信じて見たくなり

通信簿見て親の夢消えてゆき

大阪市

天正千梢

下り坂少うし本音見えはじめ

案内状なまの温みをつけ加え

サンドイッチマンネオンの海へ来いと言っ

石なげて愛の深さをたしかめる

右派と左派思いやりにもくい違い

大阪市中川滋雀
臍の緒の重さはつながつて来たえにし
影絵なら消える地獄の彩を選る
しみじみと鏡を拭いた独り言
空ッポの頭に漫画なら読める
一行の意味が判らぬ備忘録

呉市林野甦光

呼ぶ人の気配を雨の菖蒲坂

陳列の箱でマリモは詩を捨て

祈りもつ唄もさやかにメノコ舞う

大雪のパノラマ窓に広々と

層雲峡中国の絵を彷彿す

神戸市仲どんたく

幽玄の女となって蚊張の中

盤石の尻安心の境に坐す

故郷を持たぬ男のサンガラス

木漏れ陽へきれいな汗のはつれ髪

父ちゃんの日ぐらいいは家で食べなはれ

東大阪市斉藤三十四

万歩計明日の分も稼いどく

粒よりの桜んぼうの赤い顔

橋桁の下は渦潮口を開け

溝掃除梅雨の流れ受け止める

流し元妻の日課の初まりで

美祢市安平次弘道

三面記事カラーで書けば血の色か

自作自演ブレーキだけは確かめる

二者択一運命線をじつと見る

薬石効どころか怖い副作用

ロボットヘタイムカードが錆びはじめ

大田市 藤田 軒太郎

鉄線の紫老心を豊かにし

菊苗の鉢を増やして老いの日々

酒ぐせを知っているから寝てしまい

軌道修正株式欄と睨みっこ

青写真二人でたてる共稼ぎ

笠岡市 松本 忠三

味付けで東と西の相違が出

顔いてみせ立ちあがる気配なし

奇麗ごとどこで仕入れた一夜漬け

可憐なる花を見つめるだけの距離

老夫婦とんちんかんでめでたかれ

綾瀬市 大山 と金

運不運業と思えば氷水

毎日が出たとこ勝負ためらわず

むつかしい言葉つかってカナで書き

頼まれていやとは言えず妻不服

スピッツをわが子のようにバカでないか

八尾市 飯田 悦郎

電工と対話は両手の指でする

電工はもつたない程テープ巻く

電工の背中で死神揺れている

七つ道具付けると電工燃えてくる

確かめて確かめて電工降りてくる

馴れ馴れの政治に日本が沈没す

親切のつもりの貸す手裏切られ

戦友会にて

ばんばんを上等兵にした裏話

本心をちらりと記憶から探す

阿呆らしい話になつてゐる立ち話

松山市 谷 真風

浜木綿やナースやさしき南子弁

電柱にも頭を下げて当選し

同室へしやべり中風が来て頭痛

蛞蝓の卵も真珠のような玉

同じ物食べてる親しみわいてくる

倉敷市 藤井 春日

一生を台無しにする酒もある

さすが先輩世間の裏をよく見てる

自分から逃げたい職に耐えて生き

野に咲いて人の心の美に触れる

頬を打つ緑を抜ける風が好き

倉敷市 稲田 豊作

難聴の妻に届かぬいい話

腰低う暮らすと弾が逸れてゆく

几張面な人でモーニングがお好き

紅一点が去り雑談は堕ちてゆく

世話好きがついにてに放送して廻り

堺市 高橋 千万子

今日酔うて見たとて明日はやつて来る

断わる気冷たい顔を用意する

個人的意見を聞こう場所を変え

不器用な浮気が一途の愛になり

姉妹ある日立場が逆になり

鳥取県 鈴木 村諷子

表彰状なぜ女房の名を書かぬ

留年を母もやさしゅう伏せている

バチンコの玉さえままにならぬ世の

愚人の辞書だけにしろ姑の字も

あの人も来たか避けれぬ道だから

岡山県 直原 七面山

功成ってから孤独

鯛茶漬そんな暮らしがしてみたし

負けて勝つ策を持つて慌てない

裏表を知り尽くしていて引つ懸り

辞世の句の用意は出来たがまだ死ねず

大阪市 河井 庸 佑

無理難題これ以上にはきけぬ椅子

初対面組みしやすしと見た誤算

最善の策と自負してけつまずき

読んだ以上に読まれたと今わかり

年の功乗せる積りが乗せられる

海南市 牛尾 緑 良

母の手に触れる静かにふれてみる

素手でくる見舞いが心置いてゆく

塾通いもう秒針に追われてる

まだ助走つづく私の人生譜

女いま母に戻った思いやり

島根県 西村 早 苗

冷静な言葉がなぜか語尾ふるえ

一言がなかなか出ない夜のベンチ

どう生きているか別れた女のこと

誘われたらゆけそうカンナ赤く燃え

休日のおつと言う間に日が暮れる

岸和田市 植山 武 助

娘には甘いおやじでいて楽し

下戸ちよつと飲みたい気分の差し向い

雨だれがジャズからワルツになって止み

似合っても似合わなくともダイヤです

又今度来るを約して雨の富士

富士山へ 岸和田市 福浦 勝 晴

秋風にヒラヒラヒラと外れくじ

ど忘れを病氣と年のせいにする

それなりに団欒もあるウサギ小屋

気の急いているとき入れ歯に固い蛸

公園のベンチで仰ぐ秋の空

操子師の作品展 (三二句)

岸和田市 原 さよ子

感動の名句を抱いて帰途につく
師の意欲今更ながら感動す
作品展立ち去りがたく酔うている
かたつむりも動き出したり梅雨晴れ間
旅や旅疊の部屋を頼んどく

岸和田市 古野 ひで

ふんざりがついてハミング出て来そう
大空の広さしみじみ失意の日
闘病の果てに悟った待つ心
ふるさとに昔のままの屋根と井戸
旧友は嬉しい言葉置いて去に

岸和田市 福島 せつ子

なんとなく落ちつく雨の日の孤独
五十肩友のつらさを聞いてあげ
赤い水着母の視線の中にあり
ゴキブリがじっと見ているぬすみ酒
立葵家引き立てて咲いている

岸和田市 吉水 照江

明治生れ同士で気の合う連れがいる
子の為に生きた苦勞は過去のもの
喜寿祝い人生のネジ締め直す
遠くから富士は見るもの雪帽子
紫陽花の色も終りの梅雨晴れ間

岸和田市 清野 こう

有難さしみじみ知った姑の留守
嫁起きるまでを我慢の床の中
有難さ忘れた世の中怖くなる
酒の上の事でと素顔詫びている
老いに向く料理へ嫁の気の配り

岸和田市 芳地 狸村

参道をリズムで歩く緑日
花道で葵の紋が見えを切り
生い立ちが判り安心する如来
丁髷が案内してる映画村
青い目がお酒の味をほめている

和歌山市 若宮 武雄

空蟬の姿へ邪念冷めてゆく
どじを踏む様も冴えてるピエロ役
今の世の道では空しマイペース
消えるまで施す術のない波紋
育て方同じなんだがへゴ胡瓜

和歌山市 堀端 三男

行政の歪み豪雨があばき出す
道風の蛙の故事は嫌われる
ひらひらと大地へ還る花の精
それから続く女の長電話
遮断機の前でピタッと止まる犬

和歌山市 内芝 登志代

すこやかに其の日が終る素晴らしき
次々に帰る足音鍋が満ち

病院に縁ない日々を嬉しがり

淋しいと言わぬが老母の長電話

背水の陣へ冷汗見せられぬ

和歌山市

福本英子

父の日も母の日も酌む蜃気楼

ピアノ弾く指でリングの皮剥けぬ

善人で次ぎつぎ殺す腹の虫

うたかたの恋が浮いてる小ジヨッキ

少年の汗非行から甦る

和歌山市

垂井千寿子

現実を見つめたくない心の目

幸は少し欠けてる方が良い

優勝の汗をマイクが賞めに来る

明るさを取り戻してゐるデスマスク

眉の線細くマダムの武器とする

和歌山市

松原寿子

慎しみの底であなたの背を送る

明るさを粧う素顔を持つて生く

四角い風の中で女はもう哭かぬ

激流となる日のなみだ掌にあふれ

女ってだめね断ち切れぬままだい綱

和歌山市

細川稚代

仏壇のお水かえてる不調の日

ほうほうの態で逃げてもかたつむり

裏方の汗を知つてゐる楽屋風呂

試歩の足くちなしの香にさそわれる

傷つける言葉をくれた電話口

和歌山市

坂部紀久子

ハミングのリズム組よく弾み

種なしの葡萄主張も許されず

土砂降りが止んで俄かに人の声

本音出し自分の無知へ貝になる

反省をしてると今も叫びたい

和歌山県

天満三千代

汐時と世相を読んで職を辞す

定退の気楽な隅にある未練

肩書がとれて地下足袋よく懐き

不景気に負けぬ自信の作業服

退職へおめでとうとは他人様

米子市

石垣花子

拝観料値上げ伏目のご本尊

上り坂義理も人情も置き忘れ

終電車五百羅漢のかくいびき

詩情ふとコース変えさす波枕

昂ぶりを押さえ傷口拉扯まい

米子市

桑原伊都

健やかを祈りちまきの粉を捏ね

川の字の起点へ枕位置づける

類似点一つ見つけて共白髪
白壁の厚さへ街の歴史棲み
語りべとなって反核訴える

米子市 菅井 とも子

矢印を信じ険しい道も行く
両足の尊さ知った松葉杖

孫の指似てて可愛さ増して来る

男同士の話したいと帰省の子

灰色の余生に孫が灯をとます

米子市 雑賀 美世

ゴールまでベース崩さぬ亀の足

青春を語れば戦つきまとい

難題へ煙草そのまま灰となる

話すこと一杯提げて里の家

還暦のおしゃれメガネ買い替える

米子市 田中 亜弥

どの指も倅ですとピアノひく

ムツゴロウ引き潮だけが苦になって

一生に一度は腹の底で泣く

底辺をみがきあげます一人旅

日めくりを一枚はぐと夏の風

米子市 青戸 田鶴

今朝も又同じリズムの卵焼

李朝の壺撫でて老父の日が暮れる

川底の愛の流れに気づかない

○×のしるしで人は裁かれぬ
浮き沈み男にスリルが離れない

米子市 野坂 なみ

花咲爺さんになろう私の種子を蒔く

人前で崩しはしない寡婦の肩

生きざまを少し変えよう横を向く

三姉妹揃って少女の貌になる

遠い日の小銭がはずむ祭笛

米子市 政岡 日枝子

真実を知ってほしくて絵は光る

母の絵が落ち穂ひろいに重なりぬ

少女期の痛みに飢がひつかかる

マツチの棒心貧しき日は折れる

残念の涙が溶ける母の海

米子市 寺沢 みど里

さびしがりの絵に太陽の大きさよ

旅靴かくして孫が引き留める

乗り換えてやっと開いた遅い昼

幼な子のルールにもある年の順

一呼吸おいて口出す嫁の城

大阪市 杉本 智慧子

夏の思い出小さな蛍籠

浜木綿に夏のロマンをきいてみる

フィクションあつてはならぬ実戦記

午後の会話麦茶程よく冷えている

麦こがし故郷の山の味がする

神戸市 山口美穂

蟬しぐれ木蔭で猫の昼寝かな

善人の馬鹿と言われてそれでよし

エリートは孤独影はなお孤独

サングラス社会の色を変えて見る

罨いつかわたしの許へ来る予感

東大阪市 桑原喜風

非農家も豊作祈る梅雨の空

きれそで切れぬ絆の夫婦坂

喋らない男勝利の鍵握る

男女別堅いトイレのエチケット

寝たきりを労わる母へ言葉撰る

大阪市 黒田真砂

北海道旅行(二句)

オシンコシンの滝の流れよ春を抱く

ごめの群れ飛び立ち知床春深し

ゆずられた善意信じてからの老い

梅雨しとど逢わねばならぬ重い靴

風化して噂話の輪をはずれ

京都市 松川杜的

肩書があるばかりに義理を欠き

七夕へ六十路も書きたい事がある

不言実行禁煙をしやべらない

アドリブで決める日課の余生です

平凡というドラマの中に生かされる

大阪市 鈴木節子

雨でも曇りでもよし生きている

逢える日が近づく話題を溜めている

プラモデルも夏休みを待っている

夫婦茶碗のひびへ油断はないつもり

いらだちへページを繰ってだけの夜

大阪市 鍛原千里

ゴキブリへ人間もずるくなりました

はずみで自分の影を踏むことも

倅せのうすさを名前のせいにする

け飛ばした石の行方が気にかかる

わらび餅形の悪さも母の味

鳥取市 森田熊生

裏を読むゆとりが出来て眠くなり

そっくりと言われて父として笑う

廃船となつて魚の城となる

無印に先を越された日のあせり

本当の優しさ叩く手が温い

京都市 山本規不風

お見事な世辞の便りを読み返す

悪もののスーパーマン人気滾う

ディオールネクタイ白い掌が誘う

それから砂丘で逢っている小指

温泉の町の故郷の女は逃げてゆく

富田林市 和田 維久子

しあわせな胸の釦があどけない
いけにえも限度とひとりの宿浴衣
転向へ自分ひとりが味方です
転向の朝へ口紅淡くする
朝虹の果を求めている男

鳥取県 金 川 満 春

自然農法婦唱夫随で追われ居り
スタイルを気にせぬ妻で頑丈で
熟年の愛はスリルが先走る
愛の壺何処かが滲み愛が枯れ
熱々の時代もあつた老夫婦

鳥取県 森 田 布 堂

葬式が済んで遺産でもめはじめ
季節感料理に添える紫蘇匂う
手料理も出来ぬ女で飲める口
景勝の島に生き抜く松が這い
愛のない料理レンジで出来あがり

西宮市 林 は つ 絵

稲が揺れやがて平野が病んでくる
妻の見栄征服できず梅雨あける
父の塩母の塩巢を温める
樹を降りて根っこの声をたしかめよう
腹八分淋しいことばふたをする

鳥根県 梅 み どり

待ちぼうけ入道雲をにらみつけ

宍道湖の夕陽へ戻るしじみ舟

臨月の娘を案じ拝む月

笹舟に迷いを流した故郷の川

ジョギングへ定退同士の馬が合い

吹田市 西 川 景 子

洒落た造りしやれたメニューのドライブイン

経歴にすこうし咲かせた嘘の花

経歴のうそを見抜いた抹茶碗

この女の娘ならと釣書にこだわらず

年の弱い鬼天中殺に左右され

七尾市 松 高 秀 峰

冷飯も知らぬ過保護な子に育ち

お互いの我慢で平和なよい家庭

結局は母親がする犬の世話

老人会色とりどりの薬のみ

栄転も左遷も派手に送別会

町田市 竹 内 紫 靖

カレンダ―の水着が消えて震災忌

クリスタル酒屋の棚に如くはなし

寝ころんで電話をかけてきた気配

答え難きを絵はがきで間に合わせ

スポーツシャツ父の日に増え六十路
宇部市 平 田 実 男

万引きを見てどうしようもない動悸

若いこと言うてるサロンプラス匂わせて

年金で暮し真昼の月に似る

妹の子供をペット代りにし

争つて得た椅子ときどきささるとげ

玉野市

小谷仙山

明日は明日今日有る事の有難い

適当の其の適当の難かしさ

嫉妬する女の貨車が止らない

其れ其れの務で朝が動き出す

あやとりの糸のもつれている笑顔

兵庫県

河原みのる

狭み撃ち南北の島着々と

筋書きはあとから作る米価劇

事畢るハラリ一枚竹の皮

叢の香に出でにけり笹百合よ

本人も交え真面目に葬の事

松原市

北野久子

恋をして山田五十鈴にあやかろう

妻の客夫こんなによく動き

嫁の笑顔今日も一日軽くなる

死んだ時耳を遣るとは言うて来ず

諦めていても聴きたい話したい

出雲市

石倉芙佐子

笛蕭々とまだ煩惱が捨て切れぬ

本当の笛師に逢うて弾む笛

湖の端から秋はおとずれる

世渡りの綱切れそんな人形師

三度目の出会いを何故か笑えない

寝屋川市

宮尾あいき

飾りボタン乙女は乳房意識する

ボタン穴ゆるむと妻が欲しくなり

女の意地貫き通して日々孤独

人類のいけにえお前はモルモット

子が病めば老いの乳房がうずき出す

大阪市

横地雅風

割り切つて鳥と親しむ村で生き

信用ができぬ口だと録音機

耳ざとい母がやりくる市場籠

CMで尋ねた旅は人工美

旅先でひよいとウマ合う国訛り

寝屋川市

江口度

脚下照覧ひとつひとつ石を積む

妻の敷くレールで脱線くり返し

ナツメロの好きな夫婦と年金と

二日酔か畳たたいている木魚

狛犬に賽銭の音数えられ

寝屋川市

柴田英壬子

京座敷おひとつ受ける祭り鱧

巡行やふだん目立たぬ京男

裏腹の心が燃える高瀬川

お買得いつも余分に買わせられ
暗転のヌード息呑む二、三秒

兵庫県

辻 文平

自惚れが芸の形を整える

合鍵が一つ娘と距離が出来

迷うてるわたしを嗤う黄八丈

八起き目のもう売るものがなにもない

試歩一步一步に意地が甦える

島根県

神 原 秀 子

豆の蔓豆には豆の自己主張

断りをあっさりきかれた日の不安

悲しいが欺かれたままの方がいい

罵倒よりつらい言葉をきかされる

法螺吹きの方良心の軽さから

島根県

錦 織 文 子

朝鮮の文字なつかしい過去があり

見つからぬ言葉探しているあせり

母と居る唯それだけの安らぎが

南天の花の白さにある孤独

今日閉じる窓へ明日を信じきり

和歌山市

坂 口 公 子

汗かかず西瓜をうまいと言えぬ人

手を打てば何でも揃う不倖せ

分岐路でだぶるえんまと亡母の笛

汗かけばかいたで憶う亡母のこと

底ぬけに吞んで可愛い悪女です

仙台市

川 村 映 輝

一怒一老解つていながらかつとなる

ダム横暴川のことなど考えず

うそついて叱られうそを褒められる

無理強いに聞いていながら腹を立て

七十になつても実家を鼻にかけ

島根県

松 本 文 子

月あかり人間の嘘みえてくる

たたかいが終つて帰る花の道

粗大ゴミ予備軍夫のゴロ寝かな

ふと開けたアルバム亡父が笑つてる

鼠とり誰かが合図してくれる

岡山市

川 端 柳 子

損得の得では情け育たない

良い時に逢おうよ線香煙る中

夜の闇心の髪をととのえる

一族を従えまかり通る蟻

バラ渡る風カラフルに機を織る (RSKバラ園で)

西宮市

妹 尾 春 江

結論は皆んな我が身を庇つてる

雨つづきどこへかけても話して

あいまいな笑いの席を抜けて出る

イミテーションで妻さつそうとクラス会

三界に家なし満天の星仰ぐ

高知県 松岡三吉

いつ封を切ります棚のナポレオン
聞き上手話上手で職がない

マイカーはくらしの枠の外におく

二十八度礼儀正して汗をかく

梅つける頃おふくろにある元氣

高知県 赤川菊野

何の部屋の窓も絵になる里の家
まがいもの着ても小紋に見える女

もの書きを自認しているベレー帽

この辺で返上しようか寡婦の名を

見掛けとは別に真面目な私生活

大阪府 山根いつを

裏話本気で聞くに哀れすぎ
くれぐれもまだくれぐれも女親

母でこそこんな息子の便り待ち

来てからのことの様ざま古鏡

どうにでもなれは行者の胸にない

東大阪府 崎山美子

アイデアが功を奏した立志伝
不信心夫婦のスクラム崩れだす

母と子のスクラムパパをたじろがせ

スキヤンダル美容院から持ち帰る

北風にむかえばスクラムかたくなる

倉吉市 野中御前

自画像に未練の紅をきつく塗る

熟年の積木音もなく崩れ

霊柩車見送る私も乗る定め

弱虫の意外と強い自閉症

灯を消せば引汐らしい大いびき

倉吉市 渡辺独歩

舌打ちの音でスリルが逃げて行く
スリルの目北へ向けると斜視になる

忍従の女が練っている謀反

かさかさと虚ろな音よ父の骨

チアガール勝利の女神へ直訴だな

和泉市 岡井やすお

長いものには巻かれろと乗る空母
政党化なら一院が安くつく

役員を締めりや裏金作り出す

外人が来りやスパイかと疑われ

犯人を決めねば済まぬ捜査陣

大阪府 大野武太

面会謝絶ただいま昼寝しています
昼寝する日課くらしの中にもつ

駅前に同級生のいる温み

日曜の予定を変えた受話器とる

八月十五日静かな空を思いだす

貝塚市 行天千代

姉の死

母代り育ててくれた海の恩
ピカピカのキッチン満ち足る妻の城

一人住む女の城は鍵をかけ
缶ビールやっぱりジョッキがおいしそう
枕して今日一日をかをりみる

松江市 梅本 登美也

ロボットがやがてはメスを持つたろう

地震学ふつと鯨に笑われる

六道湖の珍珠が跳る四つ手綱

もう少し降ればいいのに虹が出る

夏風邪を用心深い人がひく

新宮市 川上 溪水

自主性という反抗の芽が育ち

父の日に父は休みでない職場

赤字出す家計にへソクリだけ残り

遊びなら冴える頭をもて余し

合格と思う普通の夫婦仲

宇口市 野呂 右近

愚にもつかぬ思案して居た雨の夜半

進む世にどうにかしがみついて生き

すり減った靴がびったり足に合い

良薬を当てに摂生忘れる愚

自動車の墓場故郷の休耕田

羽咋市 三宅 ろ亭

西山に月が傾く朝を行く

現金買ひ旧盆金策などすたれ
顔口に喋る娘の盆帰り

家に籠(たが)要りそう旧盆で彫れ
緑陰の寝読みこの世の楽土かも

大阪市 岡田 ふみ

バスツアー艶歌一節おぼえて来

生野菜嫁が作れば息子食う

欠点がないのが彼女の欠点で

旧友と話せば大正甦える

倒産の噂ちらほらボーナス時

岡山県 岩道 博友

どの音をサインにするか妻と定め

確信が出来て余白を埋めてゆき

勤務表もう定年と線を引き

最初から文字は苦手と書かぬ癖

割り切つて教会のドア別に出る

出雲市 板垣 夢酔

朝は処女午後から年増海荒れる

意見する父にも同じ悔いがあり

ミニはいて座席の膝を気にしてる

キッスしたぐらいで結婚責められる

父の日の父祝う金父が出し

出雲市 園山 多賀子

尼先生句碑十周年に寄せて(二句)

句碑十歳まだうら若い貌に遇う

句碑そつと触れば海猫が騒ぎ出す

一介のボールペンから一行詩

梅雨空に殺し文句を考える

焦げた鍋磨けば亡母の顔が浮く

出雲市

吉岡 きみえ

仮面脱げばあなたも殺人鬼かも知れず

あなたにもいつか唄わす子守唄

七月七日母の忌師の忌亡友思ふ

いくたびか脱輪あつて越えた坂

洗ひ髪残る色香を梳いてみる

榎原市

岩井 本蔭棒

ローレライ歌う若さがまだ少し

国揺れる程の嘘なら言い給え

体力を自慢したのが先に逝き

百キロのスピード愛に飢えている

赤坂の灯はセンセイの骨を抜く

守口市

羽原 静歩

病気とは氣を病むことと見つけた

一日一善一日一悪日々好日

合掌の手に煩惱がつきまとい

骨董屋明治の顔で出して来る

ポランティア草を抜く人休む人

鳥取県

清水 一保

雑草が人の情けを知って負け

散り際は言うまい夏菊しかと咲け

五十坂今日も待ったのない仕切り
弱虫が一番強い芽を育て

参議院選挙終る

もう握手手を振る人も無い他人

和泉市

西岡 洛醉

一輪差し嫉妬を知らぬ花で咲き

二十二時ワイングラスに今日を問う

紙人形の母は明治の髪で逝く

両の手に母の重さを計り兼ね

実直の背筋が痛む梅雨晴れ間

岡山県

荻野 鮫虎狼

耳鳴りの向うで政治の灯は揺ぎ

夏姿女きつちり帯を締め

座ぶとんを持ち出して来た長電話

釣り糸の向うが相手にしてくれず

シーズンの変り目を呑む生ビール

大阪市

北 勝美

反骨のプロを貫く不死鳥忌

駅前でチラシ呉れない齡になり

しゃがむ時ほんとの自分そこにある

夜泣きそば笛はテープの音で鳴り

あれくらいそれくらいならひとりの口

羽曳野市

佐野 白水

新神戸田岡一家と会う出口

布引の雌滝で知恵遅れの子も休み

異人館無料公開だけ入り
風見鶏神戸の暑さに耐えており
瓢箪が成っていますと妻静か

繫がれた鎖が憎い発情期

英雄が居らぬお蔭である平和
やるやらぬ親に権利がありますか
今日もまた残り眇い日が昏れる
ロボットという化物に汗がない

浜田市 中川 幸一

咳払いしても効めのない酄

ロボットもやがては赤い旗を振る
葉隠れの郷で反戦ピラ配る

団体の旅方言が濶歩する
考古学高速道の足を曳き

唐津市 浜本 義美

国民が学校好きで国が伸び

俺の運試めす思わぬ向い風

キヤラメルを置く坂道の無縁墓

優勝の見込み問われる金庫番
うぬばれと自信のちがい裁く妻

唐津市 仁部 四郎

耳などもほどよく遠くなりました

人前にや出ないが妾しやティツシュペーパー
犬が居て猫が居て寺平和なり

唐津市 田口 虹汀

よく眠る嫁で我が家の牽引車
紫陽花がが薬玉抱いたように咲き

唐津市 久保 正敏

ルンルンも突つ張りギヤルも嫁にゆく

約束が破られ助かることもある

標的のママに暗示がかからない

検定票あてにはしない非常口
ブーメランの娘の胸から戻らない

大阪市 藤田 頂留子

華やかにちよっぴり淋しく祭すむ

祭すむ亡兄はしずかに帰り行く

ハッピー着て娘祭りを盛り上げる

シーズンを先取りしている街のピラ

地球あるかぎりゴキブリとの戦さ

姫路市 大原 葉香

パチンコも日課の中にある暮らし

駅前の噴水旅情とり戻し

税務署へ来てまで続く孫自慢

でで虫によく降るなと話しかけ

週刊誌縦横無尽に人を斬り

鳥取市 両川 洋々

二枚目の舌で示談屋まとめ上げ

啄木の涙を白砂見てしまい

記者のペン怒りの記事を書きまくり
冷房を出ると日本の夏にあい

カニ泡を吹いて公害まだ呪い

富田林市

中村

優

義理で見る派手なりボンの見舞客

院長の回診やたらに咳がでる

倅せも不幸も同じ神の鈴

赤電話早口となる銭の数

殺陣すこし派手で主役の芸を立て

岡山市

井上

柳五郎

老骨の軋みを若さ無視をする

骨拾う思わせぶりに乗って悔い

相談をする相談に手間を取り

九分通り決めて相談かけてくる

迷惑になる思いやりの世話をやき

藤井寺市

中原

比呂志

ノッポビルこの地で滋雨は嫌われる

まいた餌に雀びくびくしなさんな

半分も聞かずに小走り大阪人

三十年たっても学歴道ふさぐ

イラストの地図で楽しく迷う道

河内長野市

井上

喜醉

退屈な身分になって日が長い

吊り皮の相談まとなり途中下車

この男こんなもんやと済まされる

鈍感で他人の靴と間違える

チヨボチヨボの夫婦で楽しいバスツアー

鴛鴦も四十の坂の共稼ぎ

父さんと言われりや俺も父さんだ

共稼ぎホームドラマは地で通し

友情も付かず離れず共に老い

大ジョッキ上目使いの女と居る

島根県

木村

はじめ

前向きの姿勢で蟹は横に這う

台所のリズム物価から崩れ

囁りに少し遅れて墓参道

言い訳を笑顔で聞いて居るも歳

入学も就職も居る子沢山

兵庫県

藤後

実男

夫婦喧嘩あとの空虚を子が支え

沈着へ踵が折れたハイヒール

どん底の夫婦の声を壁が聞き

もう一人の自分をつくる三面鏡

高給がそうさせたのかまだ一人

東大阪市

奥山

弥山人

受験番号易者に母もみてもらい

痛いところに触れて仲人腰をあげ

痛い程指きりしたに待ちぼうけ

星空のグラスに映える大ジョッキ

店員をパートにかえる不況色

寝屋川市

高田

博泉

浜田市

佐々木

裕

一枚のハガキが野望かきたてる

齒ブラシをたぬきにしてからの弱氣

説教へ貧乏ゆすりが止まらない

ひらめきの一振りスランプを抜ける

優勝をあきらめてから連勝続く

サラリーの年収医者にや端金

金よりも親子のきずなが弱い世に

黒船の世から米艦騒がせる

すじ書きがトントン運ぶ多数決

水割りへ鞍替えをしてゴマをすり

わからないことだとわかった日の悟り

ネックレスより輝いている素肌

はすかいの絵ににらまれるピカソ展

異常氣象一番星が見つからぬ

偶然とは神と悪魔の妥協案

停年の絵具ひからび絵筆ちび

踏絵かもかも男の道は風のまま

海荒れて男の野性晒す賭

他人の街乾いた風がぶちあたる

吊橋も張切る男の子が通る

背延びして夢がとどかぬ母の樹よ

松江市

竹内 寿美子

岡山市

行 吉 照 路

ノーロック振り向きもせず夏の風

夕焼が小さい嘘を包みこむ

輪くぐりが出来ぬ女の花造り

鋼鉄になった時から妥協する

改造改築お寺景年のいい読経

早起きを月花美人にほめられる

水虫がまだ兵隊のままで生き

責任のもてぬおしやべりを置いて去に

鼻めがねはずして安堵の申告日

（前月分） 姫路市

啞啞と言うなお前がしやべり過ぎ

罪のない仏に罪をみなかぶせ

果せない口約べらべら並べたて

猫よりも劣り三日の恩忘れ

税税税売っても買うても貰うても

お隣の留守に届いたお中元

ポーナスも当座振込味気なし

予言者に驚かされる大地震

飛石の連休葬儀を出す不運

一仕事終えて麦茶の軒涼し

風向きへ狙うてはならぬ羅針盤

境界線やっぱり明治がものを言い

島根県

石 田 清 泉

梅谿庵 朝 翁

岸 本 輝 水

稲 葉 星 斗

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

梅谿庵 朝 翁

年金がきて嬉しさと淋しさと
外孫にわが家へ新風持ちこまれ
追いたてられて塾へ塾へとやって来る

島根県 藤原 鈴江

とりすます女の線のゆるむ旅
一心同体すこうしずつずれはじめ
貝ひとつ波打ち際で夢を見る
ハミングで気まずい朝を切り抜ける
企まぬ笑顔で通る向い風

大阪市 長谷川 春蘭

生き甲斐を二人で廻す夫婦独楽
組板のリズムやっぱり妻の音
ごく自然素直な顔の片えくぼ
商店街シャッター開いて朝の息
潔く散るすべもなく造花褪せ

八尾市 山下 みつる

雨蛙ホースの水へ鳴いてみせ
出世コース先ず転勤を覚悟する
海を見る少年の眼は夢に満ち
父の日のサーピス誰も気が付かず
生徒会息子が長になる不思議

兵庫県 中田 白李

方言を訳してもらう標準語
うさぎ小屋何十万の土地である
肩書へ多情多恨の裏がある

世話好きがじつと我慢してる顔
嫁った娘に合鍵持たせてどうする気

大阪市 中西 兼治郎

ナイターをドラマに変えた雨の脚
投票の悪さを雨のせいにする
仏具屋の深夜鉦のそら音きく
中風のふるえる腕に自動巻
源氏平家かちまけないのもホタル

大阪市 欄 蘭

新築へもうゴキブリに住みつけれ
病院で待つ忍耐力を培われ
賽銭箱のアルミ貨うれしいト混じり
外れても詫びを言わない天気予報
忠犬ハチ公街頭演説聞き飽きる

桜井市 河合 茂雄

太陽の高さに夏の花がある
スチュワート天から降りて恋をする
渡り鳥方向音痴は従っていく
人間を怠けさせてる自動ドア
海女でさえ息の続かぬ日は上がる

倉吉市 渡辺 菩句

モーツァルト曲を聞いているロバの耳
落雷のみじかい生涯を読む
こちら向く目も鼻もない麦藁帽
このゴルフボールはどんな爬虫虫卵

加賀市 細呂木 魯 木

良心に恥ずる事あり赤信号
乱舞する螢の光修羅のよう
銭湯の鏡で知った丸裸
自殺か他殺か雀一羽死んでいる

唐津市 木 塚 素 石

本音だけ言う人嫌いママの笑み
新議員心にかぶせたアデランス
水くさいこと嫌われる従兄妹寄
つぶされた顔のでっかく脂ぎる

姫路市 梅 鈴 庵 朝 翁

戻らない永の別れへ線香立て
月給日奥さんチャントバーマ当て
もう言うな俺の仲裁不服なか
水喧嘩雨が流して悔いのこし

奈良県 宮 川 古 都 路

身ごもった嫁よりお腹大事がり
聴診器暗示にかかり気も軽く
都合よくねぎを背負った鴨が来る
満員車甘い化粧に好き嫌い

境港市 細 木 歳 栄

燃える陽を恋うときやら木うなだれる
犬の仔を拾い勉強手につかず
なつかしき人の噂の盂蘭盆会
もつともとおのれの未熟自答する

高槻市 田 崎 あき子

ふるさとの海が見え出す里帰り
ひとときの海に童心取り戻し
療養者寂しくなれば便り書く
左前の浴衣も交じるお縁日

豊中市 田 中 正 坊

北海道の旅

妻の遺影抱いて翔び立つ北の空
どさんこのガイドあなたも田中さん
手づくりのバター飴売る修道院
霧の中見えるつもりでとバスガイド

交野市 山 本 テルミ

横峯寺大師にしかとむかえられ
幽冥の絆がローソクゆれ動き
お遍路もバイクで走る時代相
線香の煙が邪心を消して行く

岸和田市 島 崎 富志子

娘の夢は拡がり母は小さくなり
母に似た後姿に歩が止まる
バス停に善意の椅子が二つ三つ

島根県 山 根 峰 雪

二台目の小型テレビは老いの部屋
祖母の肩たたいて子等に示す母
甲子園土を涙の手で集め

自選集

野村太茂津

暴力追放町ぐるみの壮挙なる
盆帰省逢えるひとあり踊りの輪

水粉千翁

神經症の愚痴を宥める無神經

ちよつと氣どつて大の男を戒める

バトンタッチまだ出来そうもない走り抜け

二度と起てぬ腰で特訓から帰り

男は駄目ね女史も男に負けたらし

山田静水

夏白く風青く人背伸びする
茶に座り直して無心取り戻す
孤に耐える茶筌のおおらかに動き

金井文秋

妊つて娘いよいよ他人めき

落ちてない妻が稼いできた小銭

盛大だったやかましかったお葬式

尋卒へ指紋だらけの辞書がある

總理殿碑文の文字が読めますか（八・六忌）

藤井明朗

咲かないかんと思つて咲いてくれる花
読んでも脳へは届かない眠氣
見込み違いに元もとれない値を下げる
さてとなると形見にならぬ肥満型
生き残る知恵を小さな虫も持つ

市場没食子

夏の宵恋の花火に燃えている

非行の芽を摘む親子のデイスカッション

肩書は抜き思ひ出の酒を酌む

女遍歴しても子なしで従弟逝く

逢う度に不倫な業をまだ重ね

背をピシヤと姉妓ちゃんそんなアホなこと

寝付きのええことも長寿のまた一つ

洗濯機中途でほり込むものが出来

新岡 回 天 子

金なくて死ぬるものかと矢張り金

真黒なボート日焼を持ち帰り

嫁の土産つけものから変った都会色

停年になれば植木で飯が食え

言いかけて見たが黙った老いの視野

月 原 宵 明

弘達が出ると放談らしくなり

紅つけた小指で利いた酢の加減

聖職でない先生の定期券

手を出さぬだけの痴漢がうようよし

通夜の席味方ばかりとも言えず

本 田 恵 二 朗

道連れの方言葉楽し気まま旅

蛙もう井戸端会議聞き飽きる

悪友は佳きもの本音吐き散らす

背に腹をかえる特技を持っている

女医さんの笑くぼに病魔吸い取られ

人形の視野で動いている女

このビルの噂を溜めた地下喫茶

天皇と対話どっかがユーモラス

けったいな石を拾うてきて磨き

てのひらで睨みを効かす雨蛙

正 本 水 客

聞き役にまわって心まげていず

藤棚にきて風船は泣きじやくる

別れたい男と風を聞いている

行こ行こ巧まぬ母のユーモアで

回れ右指をくわえてはおれず

若 柳 潮 花

結び目が解けたら切れるかも知れぬ

夢にまでせせらぐ音を聞くあまご

身変りに死ねたらなぞと嘘を言う

誤植したまんま一生添う夫婦

かずら下舞台の汗が沁みとおり

尼 緑 之 助

あらそいは尽きず地球はまるいの

雨やめば時をのがさず蜘蛛の陣

きつと来る地球の土の大逆襲

焼酎はくすり南に大長寿
雨だすというから海を中止する

河村日満

胃のストに遭うてとうとうダウンする

胃カメラの注意事項に嘘がある

切られるは覚悟の上のカメラのむ

胃カメラへ疲れ果てたよ歳なるか

胃カメラが知っていてつくいのちつく

工藤甲吉

一寸の虫で金力跳ね返し

長長と長長と書く懺悔録

納税通知書気分が悪くなり

料金別納は面白くない手紙

新聞にきょうも新たな晒し首

大矢十郎

下積みへ神がほえむ三代目

正直の宝を見たり大往生

善人の死角の中に不動産

断末魔の音でピーポーすれ違い

日本語の何一つ無く日本車

残暑御見舞い申し上げます

きやら木川柳会

米子市旗ヶ崎七二五—二 石垣方

青戸田鶴 田中亜弥

足立由美子 津村千恵子

井上つる子 寺沢みどり

大田みさと 野坂なみ

神崎あかね 林瑞枝

門脇晶子 林荒介

桑原伊都 増田竹馬

雑賀美代 政岡日枝子

沢田千春 茂理高代

菅井知子 八木千代

田口寿子 石垣花子

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

橘 高 薫 風

刑のごと渡る深夜の歩道橋

時 末 一 灯

巻頭の句である。仕事疲れにしろ微醺を帯びてにしろ、歩道橋を渡るのはつらい。刑のごとで、足枷をひきずる思いが伝わってくる。生活前線に立つ人物の深夜の影の重さだ。火の彩に紡ぐと止まる糸車

八 木 千 代

この句と並んで「糸ぐるま逆に廻せるものならば」の作品がある。配偶者の死から歲月は経過すれど思慕の情は薄れぬ女心が、諦観にまで高められて行く。

離ればあんなにきれいだ都会の灯

玉 置 重 人

山上から見下ろす灯、海上から眺める街の灯は、正に百万ドルと言われるだけのものがある。喧噪と悪徳の渦巻く灯とは思えぬ。

税務署でドアの軽さに戸惑いぬ

嘉 数 兆 代 賀

重い心をひき立てて来た税務署のドアが意外な軽さで開いた。拍子抜けしたような気がしないでもないが、こんなときはとんとん拍子に事が運びそうな気がする。

買い被られて嘘が大きくなってくる

西 山 幸

路郎の句に「その嘘に女は縋りついてゆく」というのがある。一つの嘘から次の嘘へ雪だるまのように嘘が大きくなり重ねられるのだ。この作品の嘘も大きくなるのだが、結びの味が微妙だ。上句もまた当を得ている。

共稼ぎだらうか風鈴だけが鳴り

越 智 一 水

セールスマンか先生の家庭訪問か。何れにしても空疎な感じの良く出た作品。軽みの句。父の日を黙っていつもの刻に出る

小 林 孤 呂 一

こどもの日、母の日、父の日とめぐって来るが、父は頑固ながら寡黙で堅実だ。翔ぶこともなく右顧左眈せず、マイペースあるのみ。結び目へ女の指がみな動く

都 倉 求 芽

岸本水府の句に「美しい指みな動く酒の肴」というのがある。指がみな動くところは同じだが、上五の新しい発見の手柄で、剽窃の一手手前で止まり、別の趣を示している。

貧しくて貧しいことが言いだせず

菅 井 とも子

人間は弱いものだ。少しでも自分を良く見せたい、良く見られたいと願う。貧しいと心まで貧しくなるものなのか、さらけ出すこと

を躊躇するのである。

北向きの枕にもなる船の旅

松 岡 三 吉

三等船室で思い思いの向きに寝ているときふと船の進む方向から推して、これは北枕西向きの姿ではないかと気付く。船の旅、それもエコノミーな船旅での、作者の楽天的な所感が余すところなく出ているではないか。せんべいを焼く目で観光客見られ

村 上 春 巳

軽いがベテランらしい観察力に富んだ句で作者の長らく住居をした観光都市奈良のスケッチらしい。私はせんべいを焼く所には馴染みはないが、箕面の「紅葉のてんぷら」を髣髴とさせる。

宿命と悟り木魚は耐えている

森 田 カズエ

世の中にはおかしなものが沢山ある。木魚がその一つだと作者は思うのだ。どうして叩かれてばかりいるのだろうか。叩かれるために存在する因果な木魚は、その形が頭のようなのでいけないのかも知れない。普段は何気なく見過しているものが、気になり出す。

伊予柑一つ車窓に置いて青い海

谷 真 風

密柑の産地は伊予も紀州も青い海の国だ。常套の句ながら捨て難いムードを持つ。

此の家で一人になった日と思う

北 野 久 子

男は死後のひとりを思い、女は此の世のひとりを思う。老いはかなしきかな。

川柳太平記 (64)

川柳の群像

浅井五葉

東野 大八

—大仏の鐘杉を抜け杉を抜け
—糠袋いわくあんたはお妾か
—行倒れなるほどという姿にて
おなじみ「五葉調」の名句である。
五葉

情川柳に磨きをかけた。いわばその後の「
傘調」の基脈は、五葉の句法に負うところが
少なくない。

本名浅井林之助。明治十五年（一八八二）
九月十七日大阪生れで職業は銀行員。二十五
歳のころ誌売新聞柳壇（而笑子選）に了軒と
号して投句をはじめ、その後小島六厘坊中心
の大阪柳壇草分けの頃、五葉と改め、六厘坊に
次ぐ達吟家として当百、日車、松窓、ひさこ、
青明、路郎、水府らと活躍した。

五葉は麻生路郎より六歳、岸本水府よりは
十歳のいずれも年長である。大正二年創刊の
「番傘」発刊の創立同人で、水府は当百より
むしろ句の上では五葉調に刺戟され、その抒

反久良伎、親剣花坊で伝統川柳を革新し、
新川柳の確立を目指す六厘坊、青明、日車、
半文銭、路郎らは、その新川柳運動を展開す
るためには五葉の抱き込みを図ることが先決
と考え、さかんに説得工作を行ったらしい。
大正四年十月発行の「ばんがさ」は「青明追
悼号」だが、この号に五葉は「青明君と僕」
と題しつぎのように述べている。

「その時、六厘坊君が主にしゃべりつづ
けた。今後の方針について、僕の抱負の写生
不朽論を聴いて絶対に僕の意見を抑えた。六
厘坊君は、新しい努力によって他の道に出る

るよう懇々と勧めた。青明君も六厘坊に賛成
して僕に遠慮勝ちに再考を促した。

僕は考えておこうといったが、僕の決心は
固かった。僕は遂に其夜不快の内に二人を送
り出した。考えてみても直ちに二人のその意
に一致することはできなかった。——が短詩社
の会には欠かさず出席した。（略）全く夢中
だった。自分の思うままに主義なく句に深く
入って課題の採材のみに熱中した」

さらに五葉は、その翌年の同誌六月号に

「如何なるものが川柳なりやと問わるるの
は厭也。川柳なるものを見て成程と首肯せら
れたき也。川柳は説明すべきものの限りにあ
らず。成程と首肯されたる時に、川柳の真意
はその人に渡し終りたるなり。時に脱線はそ
の人の勝手也。見る人の眼も勝手なり」

「五葉さんは五葉さん自ら称することく、
実に「川柳屋五葉」である。といっても決し
て川柳を商売にしているという意味ではない
——五葉さんは川柳は生れながらにわが身につ
いた、ちよつと他人のまねられぬ、とうとい
持ち芸であるという堅い自信を保って、それ
を信条とし、また楽しみ愛しながら生きてき
た人のように思われる。五葉さんの川柳はど
こまでも芸である。しかし「芸術」とは自身

で思つてはおられぬ。「川柳屋」とは自負謙遜の意が含まれている

とは番傘同人木村小太郎で、古い「東京川柳」に五葉百句の序文に書いている。

以上に引用した通り、五葉の川柳に抱く信念は徹底した「写生吟主義」である。五葉の書いた引用の「青明君と僕」のなかに出てくる「短詩社」とは、明治四十四年に結成した今でいう前衛川柳派のことだが、水府は

「柳号を本名とし、短詩と正面から取組もうとしたのがミソ。然し二号で潰れた」と当時の「矢車」誌に書いている。水府十九

歳、五葉は二十九歳。ともあれ五葉はそのスタートから「川柳とは写生吟なり」の信念でその生涯をこれ一筋で貫き通している。

「五葉君と初めて顔を合わせたのは明治39年の夏ごろで、ある川柳大会で隣り合わせてからだ。私（麻生路郎）の市岡時代（明治44年ごろ）は、つい鼻の先に住んでいたのので、気楽に往来しあった。大正の初め私が上京した頃も毎日のように気軽に文通しあったもので、彼の虫メガネでみるような細字の楷書の文字が懐かしい。「矢車」に出句をすすめてくれたのも彼だった。私がある職を離れたとき句を作らんとしても

— 辞職して何をか言わん植木鉢 五葉
の迫力ある名句に阻まれ一句も辞職の句が作れなんだ」

とは路郎の五葉追憶談の中にある。

五葉の死去したのは昭和七年七月六日で十五銀行市岡支店長の職が最後だった。享年五十一。寿岳宏道信士で臨終の一句は

— 小便だ大便だとして人の末 五葉

と伝えられている。没後、番傘川柳社では、終戦まで「五葉忌」の句会を持っていた。

「インチキ先生の多い中で五葉氏は名実共に川柳のほんとの先生だった。川柳界から「先生」と呼ばれるのが大嫌いで、それ故に「川柳屋五葉」とのかくれみのを作られたのである。氏は川柳生活もその日常さながら地味の一語につきるのであります。

氏はかつて大毎柳壇の選者でありました。

氏の偉さは短冊を売ったり、選者の報酬にあついたり、放送を売り込んだりせず、売名営利の圈外にあつたことであります。しかしひと頃はヘンペンのペンネームで文壇的にも知られ、八公の名の軽妙な文章を各新聞雑誌に出されたのも、すべて五葉や実名を離れ、たんなる手すざびとしての余暇つぶしのことでありました。

ある雑誌に木村半文銭氏書いていわく「端然と座していられた、あのつましやかな五葉さんの姿は忘れられない」（昭和七年八月号「三味線草」）。五葉さんの死「森鷗牛」

五葉は先の青明追悼号でこう書いている。

「青明君の句はその頃の新体詩風からきた最主観のきつい魔のようなものが多かった。もつとも何か深い期待とか、自負とかがあつたのだろうか、僕は常に青明君の作品を根本的に了解するに苦しんだが、始終傍かされて

いた事は僕自身に自白する。ともあれ終りに言つておくが、青明君が日本においての短詩創造者であつた事は忘れてはならない」

五葉は彼自身の道に対し、相反する立場にある藤村青明をそれなりに畏敬しながら、その句を理解しようとするが、どうしようもない親友をもて余し続けたらしい。

付記しておくが藤村青明は大正四年八月、須磨の海水浴で水死した。享年二七。

— 昼顔は打揚げられた傍で咲き 青明
がその前日彼自身が作つた句会吟であつた。

★今回は西田当百

俳風柳多留廿六篇研究(十二丁・十三丁)

石田 晋一・南 得二・小野 真孝

本多 正範・石田 成佳・大屋 六郎

八木 敬一・鈴木 黄・多田 光

故岡田 甫

194 一寸した雨を降らせる大神楽

南||太神楽の演技の中で本式の水芸があつたものか。

むら雨を丸くふらせる太神楽 五四・16

時ならぬ曲水をする太神楽 三七・24

と類句あり、「丸く降らせる」ことから、

つゝ、がなく茶わんを戻す太神楽 五・2

茶碗に水を入れて、竿の頭にのせ、皿廻わし

の要領で廻わせば水が円く四方に飛び散るこ

とになると想像してみたが、何れにしても大

道のことと簡単なものかと思う。

石田 晋||賛 小沢昭一の放浪芸の説明の一に

「伊勢の太神楽」では現在でも高い木の上に

皿をのせ、五色の雨を降らせる芸があるとの

ことである。

多田||賛。

岡田||同。

195 そりや蛇と火縄ておどす野かけ道

南||春先は蛇も冬眠から姿を現わす時季で、

行楽の人を驚かすことも間々あることから、

野掛の連れを驚かすのに、喫煙用の火縄で

「そりや蛇」と威かす。行楽らしいはい

だ気分のこと。

石田 晋||賛。野掛けと煙草は切っても切れぬ

ものか。

小野||賛。煙草のみは吸えぬとなると余計に

吸いたくなるもの。

多田||賛。

岡田||同。

十三丁

196 百人一首御シの字のつく歌て苅り

小野||御の字のつく歌とは御製であり、この

場合、天智天皇の「秋の田のかりほの庵の」

「」を指す。この歌が第一首でもあり、これ

にかけてかるたをとり始めるのを刈るといっ

たもの。

本多||「歌て苅り」は取り始めより、取りお

さめではないか。歌カルタを天智天皇御製の

「秋の田の……」の歌で取りおさめた、とい

う意であらう。

八木 御製とかりは庵のをひつかけただけであらう。

南 同。八木氏のように考えていました。

多田 「苺り始め」か「苺り納め」かは断定できない。私としては前者とばかり思っていたが……。

岡田 同。

197 後子の月見にハ野分スの巻を書き

小野 「後の月見」は陰暦九月十三夜の月見。中秋の名月の月見に對していう。「野分の巻」は源氏物語の一章。

後の月見と野分が季節が合うことから、紫式部も後の月見の折に野分の巻を書いたであらうとのうがち。

多田 礎稿賛。

岡田 同。十五夜から書き始めたという俗説は有名で「源氏湖月抄」という注釈書までがある。

198 花の無ひ春も賑ふ御本坊

小野 花の無い春とは小春を指す。本坊は末寺から本寺を指している語。又寺で住職の住む所をいう。ここでは、上野東叡山の御門主一品親王輪王寺宮の御座所を指す。

句解は、元来上野の山は桜の名所であり、

花の頃にはそれこそ全山お花見の群衆で埋まる程であるが、花時にあらぬ小春にも両大師参詣の善男善女で大賑わいであるの意。

花も葉もなくたってから御本坊

一五・二

御本坊花の外には御ねり也

二三・二六

多田 賛。

岡田 同。

199 桃の宵奥ハ雲井の調子也

小野 「桃の宵」、「川柳大辞典」には「桃の節句、即ち雛祭の日の夕の事」とあるが、二日の宵節句のことではあるまいか。雲井の調子は琴の調べの一つ。三味線の二上りとか三下り等の如きもの。

桃の節句の内裏雛と雲上の利かせの句である。

宵節句でお座敷には内裏さまがきらびやかに飾り立てられており、奥では雲井調子の琴の音が聞えて来るといふ春宵にふさわしい句である。

しづが家も雲井にまがふ雛祭

一〇二・一四

本多 賛。「雲井」を調子のみのようにあるが、八橋校校作の琴組曲十三曲の一の秘曲であり、それが雲井調子なので「雲井の曲」と

呼ばれる。本句の雲井は曲名と琴の調子との秀句である。雛段の利かせであることは礎稿の通り。

多田 賛。狂歌に「かさ、ぎのはしは雲井のてうしよくかけ渡したる琴の通ひ路」(徳和歌後万歳集卷三秋)

岡田 賛。

200 どこへ行ク気だか二条を逃ハ逃

小野 「伊勢物語」によれば、在原業平が二条の后と通じ、后をかううじて盗み出し摂州三島郡の芥川に至る。句はこれを詠んだもの。つれてにけなよと「じやうのきささいひ

二〇・四

出ハ出たが二条の后立ちのまま

二四・一二

本多 二条は二条の后と二条通りとの秀句。それだけの句である。二条の後の名が見えるのは流布本「伊勢物語」でなく、異本とされる。

多田 賛。出典はもちろん「伊勢物語」が基礎であるが、謡曲「雲林院」に「彼の遍照が連ねし花の散りつもる芥川をうち渡り、思ひ知らずも迷ひ行く」などから「芥川」が出て来たのかと思う。

岡田 賛。



黒川紫香選

富田林市 藤田泰子

恋語る手話にことばが踊り出る
沈黙が続くと痛む親しらず
通り雨それから心濡れたまま
旅に出て乳房に似てる山と会う
あめ玉をたつぷり呉れる他人様

尼崎市 丹下玉子

自惚の強い女で株を買う
女の耳少し紅さす花言葉
噛み切った女の糸は赤い糸
考えのまとまらぬ夜は耳鳴りす
花の下逢う日は紅をうすくする

八尾市 高杉千歩

少しずつ惻口になって夏終る
米櫃一ぱい五十日はめどがつき
ゆきずりの人からもう長電話
来ぬ人を指折っている昼の夢
母恋いし野犬が走る月の下

西宮市 紀市郁栄

喪の家の矢印を追う蟬しぐれ
警官が走ると人が寄ってくる
貧しさが群がるスラム街の修羅
ふりかえる歳月虚しい風ばかり
淋しくて空に向って不貞寝する

西条市 片上明水

終点で甘い話が消えていた
都会から帰った鬼の手が小さい
補聴器へ街がだんだん狭くなる
廻れ右すると歩幅が広くなる
胃の痛むはなしを小さい文字で書く

東予市 小山悠泉

網元に頼み佳き日の桜鯉
税務署の目は小細工と見た帳簿
氷囊へ看護婦笑顔添えてくれ
木の間洩る風が涼しい奥の院
配られた同意書同意出来ぬ金

尼崎市 角 野 かず子

家中が寿司の匂いになる祭り
お寿司だけ食べに来たよな見舞客
閉山の坑にアワダチ草茂る
これつきりにしたい手紙を焼く煙
付けまつげ取った素顔のしおらしさ

尼崎市 春 城 年 代

笛の音に惹かれ来た野の夕茜
さわやかなところを受けて客となる
増築のカーテン屋来て締めくくる
人知れず扇の風を向けられる
夫寝息外はしずかな雨になる

尼崎市 西 村 かすみ

海峡の渦へ昨日の悔いを捨て
花活けて心の暗示解きほぐす
平凡な暮しカーテン替えてみる
小走りに寄って女の久しぶり
切り札を捨てた女の一人旅

高槻市 竹 内 花代子

脱ぎ捨てて今日の暑さを口にする
犬だけが雨に濡れてる散歩道
バス発車そろそろ旅の風になり
黄の色に咲いたカンナ物思い
美しい女をねたむのも女

大阪市 稲 本 凡 子

蛇口から出る水は律義もの

腕組んで話の裏をよむ無口
這上る蟻を落してるむなし日
ライバルの健康過ぎるに腹が立ち
背延びしてると金の要る事頼まれる

西宮市 奥 田 みつ子

おすすめにニンマリ笑う掏摸の指
玉のりのピエロ静かな眼の色で
バックミラー白い単車の赤い服
紅をさす指に女が残ってる
若い肌鏡の中へ置き去りに

今治市 矢 野 佳 雲

人減らしうちもロボット買おうそうな
反抗期第一ボタン掛けてない
大物が掛るとクモの方が逃げ
洋モクを配りあちらの話する
貯めたまま死ねぬとささやかな奢り

尼崎市 田 中 晴 子

叱るには月の光がまぶしすぎ
病院の夜勤へたこやき包ませる
お見舞へばら寿司の酢をゆるくする
小踊りをしながら朗報もってくる
気に染まぬ話へたたむ切口上

尼崎市 関 口 幸 子

嫌な奴八月十五日誕生日
出勤に団地の亭主はゴミを提げ
昼の夢間違い電話で起こされる

口下手な男がくれた髪飾り
応接も食へるも寝るも部屋ひとつ

熊本市 宇野昭代

他人事気になる程の余裕出来
返信の来ないポストが夕焼ける
よく流行る医者で誤診の不幸せ
少し翔んでみようか女だけの旅

熊本市 有働芳仙

あげ底のいくさで城が一つ落ち
そのあたり死場所もある宿の下駄
切れそうで切れぬ夫婦を不思議がり
家中の流れを変える孫が出来

羽曳野市 麻野幽玄

待ち合す場所へ雨まで考えず
甘党屋へ妻と立ち寄る寺詣り
三歩間を開けて夫婦の狂わぬ歩
ゲートボールへまだ情熱が湧くを知る

和歌山市 中尾まゆみ

全身に夏を纏んだ青春譜
そこまでの言葉を抱いてシャボン玉
童話から覚めてざわめく夏の樹々
かがみの向こうで妖精になる少女

尼崎市 伊藤春子

耳よりな話しばらくあたためる
伴せな指で涙はまだしらぬ
たいくつを知ってた様に手紙来る

通り道花壇の荒れが気にかかる

熊本県 大川幸子

手ばかり派手に叩かせにげてく蚊
水たまり女はそつと振り返る
何もかも素直に甘えてくれる嫁
大ジョッキあつと言う間の白い指

尼崎市 吉永伊三郎

父の日にお情けのスローボール打つ
旧友の計を聞く遠雷の彼方
歩幅を合せてくれる人来て欲しい
ギャル神輿天神さんを胴上げし

伊丹市 樫谷郁子

映画東京裁判を見て二句
東京裁判隣の席に居る夫
裁く人裁かれる人同じ人
誕生日覚えてくれていた夫
禪寺に小野小町という菖蒲

富山市 舟渡杏花

滑り易いことばを一夜練っておく
そのワケは波もはかれぬ身投げいか
修羅出土ひとりドラマへ酔い痴れる
行き先を告げぬ抵抗だつてある

大阪市 萩谷まさ

衣替え樟脳の匂いとおしむ
診察の合間静かに作句する
ネクタイの色思い切り派手を買う

何十年訛の抜けぬ夫婦でい

青森県

荒田つる

大阪府

古川美津枝

乗客がゴミ焼いて居る無人駅

遊山にも行かずに溜めてぼつくり死

頼る子が呆けて母上まだ達者

震度3手抜き工事があばかれる

大阪市

板東倫子

ひいき目に見ても過保護なうちの孫

吝嗇でなく遊び方知らぬだけ

旅に出た途端に留守が気にかかり

美男子に産んでもらった身の不運

尼崎市

春城武庫坊

青い箱ピンクの未来つめてみる

末広を持てばおどける癖がある

胸毛ある男が星座見つめてる

サブリナパンツ年齢なんか気にしない

尼崎市

矢萩貞子

孫の守り頼まれ昼寝共にする

手のひらへ一発落とす小さい尻

ドア一枚はさみ団地の受け答え

室戸岬海から赫い陽がのぼる

守口市

森川まさお

声出してみたくて大きな欠伸する

猫のため戸をあけ漁師早寝する

雨の日の葭簀を閉ざし茶漬喰う

ひとりくむ酒にテレビは八代あき

妻退院やれやれ父娘風邪をひく

ゴキブリの方が恐いと言っている

此の一票平和の願いまふたとじ

稼いでも宵越しもたぬと格好つけ

松原市

佐藤藤子

清流の天魚は訛り聞き分ける

祈るとき女は母の顔になる

釣り人もやんまも夕日に溶けてゆく

目分量母は確かな塩かげん

名古屋

藤井高子

家計簿に誤記なし妻の座を固執

人形が六法全書抱いて来る

巧言令色河童の皿がひび割れる

やせ犬の胃の腑に沁みる冷や奴

寝屋川市

平松かすみ

定年らしい夫婦が並んで写経

坊さんの首にもピップエレキバン

子の病い一家総出の神頼み

釣り銭に温もりくれる小商人

藤井寺市

赤木和子

ともだちになろうよ土手の彼岸花

三つめの秋をむかえたのに別れ

親の目の届かぬとこでいけずする

甘やかしてしまいう末っ子の笑顔

岐阜市

市川鱈魚

ワイングラスの影に男の悪企み
蕎麦盛り天に広がる千枚田
先頭で蟻もうしろはふり向かず
ジャスミンの体臭男下駄を干す

尼崎市 山田保蔵

五合目までバスで行っても富士登山
スキー服に固めて梅田街散歩
ウエートレスお盆の裏で文を書く
露天風呂見ないでくれよお月さま

大阪市 津山刀水

月一つ残して今日の窓しめる
ほかに智恵がないので竹を踏んでみる
兄さんの仲間を妹不潔がり
気ごころが知れて保険をすすめかね

唐津市 浜本ちよ

字も知らぬ児が大声で絵本読み
歯の悪い夫においしい粥であれ
野の花が有田の壺につつましく
ゲートボールしわの中まで陽に灼けて

西宮市 藤村宏子

玉砂利に帰国の安堵ふみしめる
座りだこ浴衣の似合う人らしい
恵まれているとチャンスがわからない
久しぶりの友のハガキが濡れている

血の流れ親父と同じ祭り好き
大阪市 今西静子

四六時中空腹だった負けいくさ
並ばせて皆さんと呼ぶ保母若し
遠足が次ぎ次ぎ続く子沢山

兵庫県 脇田米朝

無口でもかゆいところに手がとどき
老いたれど火種はソツとあおいでる
適当に距離があるので仲がよい
肩書きが重過ぎそろそろ胃が痛み

西宮市 西口いわゑ

美しく老いたと言わせたい鏡
何人に返事はしても持つ一票
仕舞風呂ゆっくり明日の案をねる
誤解とけ一際花も美しい

藤井寺市 前山美恵子

ままごとにそっくり家庭をさらけ出し
寝ころんで雲の行き先聞いてみる
ピーポーで目覚めてからが寝つかれず
先生の赤鉛筆に誉められる

名古屋 越村枯梢

ただひとり知らない街でコーヒー飲む
合掌の手を抜けれぬ花鉢
保育園に預けてママはパチンコ屋
ガムを噛む女に会った不仕合せ

尼崎市 大江かね子

みほとけの前に息子がいる安堵
景品が当ってはずむ市場籠

母さんでよかった皿の割れる音

豊中市

満仲きく子

イヤリングこんなに足取り軽くなる
ごちゃごちゃと入れて楽しい小引出し
いさかいのあととやっぱり水仕事

吹田市

井上照子

ウインドー横目でチラリと身繕い
停滞のバス待つ人のこわい顔

幸せの一つよ母のなお達者

大洲市

米沢暁明

見た通り聞いた通りに子は話す

平凡にやがては消える風船か

月見草も聞いているらしい話

熊本市

高野宵草

標準語話せばアナの堅さもち

男だろ女だよ揉めさせる奴がゆく

横顔の父は意外に丸い鼻

藤井寺市

前山とみえ

かいわれ菜皿に育てて足る暮らし

心齋橋ガス灯映す水がない

花の名はリレーで万歩ハイキング

西宮市

津山冬子

夏の部屋水蜜桃でもてなされ

パラソルを開けば初夏が揺れて来る

ライバルにちよっと日傘で身をかばい

八尾市

宮崎シマ子

船溜り大声で海の荒れた事
老姉妹電話の声が大きすぎ
石切さんへ詣る病の百度石

寝屋川市

高田てまり

たまさかの外食女忘れさす

弱音はくぶん愚痴がふえてきた

歯抜けした様に田んぼに家が建ち

宝塚市

丸山よし津

日暮れ道歩幅の違う足合わす

勧誘ヘインターホンのそつけ無さ

子燕を並んで見上げるランドセル

米子市

澤田千春

広島に夏に消えないきのこ雲

ネクタイが踊る新任教師です

悲しみを見せぬメガネのすみれ色

八尾市

葛幸子

石庭の石それなりに名付けられ

石仏も屋根つきもありさまざまに

あれこれと明日の旅路のまくらもと

寝屋川市

岸野あやめ

老人ホーム昔小町の無残なる

ある安堵朝顔の蔓伸びてゆく

一人言だんだん七五調になり

水戸市

上鈴木春枝

頷いてくれる瞳を支えにし

胴上げが監督急に軽くする

だんまりの妻をあきらめ早寝する

岡山県

土居 耕花

パチンコを出ると水虫痒くなる

貧乏でよし飛行機が又落ちる

不機嫌な玉子焼きから睨まれる

豊中市

小林 一夫

火葬場の煙突さほど高くなし

ひき出しの奥につまらぬものを持ち

おそろしき色の一つに鳥居の朱

松原市

本多 洋子

絶好球見逃している下心

久々の休日美味しい窓の風

迷い道少し冒険したくなる

近江八幡市

前川 千賀子

やがて子のしつぺ返しを書く日記

成り行きに任せてみるさ梅雨が明け

花ことばわからぬままに花贈る

寝屋川市

堀江 光子

痛む歯に明日診ましようという返事

立話だけで別れためぐり逢い

熱さまし飲めばうつつに雨の音

諫早市

江副 二牛

割勘と聞いて気楽な箸になり

順風に乗って初心を忘れかけ

出張へ浮気封じの一通話

西宮市 朝山 千世子

梅雨しとど君在りし日の旅日記

ラムネで一刻明治生れが蘇える

程よう笑わせて枝雀の芸に聞き惚れる

青森県

波 ただお

活け花をしてる女房の顔の艶

雑草も活け花にして妻の趣味

軒下でサーカスしてる女郎蜘蛛

高石市

浅野 房子

海鳴りを遠い心で聞いている

敗戦に海も泣いてた鰯雲

海も風ぎ残照映えて旅終る

大阪市

野田 君枝

宅配便だけがふる里近くする

採りたてのもずくの青し里の味

花冷えの雨しとしとと立夏なり

吹田市

栗谷 春子

ニューフェースの猫が来たぞと庭を駆け

使い上手と業者がほめる古い家具

間違いの電話もつづく怖くなり

尼崎市

佐藤 美代子

夫婦して赤字セールの列に着く

氷屋でチビツ子列車に乗ってやる

千松がコップ並べてドレミファソー

和歌山市

後藤 正子

思いやり欠くと平行線になる
午後三時日傘ふたつが会議中
家族には黙って金魚埋めた朝

熊本市 北川 一進

風呂敷の重さ検事の無表情

運転手おぼえただけのガイドする

ガイド嬢小旗をたたむ奥の院

兵庫県 森 脇 和 子

だまされてみよう仮面をつけたまま

夢組んで大きな椅子がほしくなる

見栄張って背のほころびにうろたえる

竹原市 石 原 淑 子

平凡な日々こそ青い鳥と知る

炎天下向日葵までがうなだれて

病床でやさしい言葉だけが言え

竹原市 岩 本 笑 子

長くつがはきたい双生児雨を待つ

初恋の焼きトウモロコシの思い出よ

はおづえをつくと美人になる妻で

西宮市 松 本 一 郎

水平線地球の丸さ見る岬

笑いたい時もあらうに仁王さん

株主で古巣の収支聞いている

守口市 結 城 君 子

お茶会の招き晴着を工面さす

かるかんで今日は玉露にしましようね
余計者の意識漁村を走り抜け

大阪市 堀 口 欣 一

ひとり飲む酒のうまさよ青田風

一人寝の部屋ありそれで有難し

夏の月近江舞子に出たところ

島根県 北 川 民 子

梅一つおかゆにこころが添えてあり

父の日はせめて九時まで寝ると言う

突風のごと孫きて孫かえる

今治市 新 居 田 胡 頼 子

考えの浅い女の近視眼

スタートに立つどの顔も満を持し

幸せな日々もて余す爪の伸び

愛媛県 八 塚 三 五 島

湯加減の良さにつられて出る軍歌

抱き合ったベンチ蜜蜂よけてゆき

デパートに老婆の買える服が無い

芦屋市 上 田 佳 秋

バイトして買ったナナハン叱れない

賛成の意見は大きな声で言う

嫁からの小遣いパチンコ行きなはれ

和歌山県 寺 田 裕 美

朝市は牛蒡の泥から売り切れる

覗かれてだんだん赤くなる西瓜

ライバルへ手の内見せている余裕

寢屋川市

立床晴風

待ちわびた梅雨を合唱する蛙

岩肌の土へめり込む花の精

一円が踏み潰されるアスファルト

岡山市

石黒若恵

百姓根性損と知りつつ鎌を振る

カラーの屋根並び故郷の砂かわく

顔を刺してくれる姑あり午下り

吹田市

横山青果

マネキンの廃品人を騒がせる

ナイターは休み原稿書き終る

気まぐれな愛もあります花言葉

高知県

曾我部裕

折り目なきズボン飯場に吊つてある

水足して金魚の視野を広くする

職引いてパチンコだけの人になり

岡山市

吉末謹太郎

その先を読んで誘いにのつてみる

雨上り和解する気の靴をはく

どしゃ降りの中で疑惑がなおつる

枚方市

二宮山久

縄のれん明日を信じて輪がゆれる

好きだから言いたいことは言わせとき

肩車夕日があんなにきれいだね

鳥取県 羽津川 公乃

職安で屈託のない長い足

思い出をたぐるメガネが惚け始め

サンダル足の足マニキュアも夏の色

吹田市

茂見よ志子

娘に送る帯を中山寺で受け

子等巣立ち雨戸終日明けもせず

産む娘より産まぬ私が安定剤

西宮市

草刈墮駄

駅頭の屋台の灯り梅雨の中

樹の陰で食べるは矢張りアイスクリン

かげろうにゴッホもゆれる麦畑

大阪市

松尾柳右子

夕立へ中断されてるメロドラマ

無造作に束ね髪してよく動き

路地裏の小さな花も蝶を待ち

姫路市

人見翠記

日盛りの犬の寝ざまを見てしまふ

養魚所に稚魚うず巻いてよく育ち

何時までも噂の女将見送って

鳥取県

福田あや子

ヨイトマケの唄がゴム長踏ん張らせ

ゴム風船偏西風に野心乗せ

知恵熱に母も苦労の知恵を積み

和歌山県

山田久子

御年を確かめてからくやみ言う
本心をさらけ出したは予定外
電話より安心させる顔を見せ

島根県

福岡芳枝

強がりをいって妥協の酒あびる

盆栽の抵抗高い値で売られ

今日もまた同じ話で老父生き

泉南市

坂根流水

煩惱も働く汗でみな流し

千枝子死し小督の茶屋は荒れるまま

泳ぐこととつくに忘れ溝をきく

八戸市

島田昭治

誠実と貧乏何故か仲良しで

嘘つきをかけ引き上手と褒めている

雀に餌一茶の心知りたくて

高知県

山下登舟

故里に炭火の匂う囲炉裏の輪

生活の話日傭の歩が揃い

思い切り走ってみたい車椅子

大和郡山市

岡田すみれ

父の日に娘よりうれしい便り来る

折角にメモした紙を探す破目

本日休業買物籠が間抜けする

高槻市

芦田静江

紫蘇に手を染めて八十路の満足感

杉の苔抹茶の客になる想い
先生の袴清楚に子のグラフ

(滝平二郎童画集より)

島根県 東原福子

珍客にされて言いたいこと言えず

遠近に咲いて迎える月見草

まゆ置いて蝶はどこかへ行ったらしい

兵庫県

円増貞子

にわか雨思わぬお人の傘の中

からかつて又荷がふえる植木鉢

母昼寝さめて流しで切る西瓜

大阪府

渡部里美

家中でビールの話すぐ決まり

尋ね来て年寄り目立つ町となり

ふと美人出て来そうな軒の竹

島根県

高尾よし子

中流の味かみしめるハンバーグ

人生のドラマ活字に拾われる

灰皿に捨てた未練のくすぶりを

大阪府

吐田公一

無口だが稼ぐ親父の太い腕

一と粒の種が芽生えた古代蓮

故郷の唄出稼ぎの胸を打つ

島根県

岩佐富子

てっせんの紫好きで女の意地
寡婦の意地汗と涙で子を育て

幸薄き女で働くことが好き

大阪市 朝倉利義

窓ガラス割って逃げない児が一人

新潟県 高野不二

ヨイショで立ちドッコイショで座る歳
そういえば効いているよな漢方薬

島根県 大浦ふみ

孫に手をとられて嬉しショツピング

セールスに言うだけ言われもてあまし
おおっぴらに彼女を語る高校生

大阪市 山脇正之

買いすぎてパンク寸前冷蔵庫
アルバムの中で亡夫は若きまま

大粒の苺は上に並べられ
ハイと言う二つ返事が気に入られ

和歌山市 福井桂子

マンネリに一喝入れてタバコすう
気軽さに町の噂が波にのる

吹田市 西岡豊

寄り添えば自動ドアに似た女

弔問の庭にくちなし匂いきて
芍薬の紅は花心のときめきか

唐津市 前田廣幸

猛犬に注意へボール塀を越し
所により雨を車窓に見ての旅

大和高田市 岸本豊平次

飛びたくてペンペン草が背伸びする
焦点をぼかしておこう娘の縁談

高槻市 笠嶋恵美子

一口が多い女のイヤリング
有無言わず言わせずバックに黒い影

鳥取市 武田帆雀

待つことに慣れ栗の木の下で待つ
隣室にねている職のない肉体

弘前市 田中叶

出不精が留守勝ちだからややこしい
白昼夢田中裕子に逮捕され

東大阪市 小林勇人

出不精が留守勝ちだからややこしい
白昼夢田中裕子に逮捕され

竹原市 佐藤令子

傷心の海にカモメが遠ざかる

一人旅時間があればT.E.L.する子

大阪市 北山悟郎

カレンダーの余白埋めて世話が好き

眠れない言いつつよく寝る老いた母

守口市 長谷川 司

新緑の森に浮かぶ大阪城

鵜飼船月もゆらゆら川下る

大阪市 山本 炬 齊

人格者と言われて意見口ごもる

老境で稼ぐおカネはたかが知れ

大阪市 石谷 忠 良

駆出しというガイドさんよくしゃべり

空罐の錆にも馴れて魚生きる

鳥取県 林 荒 介

吊橋の向う山から鼓笛隊

やがて咲くきつと咲くから種子を播く

鳥根県 堀 江 百 代

ビール一本飲めない夫で満足し

一日を山の温泉に母誘う

鳥根県 灘 尾 民 子

灯の海を泳いでバラに気を許し

一輪の花にも生きる気迫もつ

鳥取市 野 沢 大 漁

ボトル一本外堀埋める武器とする

優しさが戻った日からボケはじめ

守口市 岸 野 キ ミ

老いの部屋花一輪のおもいやり

空梅雨に庭の水にも気を使う

鳴門市 八 木 芳 水

信用というレッテルを貼った店

定年の余白を埋める趣味をより

鳥根県 岩 田 三 和

サボテンに花がついたよ児が見つ

流される内に巨岩も丸くなり

大阪市 服 部 頼 一

童心に帰る祭りの夜の出店

雑に捺す拇印で泣かすサラ金屋

益田市 里 本 たかし

トイレの窓に柿の若葉が燃えている

五月の風診療室を吹き抜ける

大阪市 日 阪 秋 子

梅雨明けて髪を短かくカットする

口程で無いなとおしゃべり聞いている

大阪市 上 田 柳 影

若く見えるので帽子手放さぬ

世故にたけやがて裏切る手を握る

山口県 高 崎 雀 声

トイレ休憩女の決めるバス旅行

左遷地は花だけ快く迎え

兵庫県 山根 左春

率直に意見を述べる現代っ子
鉢うえを植えかえました二十鉢

兵庫県 奥野 テル

紫が好き私のうぬぼれか
点滴を受けつつ天井に詩を浮べ

大阪府 塩田 新一郎

廃坑のレールが雨に又光り
滴りを数えて眠る山の宿

河内長野市 糸谷 春草

荒波を忘れたような日のヨット
新聞の折込広告多い朝

愛知県 国分 甲子郎

愛うすく薄くメロンの核家族
別居しておんなの性に脆く負け

米子市 本吉 宗則

風渡る土手に草笛せがむ孫
雑魚だけのはがしめんと税の網

弘前市 真喜内 實

太陽の愛に餓えてる稲短軀
ブスりんご味のよさから売りきれる

大阪府 平井 露芳

亡くなった雀を埋める土がない

山本芳伸氏死去

はちのすを育てた恩師今は亡く

高知県 小沢 幸泉

太陽の光に秘めた暗さ知る
失敗がないだけ取り柄の亡父でした
(皆既日食)

豊中市 上田 登志実

抽象のトンボは顔と目だけなり
愛の極致母は子に乳含ませる

出雲市 河原 恵美子

雨また雨訳はなけれど髪を切る
打ち寄せる波の生まれはどこかしら

羽曳野市 田中 隆二

ストレスを消す薬なら妻が持つ
やさしさはやさしさである母の愛

和歌山市 桜井 千秀

帰省客溢れる隣は子沢山
千羽鶴折る娘の指にある陰り

千葉県 中村 有人

道路地図我もドライバー一年生
猫好きが猫と会話をしてる時

大阪府 野村 八重

一粒の流れる米に亡母おもい
幸せは達者で働く夫と居る

岡山県 池田 半仙

どの花器に活けても映える白い百合
同窓会七十過ぎた顔が寄り

米子市 門脇 晶子

ちようちんも祭りの夜は幅きかす
傾いて親子の意見すれちがう

米子市 宮 本 佳女男

長寿国あの手この手のボケ防止
趣味に没頭してる仕合わせの老い

指宿市 渡 辺 伊津志

ロボットに右と左を指図され
女体にも見えて色めく夏の雲

大阪市 小 野 風 童

ケロイドを写す鏡がものをいう
蜜蜂がいちごの花に精を出す

泉佐野市 大 工 静 子

要塞と知らず写すも罪は罪 (50年前一巡査の告白)
ゴキブリへ花子と名付け追いかける

八尾市 松 下 蕉 露

断る気見合相手とよく喋り
メーターが上るこの辺で止めてくれ

大阪市 権 安 達 一 郎

誰も来ぬ父の日なんか止めちまえ
誰にでもお前だけやと言う男

大阪市 松 本 た だ し

飲めるもの何でも飲んで達者です
はすかに歩かす酒も友のうち

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

昨晚のトラブル残す蒲団乾す

茶筌置きたたみに静を見つめる日

滋賀県 安 田 志 津

お隣の出来が気になるミニ菜園
バスツアー土産と疲れを持ち帰り

島根県 田 中 ヒデ子

先生のベッドの鶴は二千越し
ビキニから水がしたたる浜の夏

高知市 北 川 竹 萌

七日経て来たら胡瓜が太り過ぎ
お隣の桃熟れきって塀に垂れ

鳥取市 若 林 一 止

十割の利息も恩にさせて貸し
自販機の小銭が好きなおちよば口

東大阪市 三 宅 旭

性根をこめりや初夏にも咲く桔梗
知らぬまにサムライ姿地方自治

和歌山県 北 浜 二 郎

参議選比例代表で新党創む
挽き臼のおふくろの味はったい粉

橿原市 西 本 保 夫

古いから皆が知ってるボクの事
定年へあれこれ引き継ぎたい知識

和歌山県 西 村 重 彦

率直な意見に学ぶ社会版
いつの日かお嫁に欲しい星娘

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 昭和58年5月号

至 昭和58年8月号

◇路郎賞候補作品

(到着順)

野村

太茂津

花散りぬ人恋しさもひとしきり
従容と花は音なく散るものを
俵せのまん中へんで欠伸する
女にはとてもやさしいろくでなし

小出 智子
浦野 和子
高杉 鬼遊

歲月やゆるし合うより他はなし
ドレミファを唱う椅子なら引き寄せる

西山 幸
林 瑞枝

風下で妥協はしない意地一つ
妥協する時期へ仲裁かつてでる
シャボン玉消えぬ思いを追うばかり

小西 雄々
天満三千代

勢いを止める一矢は俺が射る
あつばな親の気配を盗んでる
乳呑児は横目で母とにらみ合う

中川 滋雀
堀端 三男
森脇 善太
樫谷 寿馬

時折りは悔ないようになまけてる

福本 英子

糸継いで継いでわたしを縫っていく

堀江 芳子

後向きになると本当が話せそう

岩本雀踊子

冗談で泣いても女救われる

河合 茂雄

正本水客

良慶さんも男 妻子がいてはつた

八木 千代

水襲があふれて朝を疑わぬ

谷垣 史好

歲月やゆるし合うより他はなし

八木 千代

真直ぐに草も電柱も立っている

西山 幸

殺された側に恩赦はありません

西森 花村

善人になるひは明日からでよい

岩井本蔭棒

娘の会話 彼女彼女は母のこと

高橋 夕花

化粧する間はだまって居てと言ふ

妹尾 春江

税務署でドアの軽さに戸惑いぬ

嘉数兆代賀

相槌を打つ所詮どうにもならぬ事

岩田 美代

小走りですいて来る妻はつとけぬ

古野 ひで

いざという時に無口が頼られる

森井 菁居

心晴れぬ日に梅雨入りと気象台

山口 美穂

乳呑児は横目で母とにらみ合う

樫谷 寿馬

いつ死んでもよいのがよく食いよく眠り

傍島 静馬

黒川紫香

年寄りがおりなはるにと恥をかき

遠山 可住

自動ドアすこし機転がききすぎる

西山 幸

ここだけの話となつて眼が光る

宮西 弥生

薬屋でうんこのかたさなど申し

高杉 鬼遊

母の選った柄は後から好きになる

春です ね玉子料理が主役です
夫留守の静かな朝がものたりず
定年おめでとつとは哀しき言葉なり

猫のひげ何かいたずらする気だな
玉置 重人

すぐ好きになるとは仲人無理を言つ
谷垣 史好

バイバイとだけ外孫はあつけない
原田 明春

楢山に座ると横に妻がいた
山本テルミ

機関銃の様に帰省の娘はしゃべり
榎谷 寿馬

善人の笑顔のままで店じまい
菅井とも子

血圧へ約束が多すぎる
福本 英子

千羽目の鶴折る指が疼きだす
妹尾 春江

新たな旅路とおもつ朝のお茶
西山 幸

少年非行傾いて来た父の塔
堀江 芳子

倅せのまん中へんで欠伸する
恒松 町紅

水襷があふれて朝を疑わぬ
高杉 鬼遊

南無如来指先あたりむすかゆい
八木 千代

こいのぼり大きな夢を吸うている
福本 英子

花言葉は語らぬまがよい
奥山美智子

男にはかけこみ寺が見当らず
山口 美穂

くい呑みの中の美人が恐しい
中川 滋雀

若柳潮花

柳 鶴丸

芯までは炎になれぬいちごです
三つ目の辻で迷いが深くなる
喪の帯を解けば遺産を考える
一步出た時から老いを庇う杖
自惚れて見ると鏡も嘘をつく

橘高薫風

春雨に高層ビルも伸びている
風見鶏大きくなつたらタカになる

似合わないかも知れないがVサイン
仲どんたく

お天気が話題親しい人でない
葉屋でうんこのかたさなど申し

せめてもの抵抗ステッキ離さない
高杉 鬼遊

ダルマ画くときはダルマの顔をする
大路 美幸

はやり唄あの頃総理誰でした
ひさの猫のどを鳴らすと重くなる

芯までは炎になれぬいちごです
原爆忌の長蛇が兵に見え

横綱はコマーシャルでは休まない
松原 寿子

失礼な話を随筆らしく書き
母の選った柄は後から好きになる

男にはかけこみ寺が見当らず
岡田 ふみ

男にはかけこみ寺が見当らず
中川 滋雀

◇川柳塔賞候補作品

毎日の祈りの化粧かも知れぬ 神夏磯道子

高杉鬼遊

陸橋ができて不便な道になり
赤い羽根つけて善人ばかりいる

獄門の首はとほけて朝の露
なんばでも入る堪忍袋縫う

小石だつて大きな波紋つくります
大田みさと

自転車が好きで乗つてゐる訳でなし
葬式は生きてる人のためにゆく

さまたまの運命線が駅を出る
うつらうつらと昔駿馬であつた夢

続柄にすべてをあずけ妻と書く
こだわりを捨ててダルマは起き上がる

新聞少年自分は雨にぬれている
裏方の最後の釘で幕があき

それぞれの顔で驚く千蝶
春うらら老醜の爪伸び続け

うつらうつらと昔駿馬であつた夢
藤井 高子

うつらうつらと昔駿馬であつた夢
藤井 高子

うつらうつらと昔駿馬であつた夢
藤井 高子

造花ではないよほらはら蜂が来た

沿線のフェンスに布団干す暮らし

窓少し開けて和解の風を入れ

今朝の夢仏へ花も水も替え

白ワイン魚は平目でないけれど

岩風呂の全面積に伸ばす足

恋文を落としてしまった京の坂

極楽にゆけるお酒をのんでいる

花言葉持たない花を摘んでいる

粋な人一步をさりげなく譲る

優しい人の住み処と思つ桃が咲く

待ち呆け私の汽車は又来ない

救急箱錆びた毛抜きがひとつある

仰向けになって財布を振つてみる

谷垣史好

誤字あて字言いたい事はみんな言つ

おしゃべりの分だけついた皮下脂肪

小さな願い小さく祈るひなの宴

妻の尻まるで言うこと聞いていず

抽出しの上から順に好きなもの

高野 宵草

春城 年代

有働 芳仙

舟渡 杏花

赤木 和子

浜本 ちよ

大江かね子

津山 刀水

有働 芳仙

大川 幸子

本多 洋子

林 荒介

角野かず子

片上 明水

越村 桔梢

藤村 宏子

本多 洋子

田中 叶

片上 明水

持ち物がひとつ増えたの定期券

素っ裸さらしたような布団干す

断水の蛇口おんなは眠くなり

壁に当たたら私はシャボン玉

白ワイン魚は平目でないけれど

身構えたすがたで沈む川の石

エレベーターの中でなんでもない二人

自立など言わぬに猫が戻らない

棺を出す家はゆったりした間取り

大の字に寝るとごめんと跨がれる

雑音に惑わぬ妻の座りだこ

かな便りその行間に母が居る

足音があるから安心して眠り

肩書がとれて胃薬ひまになり

飼主と同じ詠りの九官鳥

背の壁を信じて瘦せた身を寄せる

だしぬけに聞かれ本音で返事する

女一人素顔に戻る夜の鍵

欠点を認めあつて夫婦愛

遠まわりするのが好きなお父さん

今日の塵落して明日へ鎌をとぐ

中尾まゆみ

松本はるみ

中原 颯人

平松かずみ

赤木 和子

舟渡 杏花

津山 刀水

堀 いくの

望月 晴彦

岸本豊幸次

西田 柳宏子

高杉 千歩

西村かずみ

有働 芳仙

田中 隆二

藤田 泰子

森山 盛桜

堀江 百代

西村かずみ

大川 幸子

藤田 泰子

岸野あやめ

高杉 千歩

中尾まゆみ

林 荒介

岸野あやめ

河内天笑

なりゆきの嘘にだんだん責められる

太陽が昇るわきみをしておれぬ

湯につかり小学唱歌ひとつずつ

かな便りその行間に母がいる

にらめっこして猫の目に負けている

おもちゃ箱一つ老後へ残しとく

虚勢張る髭は童顔持て余し

抽出しの上から順に好きなもの

手相見が人の足元ばかり見る

弱気強気私らしさの裏表

玉虫彩で逃げ足速き男たち

補聴器で福祉後退聞いている

昂ぶりを人形の瞳に裁かれる

一つ二つは伏せて男の自負とする

こだわりを捨ててダルマは起き上がる

高杉 千歩

中尾まゆみ

林 荒介

岸野あやめ

高杉 千歩

水煙抄

秀句鑑賞

— 前月号から —

板尾 岳人

「降る雪や明治は遠くなりにはけり」の作者、中村草田男が死んだ。

第一線作家としての永年の経験と自負を踏まえた論が多く、考え方や立場の違いを超えて教えられるところが多かった。

傷だらけの作品をひっさげて歩いて来た私に水煙抄の秀句鑑賞するのは酷であり、作品及び作者と対決する気持は微塵もない。しかし作者と手を握りしめたい感動が身を走り、ペンを持つ右手に一人ひとりの手の温みが伝わるようだ。五七五は川柳にとって、私にとって太陽が東から昇るのと同じで、寄せられた一六八名の水煙抄作品を興味深く蛙の声を聞きながら読ませて頂いた。

身構えたすがたで沈む川の石

舟渡 杏花

人間のこころを石に見たてて感情をよんだ感傷句であり、自然の景物の不足を美しくあわれな石に時間のない空間、空間のない時間

があり、余韻のある句だ。

手品師の鳩窮屈な顔もせず

松本ただし

顔もせずという言葉の幹旋の巧みに引き入れられ、鳩に対する愛憐の情がこめられ、たつぷりと情感と結ばれた作者の思いはきつと濃いものと思われる。

手品師の鳩に無惨な思いはあろうが、客に見せる訓練された痛手を越えて平穏な鳩の瞳に出合うとわたしは涙ぐみ、どきっとしたものを憶えるのだ。

軽い作品でないことが納得出来るのだが、きりのはがけんかをしてる夏のかぜ

(小二) 結城 千枝

幼少ながら自然を自然な瞳でとらえた作者に驚嘆させられる。詩人は景を書くだけでなく景をも造る。つまり主観の情を客観の景に移すという通感の表現法で自然の景物をさらに美しくしている。

千枝ちゃん頑張れ、よい作品を多く見せて下さい。ありがと。

大阪の句を大阪駅で考える

上田 佳秋

大阪の句とはどういう句か、それはどうてもよい。地方から出て来られて大阪の大会に参加する時の気分は、わたしが大坂から地方の大会に参加する気持と同じで、その土地の風に合う句を考えてしまう。説明する程の句ではないが、さらりとした、少し破調ではあるけれど流れがしつかりとしていて無色透明な句である。

川柳の創作にあたって初心者、川柳で何を詠むのか、何を訴えるのか、何を主張するのか。五七五の定型の韻律をいささか犠牲にすることも止むを得ないが、川柳表現のエネルギーを失ってはならない。川柳は省略の文学ではない。削ることであり、省くことである。

浮き沈みいつも隣に鬼が棲み

高杉 千歩

振りむけばいずこも同じ風が吹く

赤木 和子

岩風呂の全面積に伸ばす足

浜本 ちよ

貧乏だと言えば子供はうつむいた

越村 枯梢

警察へさつさと入る出前持ち

高野 不二

絵日記の母の涙は青く描く

国分甲子郎

手指までいたわるようにする化粧

三宅 旭

五七五はあまりにも短い。器の大小はもはや嘆いてばかりもいられない。暴飲暴食のわたしのように、小さな器にも大きな内容を盛れたいのだ。

八月号に母の日の句、父の日の句、梅雨入りの句など多数詠まれていたことは悲しい気がする。せめてその月に合った句を創って欲しいものだ。

最後に良い句は一句でも巻頭吟に、というわけにはいかないものか。

百選自

明 宵 原 月

消息を聞けば昨日が三回忌

一つずつしずくの生命光もつ

舟世帯春には春のものを干し

掌に隠れる程の理性が残つてた

役人の子で出生地みな違い

ぬぎ捨てた靴の個性も子沢山

弔電を打たせてゴルフ場へ行き

海女の乳藻草をとれば児がたかる

猫の恋柘榴の花が一つ落ち

迷信を母の余命に逆わず

酒の名と医者が並んで駅近し

母が来て夫婦の床をあげてくれ

棧橋へ泣かないという約束で

吊橋はよそ者這うて渡るもの

出戻りの女となつて酒がいけ

父さんの枕で母さん昼寝する

善人の笑いとまらぬ寄席の隅

ガム噛んでいて自衛隊頼りなし

戦国の雄兵に似た坐り込み

長兄に十九を足した母の歳

サボテンの花醜男のまこと見せ

犬かきで泳げば母も少女めき

合理化というが親分氣にくわず

施主の目に大工佐官はいつも焚き

癌でないと言われた日からまた屋台

百姓にライバルがある稲の出来

こりやスバル文句があるかダンブカー

熱帯魚叩いてみれば生きていた

組板のくぼみは妻の哀史かも

三味線の鳴るとこ格子まだ残り

作文になつたら父が負けている

人生に僅かな願ひ湯に浸り

出世せぬ代りに個性傷つかず

六畳を歩きながらに脱ぐ暑さ

犬なにを思い出したか雪を掘り

暗い方向いて夜店はめしにする

ホステスの素顔郵便局を出る

水すまし泳ぎ休まず風があり

急がない時だけ渡る歩道橋

姐さんの酔いするすると帯が解け

ためらいもなくあの人に嫁くという

勝負には勝ち人間としては負け

戦友の歌酔うたのも起きあがり

世間では不幸を女傑などと言う

宮仕え理性も靴もちび減らし

どたん場が来れば女が指図する

サンキューと言えば外人ありがとう

酒酌いで敵か味方か打診する

乳房ふくませてこの子の熱を知る

焼鳥へずらり竝んでみな庶民



まな板の貌沢庵の黄に染まる
 脱脂綿かまされてゐる齒科の椅子
 落したら鈴の音して春財布
 ブルの爪天を指してゐる昼休み
 陽のあがる方へ向いてゐる漁師町
 人形の目ににらまれたガードマン
 ぜいたくの一つに風呂の湯が溢れ
 妬心いま三面鏡に囲まれて
 第二部の人生ネクタイ結ばない
 正論を吐いているのが平社員
 平泳ぎの型で蛙が死んでゐた
 髪梳けば愛はたかぶるものと知る
 先生と言われる人がゐる飯場
 相槌を打って主流の位置にゐる
 台所覗いてかえる里の母
 笹の雪耐える限度がきてはねる
 捨てられた意地は立派に産むという
 やがて楯つく顔もゐる入社式
 七十の発心赤いシャツを着る
 黒だけで僕の自画像こと足りる
 賢妻に乞われるままに竹を踏む
 さわやかな秋新聞に爪が飛び
 晩酌がまだうまいから死なれない
 幸薄き女写経の墨を噛み
 生きるため無難な中間色を撰り

知性派の嫁で献身的でない
 仏より世間が怖い花をたて
 手ぬかりがあつて可愛い妻で居る
 妻の座の居心地すこし肥えてくる
 マイホームだいじに花の種をかう
 娘をやつた夜は夫婦で酔っぱらい
 よろこびも悲しみも妻米をとぐ
 泣きやんだ女がめくる鏡かけ
 中年を過ぎれば専守防衛派
 合槌を打つうちかわる旗印
 腕組みを解き戦いの顔となる
 絹糸に馬鹿にされてゐる暮しの掌
 片減りの靴七人の敵へ向く
 愛枯れて腹の減らない日が続く
 舟世帯甲板長は子を背負い
 七十五日人の噂も人の死も
 亡き妻に資生堂から来るメール
 横ぶれがきついと思う赤字線
 上等の玉露茶柱など立たず
 空想の中へあなたの癖を借る
 洗濯機の中でも夫婦もつれあい
 行く里はあつても泣ける母は亡し
 銀色の雨にしてゆく猫柳
 ひとり言毎日香が聞いていた
 千羽折る翺べない鶴と知りながら

百句選自

子宏柳田西

コツコツと コツコツときた人生で
想い出がにじむ 日記にある余白
すんなりと人を信じる 陽の温み
チヨボチヨボのライバル同士牙をむき
妻の留守 なんと勝手の悪いこと
ネジを捲く柱時計をまだ残し
気前よう買うて 払いが惜しくなり
都市砂漠 他人の過去など気にしてず
ライバルに狙撃されない距離をおく
嫁った娘へ 母はセッセと運び役
親の目を盗む自由が 素晴らしい
恵方には関係もなく定期券
身勝手な期待するから裏切られ
陰口をせんと叩いた口で褒め
冬の陽が脇見する間の露の臺
もう誰も期待せぬのが気に入らず
喜寿未だ 余生と言わぬ 竹刀ダコ
この道しか知らず 貫くほかはなし
目的へ行くのに道が多すぎる
ハネムーン知らぬ二人へ フルムーン
馴れた手が思わぬ事故のキーを引く
余生などまだまだ遠い定期券
一線を引くから越えたくなくなる
予約などするから自分縛られる
あこがれた自由にはみ出ている孤独

旬の味までは缶詰こめられず
最高の出来へ自信がまだ持てず
換気扇近所へ夕餉の香を配り
インタビュー 根掘り葉掘り過去に触れ
熟年の知恵は余計な口出さず
二代目の人生 初代に狂わされ
大阪弁だんだん妙なアクセント
頑張った靴へ確かな棒グラフ
快食快便 野菜ジュースの美味いこと
スタートは 一直線と見た誤算
道ならぬ恋 悲劇とは限らない
今日のバン明日へ残す 性を悔い
頼りない噂が本当になる怖さ
本当が三分混っている実話
錦着て帰れば親類増えている
天真爛漫 顔中口にして笑い
安全などこまで逃げて アカンベー
ほとぼりも冷めた頃だと 猫帰る
相談をして決心を鈍らせる
メルヘンを抱いて開いた桃の花
ふりかかる火の粉ないから喋り出す
車間距離守れば次々割り込まれ
亡父の手の温味忘れぬ内は無事
天職が世間いうとい人にする
公務員だった不運の汚職記事



ハツタリも入れて自慢の口軽し
 だんだんと住民パワーの横車
 世の中を見る目が変わる廻り椅子
 内職の手はアルミ貨の重さ知る
 善人の笑いにリズム崩される
 エリートの人 核弾頭になる
 お人好し 矢張り短所かも知れぬ
 白旗を掲げてきれいな嘘をつく
 耳学問でナウイ言葉も喋る祖母
 豪邸が並び薄情な街の風
 我家放つといて他所の留守番引きうける
 ロスタイムまでコンピュータに弾かれる
 気紛れなサイコロだから賭けてみる
 初心者とその気にさせたほめ言葉
 真先にライバルに書く招待状
 出世した分だけ溝が深くなり
 連鎖反応みたいに続く慶弔費
 煮つまってから母さんの鍋料理
 子約した愚を海鳴に笑われる
 髪切った分だけ女強くなり
 愛人の名前をつけてベツト抱く
 威勢よい男で 高所恐怖症
 能筆の癖まで うまいなと思う
 出費増 身内の義理に目をつむる
 筋書がないアドリブが うけている

譲られた席へ素直な年になり
 神様は皆通したい入試絵馬
 八方美人 どれが本当の自分かな
 自惚れの足 土壇場を踏み外す
 気のおけぬ店で幹事が先に酔い
 針を抱く言葉に耐えている本音
 不愛想なところが愛嬌かも知れぬ
 惜しい人でしたと敵も言うお通夜
 寝る頃になると都会は地面掘り
 茶柱も信じて今日のリハビリー
 天災へ人間のエゴ 潰される
 スタミナの配分 居眠りくり返す
 手の内を覗く眼鏡を拭いている
 顔見せただけで正客義理がすみ
 血液型 親子の絆に水を指す
 チョボチョコボのうちはライバル仲がよい
 傍からは 独り相撲になる気張り
 子等巣立ち 正月音もなく二人
 野仏と契り忘れぬ四季の花
 仕事場に 僕的首桶おいてある
 セールスの罠に飼犬からかかり
 無免許のキヤリヤー 確かな腕を持つ
 誇りなど捨てたら気楽な釜ヶ崎
 粒撰りを態よく特攻隊にされ
 受賞して重荷背負った日々となる

愛染帖

橘高薫風選

兵庫縣 野々口 ゆう也
窓拭けば余生の絵巻写るかも
生きてゐる愛し憎みて齡重ね
一枚のふとんの中の儀式かな
青森市 工藤 甲吉
唇をねぶたの夜に盗まれる
八尾市 高橋 夕花
泳いではならぬ湖そこにある
今治市 矢野 佳雲
七夕やあ惜しみなく髪を切り
どうみても非は我にあり布団敷く
米子市 八木 千代
口ポットのボタン押すに備われる
母欠けた畳は真夏でも寒い
鳥取県 鈴木 村瀧子
鶴を折る軽い罪とは言いきれぬ
よちよちと母の匂いの方へ行く
萩江節ケースの中で踊れそまう
萩市 柴田 英千子
虹の橋男のぬくみ腕にある

大阪府 小出 智子
人に情お地蔵さまにはよだれかけ
こおろぎも街に見切りをつけたのか
岡山県 白岩 文衛
幸福駅そこにも雨が降っている
エゾキスゲ旅愁のひとにただ優し
島根県 堀江 芳子
好きな服背すしも伸びて靴も鳴る
はいチーズ笑いそこねて写されて
兵庫縣 脇田 米朝
愛される余生は惚けること知り
演技もつ終りを告げる花と蝶
町田市 竹内 紫緒
結晶模型奥にまします白衣の師
宇宙服女性とわかる身をかため
豊中市 田中正坊
満中陰過ぎ妻宛の手紙着く
遺句集を読み寝つかれず北の宿
豊中市 満仲 きく子
初蟬が鳴いた亡母への鎮魂歌
陽炎の彼方へ明日はきつと行く
富田林市 岩田 美代
償いをせぬ八月の雲の貌
賭けるものないのに硬貨ほうり上げる
富田林市 藤田 泰子
捕虫網の征服欲をもてあます
ひまわりのことは星と話する
萩屋川市 岸野 あやめ
町内を震撼させて恋終る
蜚龍逐げざりし恋憶つなり
松山市 谷 真風

看護婦の冷たかりけり標準語
銀杏並木を真直ぐ歩く朝の幸
羽曳野市 田中 隆二
夏草を摘んで亡母に逢いに行く
子が親に似てきて親は年をとり
松原市 佐藤 藤子
森林浴肩にトンボがきて止まり
消火器もきれいにふいて恙無く
豊中市 上田 登志実
宿浴衣裹着てたべる朝御飯
戦後派の亭主和服は浴衣だけ
大阪市 津山 刀水
だまされていないか烏竜をのぞく
患って聖書が読めた果報者
島根県 木村 はじめ
人様が見ればなんでもない形見
一粒ずつ子を撫でるよう梅漬ける
大阪市 神夏磯 道子
一粒ずつ子を撫でるよう梅漬ける
八尾市 松下 蕉露
別れた日のままでポマード置いてあり
島根県 松本文子
喜寿米寿向う岸まで届きそまう
吹田市 栗谷 春子
傷心を見ていてくれたサクランボ
近江八幡市 前川 千賀子
いつの間に夢をなくした桃の種
尼崎市 西村 かすみ
スキヤンタルの主は静かに花を分け
尼崎市 田中 晴子
身の上話あれは蜚のまたたきか
吹田市 西岡 豊

満ち足りてスイツチの紐明日の夢

京都市

祇園町祭へきつときつね雨

浜田市

重箱の隅をほしくる老眼鏡

岡山市

あれからのわだかまり解くくすり指

和歌山市

犬の死によよと泣く身の老いを知り

和歌山市

童話から覚めてやっぱり女の子

岡山県

帽子かけにぼし掛つて居る安堵

岡山県

この人も貯めては居ない千鳥足

今治市

恋すてう星の話はもう古い

島根県

音たてて崩れる別居持ちだされ

高槻市

前日に母の仕上げた浴衣着る

海南市

身を守る唯それだけの平和主義

高知県

神様の目がまいそんな御輿かな

和歌山市

亡母に似た文楽人形の眉のいろ

平田市

右顧左眊当初のメニュー宙に浮く

和歌山市

裏切りを聞いている耳がかゆいだけ

福本英子

米子市

吠えながら尻尾振つてるのは誰か

和歌山市

脱け殻に別離の思いが残る

和歌山市

ガヤガヤを言わねば蛙は無視される

益田市

選挙カー私の票を買いに来ぬ

富田林市

一筋の飛瀑に深い森を見る

尼崎市

庭つづき今日は雨戸がまだあかぬ

指宿市

子と遊ぶ犬の尻尾の良く動き

寝屋川市

外堀を埋めて転勤辞令出す

岡山県

子等の海灯台守となる母で

鳥取市

正論を通してうまい酒がある

鳥取市

第六感此の場はなんと言われよと

岸和田市

酔えば寝るそんなお酒を羨まれ

笠岡市

若い気か老人会へ欠席す

弘前市

カッコウが鳴きその次のバスを待つ

東大阪市

味のあるたとえに大は小を兼ね

京都市

味のあるたとえに大は小を兼ね

京都市

瑞枝

松原寿子

若宮武雄

里本たかし

植松慶子

伊藤春子

渡辺伊津志

江口度

嘉数兆代賀

森田熊生

武田帆雀

さよ子

木山遠二

田中叶

三宅旭

杜的

純白の桔梗が好きでまだ嫁かす

島根県

茹玉子握つてなにか物足らぬ

唐津市

耳などもほど良く遠くなりました

唐津市

稼ぐ顔稼がぬ顔と刷き分ける

鳥取県

政治家を政治屋にするコマーシャル

守口市

律義者花は咲く場所知って咲く

藤井寺市

手作りでぬいぐるみにも血が通い

京都市

社の曲の一音符としての僕

奈良県

身の程を知らず乞食ルツクとか

米子市

さざ波も消して静かな姑の海

仙台市

楢山へ行かずおりんは大麻吸い

藤井寺市

蝶の屍がひらりと風に舞う

大阪市

デイオールのサングラスかけ逢いに行く

米子市

赤い薔薇切れれば血を噴く日記帖

守口市

寶石の箱にへその緒幾らする

弘前市

みつめてる花うるわしくなつてゆく

真喜内

実

堀江正朗

田口虹汀

浜本義美

清水一保

岸野キミ

前山美恵子

都倉求芽

村上春巳

雑賀美世

川村映輝

赤木和子

黒田真砂

林荒介

長谷川

司

實

吹田市 西川 景子

菖蒲園王朝絵巻くりひろげ
羽曳野市 吉川 寿美

病室の壁を背にして独り句座
名古屋 越村 桔梢

アテンションブリーズ私はサタンかも知れぬ
堺市 高橋 千万子

再会に過去がりズムに乗ってくる
大阪府 堀江 光子

テレビ消し雨音だけにする小部屋
大阪市 朝倉 利義

平均寿命あと十年をどう生きる
米子市 青戸 田鶴

ゴムの葉も恋の語らい聞きあきる
高知県 赤川 菊野

とりどりの糸を集めて夢を編む
和泉市 西岡 洛醉

猿芝居今日は悲しい日で暮れた
宝塚市 吉田 笑女

気が若い姑には地味なブレゼント
高知県 曾我部 裕

あんな奴ぐらいに水を開けられる
西宮市 松本 一郎

見栄銜い捨てて人生楽になり
笠岡市 松本 忠三

言葉尻躲す上には上があり
西宮市 津山 冬子

ねむの花宮城まり子の温かさ
米子市 沢田 千春

水たまりゆらして影に話しかけ
米子市 小西 雄々

掌が温い無欲な父である

伊丹市 榎谷 寿馬

乳離れを誓うハガキが任地から
大阪府 坂口 公子

分岐路でだぶるえんまと亡母の顔
島根県 榎原 秀子

旅行案内とっても夢を売りすぎる
八尾市 山下 みつる

ロボットのサービス受ける不仕合せ
寝屋川市 平松 かすみ

朝食の少し拗ねてる目玉焼き
倉敷市 藤井 春日

何気ない言葉夫を怒らせる
岡山県 岩道 博友

山鳩の巣籠り庭木を貸しておき
岡山市 井上 柳五郎

見慣れたる我が街知らぬ人で混み
吹田市 井上 照子

生国は海越え足の届かぬ地
唐津市 浜本 ちよ

柿青葉読書の茶の間暗くする
大阪市 江城 修史

背のびして心貧しく見栄をはり
広島市 望月 晴彦

つぶやきは潮に返して欲しい貝
高知県 小沢 幸泉

解説におれもわれものさしき席
鳥取県 福田 あや子

海が吠え人が吠えてる地獄見た
愛媛県 八塚 三五島

軍歌高唱日本人が生きていた

山口県 高崎 雀声

コーヒーは冷えて話は熱をおび
西宮市 朝山 千世子

朝顔咲かせ孫に服縫い古い愉し
高知県 山下 登舟

喜寿の駅過ぎて傘寿の切符買っ
和歌山県 山田 久子

命の灯夫のかいなのなかの友
西条市 片上 明水

暑中見舞また水虫に悩まされ
米子市 野坂 なみ

野次馬へ水をかけたたい消防車
大阪市 上江洲 勝子

ブーゲンビリア咲いて南の風を呼び
大阪市 勝子

★ 豊中市中校塚三丁目13-15
橋高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「握手」選者 橋高薫風

締切 9月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局、老後をたのしく係

発表 9月25日(日)ラジオ第一放送

午前10時から

●書評

句集「新京都」

橘 高 薫 風

合同句集「新京都」が、昭和五十八年六月十八日、川柳新京都社から発行になった。

北川絢一朗氏の自戒と題する巻頭の挨拶に代えた文章は感銘深い。謙虚と言うものが、短詩文芸の根本の姿勢にあるべきものと思うからである。一大飛躍を前にしたバネが撥ねる一瞬前の心構えと姿が必要だと思っからである。それがなければ、作品に張り之余韻がともなわない。創立五周年に因んだ五十名の全同人の結束した成果が見事に浮き彫りになっている。そのうちの若干の方の作品を私なりに紹介したい。

青木 十九郎

つぎはぎの虹で満ちてる夫婦の茶
だんだんと象に似てきた妻の鼻
傾いてぐっすり眠るやしろべえ

「新京都」らしい伝統の良さの上に斬新さ

を加えた意欲的な作家だ。「新京都」には、この作者のように、これからの可能性に大いなる期待を抱かせる人の多い強みがある。

荒井 慶子

怒号にも優しさはある遠雷や

天蓋の下でみつづく春秋よ

転落は描鉢までかそれまでか

償いのひとつ片足立ちをする

魚の身はぐすひとりの身をほぐす

才能の豊かさが一読して読者の芯に感応する。作品に思いを傾けること、今迄通りであ

って頂きたい。言葉の綾のみに走りかねない危うさを危惧する。

内山 雅子

運鈍根運鈍根と打つ太鼓

桐箱に納まる臍の緒ではない

裁き待つ子らも小石を持っている

句風重厚だ。自身の境涯の中より嘘いつわりのない作品をものにしていくからである。

奥野 誠二

不惑とは雑煮の旨さだと思っ

中年の孤とボクサーの脚の幅

桃熟れてひとつも軽いものが無い

楠 成子

感情線に一羽の鳩が迷い込む

花片のひとつは水子かも知れぬ

怖いもの見たさに落ちるおとし穴
杉浦 多津子

じゃがいもが先ず起きてくる日曜日
ジャンケンで二人残った恐ろしさ

桃の種どれを蒔いたら桃太郎

辻 嬉久子

ひとを想う女は湖をもっている

去年の梅千ころんと青かった去年

モナリザ陣痛の日はなかったか

夏原 佳江

風呂敷の四隅へ罪はにげてゆく

会えたかも知れない時を花生ける

鬼ごっこ鬼が足らぬと誘われる

橋本 征一路

アルバムのこの辺からがアデランス

金と子を較べてバートタイムかな

マジックインキの蓋とタイガースの帽子

橋屋 文子

いちにちが少し余って笛を吹く

腰ひもの長さが亡母と同じになる

きつと来るその日が不意であればいい

北川絢一朗氏の言の、「全国的な著名作家方の胸を借りるおもいで……」と誌上に句会に精進を続ける気鋭の作品に最もこの句集の特色が出ています。それが現今の「新京都」の個性なのである。今まで気付かなかった楠成子さ

んの高度のユーモアは杉浦多津さんと双璧だし、奥野誠二さん、辻嬉久さんの抒情的真実、橋本征一路さん、夏原佳江さんの批判的諧謔、どれをとっても個性が開花している。才能の賜であろう。

奥崎 喜一郎

深追いはしない夫婦の鬼ごっこ

土下座するまでは喜劇でなかったが
退屈と書いてあるから日記だろ

明治生れのこのような作者がおられるのは
「新京都」の強みだ。

坂根 寛哉

わが城に大きな足の子がふたり

正直な夫婦に塩があまるなり

陸橋に佇ちしばらくの求道者

寛哉さんが結婚をされたとき、私は「結婚
をしてもハートのジャックたり」の句を呈し
た。つい昨日のこのように思えるのだが。

沢村 智章

将棋倒しのいちばん最後にいる味方

珈琲がまいにちうまいはずがなし

捨てた帽子よそんなに軽くころがるな
「新京都」には智章、徹平、新吉のユニークなトリオがいる。

田中 博造

どの夜具も妻をつつむとムンクの絵

湯にうかぶおまえのはてしない重さ
こめでいよ眼のない魚のうちなる眼
若山牧水の詠った「眼のない魚」と博造の
それとを引き較べる。世は原子の火が点いて
いるのである。

徳水 操

燃えつきるときさよならは誰に言う

平和論は遠い豆腐屋のラッパ

鏡を見ながら笑うてはいけません

長藤 泰敏

花嫁の父で踏み絵のかたちにて

ひろしまよガラスの鳩になるなけれ

正義とやいつもいくさがしたくなる

熟年と言えはお二人に叱られるだろうか。

句の熟する齢なのである。

前田 夕起子

乖離とは雪を斜めにうけながら

あそび半分赤い葉包紙をひらき

ねそべって一途な亀をやりすこす

薬人形のかたちで灰になっている

氷囊にまざまざとある回遊魚

乖離（かいり）とは心服せぬ態である。と
りもおさず男への心情で、霏々と降る冷たい
雪とつらはらに燃えていればこそその背反な
のである。

「新京都」のこのような切磋琢磨する雰囲気

気が実力をいやが上にも向上させる。句集「新
京都」は新京都社になってからの五年間の見
事さなのである。「平安」時代を知らぬ多く
の作者も輩出している。その点、支援者の定
金冬二、森中恵美子両氏の序と跋は、筆者サ
イドでの発言に隔ちてしまっているのではな
かろうか。「新京都社」の同志たちよ、転ぶ
ときは一緒に転ぼうではないか。」とは、序文
として欠けるものがあるような気がする。

率直

江城修史選

率直に言えて社風の明るさよ 勝美
率直に言えば言いたいことはなし 一夫
率直な話へ半分だけ笑い 可住
率直に話し合えない核談義 枯梢
率直に愛してまうと言えまうか 三吉
率直に言えは言ったで誤解され 公一
率直な一人が居ったロッキード 武水
率直な答えに野心見抜かれる 道子
率直な意見も負ける多数決 狸村
率直に言わして貰う酒を酌ぎ 宵明
右腕の自負率直に苦言する 柳五郎
率直な返事で未練残らない 赤木和子
率直に言えと言うから言うたのに 倫子
率直になれぬ肩書つきまとい 達一郎
率直に謝り生ビールがうまい 素身郎
率直に言えは女は横を向き 義美
率直に言えぬ話でたかくつき 虹汀
率直に証言はせぬ月の暈 はつ絵
率直に話が出来る良い仲間 午郎
率直に言えば明日がわからない 武水
率直に聞いてから出す謝礼金 志子
率直さ誤解を生んだ狭い町 刀水
率直に話すと元の君と僕 刀水

子にだけは率直になる酒の量 与呂志
率直に言えば嫌いなタイプです 里風
率直な鏡が似合いませんと言う 満津子
率直に見合いの席で言いつぎた 素身郎
率直な意見 覚悟は出来ている 甲子郎
率直に語ればもつれた糸も解け 久子

佳

率直に言えば良いのに悩んでる ふみ
率直な言を福耳溜めておく 重人
率直な現場の声は伝わらず 美穂
率直に言えは傷つく人がある 右近
率直が笑われるならそれもあり 勇人

人

率直な意見がほしい吹き溜り 森脇和子
率直に仕合せだとは言ひそびれ 明水

地

率直な男の好きな樹の匂い 重人

天

椽

ぐ

小砂白汀選

出稼ぎの夫に据える陰の膳 志子
稼ぎ高くない人が金を持ち 午郎
残業のババヘミシンを踏んでママ 里風
稼ぐだけ飲むが人生釜が崎 浪速子
正直に稼いだ父の小さい家 明水

どん底で稼ぐタオルが油じみ 洛醉
身動きもせずにはモデルは稼いでる 一竿
二人して稼いで育てた暴力児 多々子
稼いだら損する仕組厚生年金 正坊
蜜蜂を稼ぐす場所へ連れて行き 冬子
共稼ぎ妻の茶碗も洗うなり はじめ
胎動に迷わずやめる共稼ぎ 春枝
姑と同居がしたい共稼ぎ 満津子
ロボットが造った自販機よく稼ぐ 重人
幸薄き女が稼ぐ終電車 実男
一日の稼ぎに似合う暮らしする 綾珠
欲の無い話で稼ぐ寺の徳 規不風
飲むだけを稼ぐ亭主に見えてくる 弘朗
兎も角も稼げる事はありがたし 里美
老境も日ゼニ稼げる腕うれし 炉齊
振り込み月給妻からお小遣い かすみ
稼がねばならぬお日様のほから 山久
口あけて待つ子へ稼ぐ土人形 はつ絵
今日は今日の稼ぎと父の肩 富子
賽銭箱仏も稼いでおわします 武水
パートして稼ぎの重さ知って呉れ 志津
すねかじり稼ぎの痛み知って呉れ 裕
花名刺家も車も持っている 和子
さざ波を稼いだような日暮れ時 幸泉
底無しの壺に稼ぎを入れたとて ゆう也
点数を稼ぐ尻尾がちぎれそう 刀水
あら稼ぎ楽でなさそう五億円 米朝
明日のないいのちを稼ぐ蜂の群 代仕男
そろばんと別にバイトの楽しさよ 曉明

見 る

柴田 英壬子 選

稼いでる頭をなでる招き猫 晴彦
巢を張った蜘蛛の稼ぎを聞いた風 可住
出稼ぎの男故郷の酒に酔う 惠美子
女房の稼ぎで不安のある絵皿 文平
佳
資生堂のモデル綺麗に稼いでる 正敏
魚河岸の夜明けを待たぬゴムの靴 久仁於
地下足袋と軍手の稼ぎ高が知れ 宵明
出稼ぎの夫が叩くか雨の音 道子
とことんまで稼がされてる豚の足 枯梢
人
出稼ぎに祭囃子が近くなる たず子
地
稼ぐ腕十円玉と同じ色 勝美
天
食うだけを稼ぐ十指を持ち合わす 寿美
軸
稼ぐのみサラブレッドに恋はない

消防車追うて火事見たという車 曉明
見るとこは見てるとボーンヌ渡される 柳五郎
よく見ると口と肚とが違う奴 弘朗
弁慶の立ち姿見る 鬼薊 素石
一人が見ればみんな見たがる鍵の穴 義美
見せまいとするからつもの好奇心 本蔭棒
開けて見ない方がよかった玉手箱 刀水
世の中を斜めに見てる深海魚 惠美子
向い 風女凸凹見せて来る 三五島
見るだけで良いと呉服屋荷を捻げ 悠泉
花を見る目は皆んな澄んでいる 綾珠
くたびれた靴が見ている靴売場 晴彦
モナリザの目はいくつ嫉妬の目を見たか 規不風
見どころは外しませんがと年の功 あやめ
見るだけに入ってローンが付いて来る かすみ
見る角度変えてもやはり負けている 重人
好奇心しきりにくすぐる小さい穴 景子
因襲が見たのは羽のない雀 はつ絵
見るだけの壺もくぐった熱地獄 雅風
ひとり旅矢印ばかり見て歩き 明水
顔を見て安心したら腹が立ち 満津子
したたかに生きてても女夢を見る たず子
替足袋の二つ心を見てしまう 文平
ライバルにあの日の傷は見せられぬ テル
嘘を見る時の女は驚かぬ 与呂志
涼しさを見せる幸せ夏金魚 道子
遭難碑今は静かな海を見る 喜酔
ケージから空を見ているプロイラー 佳雲
佳

過疎もよし見せてあげたい飛行雲 天彦
見て見ないふりして守る父の愛 胡顔子
先方に見る目がないと労わられ 武水
俄雨詫びてきれいな虹を見せ 里風
いやなもの見た日の水割りは濃目 素身郎
姿見のここが始まる今日の嘘 宵明
人
宇宙からみな見られてたかくれんば 可住
地
少年が見る大空に夢がある 優
天
ベレー帽憑かれたように見る名画 右近
軸
顕微鏡見てから刺身嫌いです

革新もとより結構
ですが
グロテスクに
ならないように

寿馬

初歩教室

題 — 仲間 —

本田恵二朗

落ち目にも叱咤激励する仲間 愛子
 (本当の仲間だと落ち目になつて知り)
 お互いに知恵を貸借する仲間 同
 (知恵を貸したり借りたりの良い仲間)
 同好の仲間であつて味がある 麻恵
 (同好の仲間それぞれ味を持ち)
 柳仲間やつぱり入つた甲斐がある 同
 (仲間入りした甲斐があり座が温い)
 仲間なら解つてくれる山に死ぬ 晴彦
 (山の死へ仲間ならこそ泣いてくれ)
 売上げを伸ばす仲間の光る靴 同
 (販路を拓げる仲間の靴光る)
 釣仲間たれもがてんぐ手を広げ 照子
 (これ位あつたと自慢する仲間)
 知らぬ間に仲間になつた食べ歩き 同
 (なんとなく仲間になつた食べ歩き)
 あけひろげ心遊ばす仲間持ち よし津
 アリバイを作つてくれるのみ仲間 同
 (のみ仲間アリバイ上手に作り合い)

仲間には仲間だけ好く風がある 実
 (仲間へは仲間好みの風が吹く)
 あたたかさ仲間になつてわかる風 同
 (仲間だけの風の温さがわかりそめ)
 釣仲間解禁前夜のはしやぎよう 久子
 (釣仲間解禁前夜へ落ち着けず)
 くみかわす仲間と軍歌に酔いしれる 同
 (酌み交す仲間軍歌へ若返り)
 なれそめはクラブ仲間とお仲人 春枝
 (クラブでなれそめ お仲人は仲間)
 酒煙草とうに大人の仲間入り 同
 (酒煙草おとな仲間へ急ぎ過ぎ)
 鍵っ子の仲間遊びは生き生きと 柳右子
 (鍵っ子の仲間遊びへ陽が沈む)
 不況でも話まとまる釣仲間 同
 村意識抜けぬ仲間て氏子組む みつる
 抜けがけの出世をねらい仲間割れ 同
 (出世欲が抜けがけねらうて仲間割れ)
 氣を使う仲間があつて努力する 忠広
 ベット側仲間と群れて遊ぶ夢 れ同
 (ベット達の夢は仲間と遊びたい)
 飲み仲間先に酔われて送られ キミ
 おはようジョギング仲間さわやかに 同
 (オハヨーの声さわやかにジョギング連)
 仲間割れ自己主張にある誤算 まさ
 (自己主張がワシマン過ぎて仲間割れ)
 趣味仲間遠慮いらずに打ちとける 同
 (胸襟を開きつばなして趣味仲間)
 のみ仲間さめりや他人の顔となる 貞子

会 柳 富

会 長

阿 部 柳 太

残暑お見舞い

ご都合で仲間であつたりなかったり、

(都合主義仲間であつたりなかったり)

相談の出来る仲間から温い目

(相談の出来る仲間の目が温い)

落ちこぼれ仲間で揚げる救いの手

スクラムを組んで仲間と共に行く

(スクラムを組める仲間を持つ強味)

中傷をされても仲間信じます

(中傷をされても信じ合う仲間)

仲間からはぐれたメダカの独り言

どんぐりの仲間となつてする拍手

(どんぐりの仲間になつて手を叩き)

仲間にも喋れぬことが二つ三つ

定退に仲間がくれた万歩計

(のみに行く仲間に下戸が一人あり)

まだ元氣オイとキサマの戦友会

類は類呼ぶ仲間の老人会

(類が類を呼んで楽しむ老い仲間)

仲間みな心のゆたかさだけは持つ

(良い仲間心ゆたかなやつばかり)

都合などどうにでもなるのみ仲間

同好の仲間と夢の輪をひろげ

披露宴仲間がバラスエピソード

(披露宴仲間がバラスエピソード)

仲間からはみ出て行くか流れ星

(仲間から追い出されたか流れ星)

(仲間から拗ねてとび出た流れ星)

企みがあるのか百人越す仲間

慶巾の仲間外れてすこし拗ね

ジョギング隣の犬も仲間入り

仲間割れしてはミニ党また迷い

仲間から知恵貰う児のたくましく

仲直り出来る仲間を持つ強味

ワッショイワッショイ

仲間が一つになる祭り

ライバルも職のそとではのみ仲間

縄のれん仲間が愚痴を聞いてくれ

ライバルも夜はうま合うのみ仲間

ジョギングの仲間はずれてマイペース

類が友呼ぶ落ちこぼれ仲間かな

強すぎて仲間はずれのきかん坊

九回の裏がまだある仲間の輪

鍵っ子の背なへ仲間がふえてゆく

仲間とて心ゆるせぬ人がいる

肩書が仲間はずれになる酒席

十を知る仲間へ言葉飾るまい

同趣味の名前だけ知る友がふえ

同趣味の仲間無では生きられず

のみ仲間一人欠けても落ち着けず

いそいそと仲間入りする老人会

お互いに仲間と思う青い尻

お互いの釣り場荒さぬ釣仲間

突然の死があり山の仲間達

顔見せぬ仲間 心配する仲間

のみ仲間弔辞で酒の量にふれ

結ばれた二人へびっくりする仲間

柳五郎

同

あや子

同

紀久子

同

山久

同

志津

同

ちよ

同

寿子

同

幸子

同

やすお

同

同

同

武水

同

同

同

兼次郎

同

同

川柳塔社常任理事会 (8月1日)

出席者 栗・薫風・水客・紫香・潮花・敏

太茂津・柳宏子・酔々・鬼遊・与呂志・岳人

凡九郎・笛生・史好

《議事並に報告事項》

★8年度同人総会(10月2日)の運営につき

協議、別掲(表紙裏)のごとく決定。なお同

人名簿改訂版を同日を目標に作成することになつた。

★事務所当番へ手当支給の件、薫風氏より提

案あり、経理状況を正確に把握の上、検討す

ることとする。

★西日本川柳大会(9月4日)協力の件。

(S)

■9月の常任理事会は1日(木)

◇

(恵二朗短信)

酷暑の波を乗り越えようと、そこには秋を呼

ぶそよ風が、ごころうさんと云つて迎えてく

れる。暑さ負けしていた川柳脳味噌も生々と

カムバックして、佳句がどしどしと生れてく

る。サア楽しく頑張り合おうよ、仲間達よ。

題一 摺む 9月20日締切(11月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

(七) 一

本田恵二朗

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■構造社では「川柳全集第二集完結記念誌上大会」作品を募集している。題／出揃う(茶六)粗忽(圭佑)古都(栗・維草(蓮夫)都会(東洋樹)選ぶ(いさむ)各2句、締切8月31日、投句料二千円。作品は4cm×18cmの句箋を使用、ウラに住所氏名明記。発表「川柳」A30号誌上。秀句、佳句に呈賞。〒170東京都豊島区北大塚3-29-2構造社出版雑誌「川柳」誌上大会係。

■第52回中部地区川柳大会日時 9月11日(日)10時会場 中日新聞社本社6F兼題 風・ひとり・砂・いくさ・遠い・夜・抱く・汗・坂・折る。

席題 なし、各題2句詠
会費 千円、軽食、湯茶呈
投句 会員500円ほか千円・
切8月末
61名古屋市中区黒門町58
中日川柳会事務所
■大鉄川柳会創立50周年、
合同句集発刊記念川柳大会
日時 9月18日(日)10時
会場 京都駅前ホテル佐野
屋
宿題 始発・迎える・年輪・
大きい・金・各2句詠
会費 2千円、合同句集、
発表誌呈
投句料 500円・切8月末
530大阪市北区大深町2・208
国鉄梅田貨車区・中尾飛鳥
宛
主催 大鉄川柳会
■第10回にいがた川柳まつ
り
日時 9月18日(日)10時
会場 新潟土地改良会館
新潟市川岸町1丁目
宿題と選者
不要(夏井たつや・三膳一
男)先手(内藤進一路・宮
村桂路)頭(高橋美桜・池

田史郎)飾る(青木春子・
河口弘)ゆとり(大野風柳
・栗田九十九)
特別課題印象吟「口」藤島
茶六選
席題2題、各3句吐
会費 千円・昼食呈
賞 知事賞以下20位まで
投句 500円・切8月30日
迄
951新潟市関屋田町3・46
8 青柳白星方
宴・3千500円・希望者のみ
宿泊3千円、8月20日迄に
主催 新潟川柳文芸社
■山形県川連では57年度年
間賞を発表された。(川柳わ
つか所載)
最優秀賞 片倉一伸
熟年はさみしがりやで赤を
着る
優秀賞 伊東マコ
温室のトマトの赤は偽証罪
ほか天遊・梢風・葉月の皆
さん。
■柳都川柳社では第14回川
上三太郎賞受賞作品を発表
された。
「膝抱くと目に賑やかな向

弓削川柳社創立35周年記念
弓削平氏句文集「六塵」発刊記念
第35回 西日本川柳大会
日時 昭和58年9月4日(日)8時30分
場所 岡山県久米郡久米南町弓削
久米南町中央公民館
兼題 「酔う」「砂」「悩み」「痛む」
「よろこび」「土」「引く」各2句
会費 千五百円(発表誌、記念品、昼食呈)
投句料 千円(8月31日まで)
賞 知事賞ほか
主催 弓削川柳社
「う岸」外2句・吉岡宵波
「沼の水いつしよに出口搜
そうよ」外2句・水瀬片貝
「オモチャ箱いくさを知ら
ぬ兵ばかり」外2句・土谷
久昭
「向き合ひし紙一枚の寒さ
かな」外2句・宮本めぐみ
■川柳こなゆきでは57年度
冬眠子賞を左の通り発表さ
きそびれ
「一況には触れず静かな街を
ほめ
敢闘賞 及川緋福
シャボン玉風のいたみを聞

■川柳新京都社では、創立

五周年記念事業の一つとし

て、五十名の全同人の合同

句集を発刊、各同人27句を

発表、仲々読みごたえのあ

る句集である。山本桐下作

品より、失ったもの大きく

て瞳を洗う。此の人の過去

はともかく輸血する。A5

判上製36頁。頒価二、五〇

〇円、発行人北川絢一郎

▽同人・柳友消息△

▼尼緑之助氏（出雲市）よ

▽句会案内△

り本社へ書信。

・山陰豪雨、ニュースされ

たが、出雲方面以東（鳥取

も）は被害なし。島根県細

長い地域、西部だけが大幅

事になりました。

・川柳塔同人では浜田市・

中川幸一、佐々木裕岡氏が

どんな被害だったかまだ耳

に入れていませんが、大事

ではなかったと思っています

す。

■菜の花句会

時・9月10日（土）夕6時

所・西郷会館（近鉄八尾駅

下車・八尾神社境内）

兼題〓現金、ドラマ、火

星、大根。

■駒つなぎ川柳会

時・9月26日（月）夕6時

所・高松会館（環状線寺田

町下車6分）

兼題〓特集、方言、贅、卑

怯。

■南大阪川柳会

時・9月19日（月）夕6時

所・高松会館（寺田町）

兼題〓鼻、昼下り、不利、

平日。

■東大阪川柳同好会

時・9月24日（土）夕6時

所・東大阪社会教育センタ

ー（近鉄布施駅下車長堂小

学校東口）

兼題〓舌、バイク、風、伝

説。

■南海電鉄川柳部

時・9月22日（木）夕6時

所・南海会館ビル本社地下

食堂

兼題〓社名、境界、色鉛筆。

尼緑之助喜寿・句集発刊
句碑10周年

祝賀川柳大会

日時 昭和58年9月25日(日)11時

会場 出雲市商工会館

お話 西尾 栗
兼題 生きる 橘高 薫風選

大地 野村太茂津選

練る 河村 日満選

本場 八木 千代選

音 柴田 午朗選

熱 津川 紫吻選

各題2句

会費 四千五百円

（句集、発表誌呈、昼食祝宴費共）

主催 いずも川柳会
後援 川柳塔社

新同人紹介

萩原 みね子

―水客・岳詩・永楽・客遊子推薦―

松浦 輝き

―水客・岳詩・永楽・客遊子推薦―

沢田 千春

―花子・千代・瑞枝・薫風推薦―

本社 八月句会

会場 なにわ会館

八日 午後六時

暦の上では立秋だが、西日本は連日の猛暑この日、午後西宮で一周年を迎えた若本多久志さんを偲ぶ川柳会が開かれ、夜は本社句会とダブルヘッダーになった方も多く、出足はやや鈍かったものの、結局七十二名の出席で暑さを吹っ飛ばす盛会となった。

初出席の宮川喜一氏（大阪市）、高須賀金太氏（岸和田市）、住田英比古氏（交野市）の紹介があり、黒川紫香氏のおはなしは、多志さんが生前好まれた言葉に。心と絆」というのがあり、それに因んだ数々のエピソードを語られた。

お宅の庭に住みついた雨蛙の話は以前、柳話で何ったが、昨年家を改築のため三月から九月まで一時転居し、雨蛙に会えなかった。ところが今年には五月になると、また例の雨蛙

がいる。勿論、同じ雨蛙ではないだろうが、掌にのせてやると目をキョロキョロさせている。「これも私と雨蛙の絆だと思う」。

同じ五月の下旬、梅田地下街で東野大八先生にばったり会い、川柳塔事務所へ一緒に来た時、何かと心遣いをして頂いたこと、長谷川一夫の東宝移籍をめぐる小林二三翁の思い出から話は九州の旅で出会った人の心の温さへと広がっていく。訥々とした語り口が余計心にしみるいい話であった。

今月の月間賞は住田英比古氏が獲得。

（史好記）

（受付―与呂志・重人）

（記録―射月芳・健司）

（進行―柳宏子・天笑）

出席者―与呂志・静歩・眉水・春蘭・浩一郎・柳伸・酔々・景子・勝美・寿美・鬼遊・小路・兼治郎・律子・泰子・史好・金太・勝

晴・太茂津・幸・千寿子・滋雀・薫風・喜風三十四・潮花・翠公・みつ子・みつる・柳宏子・智子・英比古・凡九郎・白水・萬的・悦

郎・喜醉・伸子・頂留子・吸江・雀踊子・規不風・楓楽・美幸・赤木和子・文秋・水客・柳影・蕉露・栗・紫香・はつ絵・春江・冬葉

トメ子・白兎・雅風・比呂志・敏・度・風童

健司・重人・射月芳・幸生・喜一・笛生・英千子・天笑・月子・岳人・寿子

席題「老化」

井上喜醉選

耳許へ又囁きにくる老化

焼芋がだんだん好きになる老化

残高はきつちり覚えている老化

あの人も年やと自分は欄に上げ

枯れた字がますます汚えてきた老化

老化した骨簡単に折れました

年金をもらうと老化進み出し

老化した顔は見せたくない女優

老化すまいすまいと若い柄を着る

口先は達者足腰ついて来ず

お互いに白いな禿けたな同窓会

肩の荷を下ろすと急に老けた母

どっこいしよの掛け声口について出る

気は若いけれど階段息が切れ

老化した証拠に肩を叩くくせ

その話二回目ですと娘に言われ

漢方薬素直に飲んでいる老化

新聞が読みにくくなって来た老化

歯は入歯目は老眼離せない

盃を持つ手が震えてきた社長

白髪抜くことも忘れるほどになり

白兎 酔々 重人 勝晴 笛生 みつる 笛生 律子 眉水 三十四 敏 眉水 楓楽 浩一郎 萬的 度 太茂津 雀踊子 三十四 浩一郎 鬼遊 柳宏子

口だけが達者になって来た老花
老化をば売物にする逃げ口上

好きな道老化をふせぐディックミネ
氣くばりも老化しているくどすぎる

物忘れこれも老化のせいにする
ブレーキがきかぬ老化の下り坂

笑っても心寂しい肌のしみ
二度童子来るべき時が来たように

老化した猫で柱に爪立てず
老化した樹にあでやかな花ざくろ

老化するほど朱が冴えてくる柿右衛門
老化して般若心経だけ覚え

竹を踏む日課が一つふえました
死火山になって噴火をせぬ老化

挨拶はしたが名前がでてこない
老眼鏡二つも持って家を出る

石段の高さが笑う息づかい
かくせない老化が鏡の中にある

老境へ口だけ達者な父でいる

席題「挨拶」

西山

幸選

「暑いねえ」その挨拶ですむ暑さ

挨拶後とところでどなたでしたかな

あいさつもしない家裁での二人

葬儀屋になれる上手な「挨拶

越して来て挨拶一つせぬ都会

雀踊子

トメ子

風童

太茂津

柳影

滋雀

雅風

和子

律子

泰子

泰子

紫香

鬼遊

酔々

度々

金太

笛生

雀踊子

喜醉

幸選

千寿子

律子

兼治郎

律子

潮花

父さんの挨拶頭を下げただけ

挨拶がうますぎ抜け目なさそうな

挨拶の長い方だと覚えられ

挨拶を浦島太郎忘れてる

挨拶が長くてビールがますますなる

挨拶が下手で善人だと思っ

裸裸へステテコで暑うおます

改まる挨拶多弁の父吃る

挨拶も出来ぬ娘とお思いか

挨拶に行くネクタイは渋くする

挨拶が地酒の中にしみ通る

嫁った娘に挨拶されて淋しがり

酔眼が豆狸に挨拶する夜更け

挨拶をじりじりしつつ待つビール

大阪人もうかりまつかが先に出る

挨拶が短かかったからする拍手

トマトの朱から挨拶がこぼれ出す

短あい挨拶拍手巻き起り

挨拶は抜きシャツ脱げのまあ飲めの

氣にするとやはり挨拶ギコチない

挨拶は抜きで握った手のぬくさ

挨拶がとても上手で薄情で

代読の挨拶市長は別宅に

立秋になっても挨拶汗だくで

縄のれんくぐると挨拶などいらぬ
肩書のある挨拶がなくなる

小路

楓楽

鬼遊

酔々

和子

雀踊子

太茂津

柳宏子

翠公

重人

静歩

千寿子

景子

律子

勝美

智子

白兔

金太

滋雀

太茂津

笛生

浩一郎

和子

英壬子

美幸
雀踊子

第30回八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和58年10月9日(日)正午開場

ところ 八尾市商工会議所3階大ホール

近鉄大阪線八尾駅下車南三百m

八尾市役所向い側

会費 千円(作品集・鉢植花呈)
題と選者(順不同)

(席題)

広瀬 反省氏

「草」

橘高 薫風氏

「鼻」

中尾 藻介氏

「情」

森中恵美子氏

「袋」

小松原爽介氏

「街」

去来川巨城氏

「すし」

西尾 栞氏

締切 午後1時30分・各題2句

但し投句だけの方は左記へ9月25

日迄(郵券500円同封)

〒581(八尾局私書箱第9号)

八尾市清水町1丁目1-6

八尾市立公民館内川柳係

懇親会

三千元(当日受付)

丁重な挨拶だけで来ぬ中元
挨拶が長い善人にはあらず

挨拶がとても苦手なやしろべえ
挨拶ができぬ大人が多すぎる

ほとほとの挨拶で溝を深くする
ふくろうが帰る挨拶をする与人

妻と混みいった挨拶はよそつ
にこやかな挨拶少し嘘がある

初対面の挨拶アドリブ一つ出る
おはようの軽いリズムをたいせつに

おはようの軽いリズムをたいせつに

兼題「笛」

小出智子選

ライバルの笛に踊った日の不覚

須磨の波青葉の笛へ耳澄ます

ウターンさせる故郷の祭り笛

控え目に吹いてる積り妻の笛

新しい和音奏でる嫁の笛

旗をもつ男の笛に従いて行く

落武者が吹いた笛あり隠れ里

落日とは部下も笛には踊らない

笛を聴く蛇が哀しい顔をする

別れ以後月から笛の音が届く

暗転に笛が聞えて座がしまり

口笛にどうやら難問とけたらし

祭り笛生きた喜び失わす

あの人の笛なら踊ってみたいもの

幸生

翠公

浩一郎

鬼遊

悦郎

酔々

英比古

美幸

水客

幸

英子

どんたく

満津子

弘生

弘生

幸生

紫香

文秋

鬼遊

和子

吸江

吸江

重人

景子

修験者の法螺霊山をふるわせる

終電の笛が鳴ってるから走る

道ならぬ恋に悪魔が笛を吹く

私を消すのは霧笛かも知れぬ

幽霊を笛と太鼓で作り出す

口笛を吹くとき好きな父になる

妻の笛が鳴り続いている安堵感

少し妬きながら夫の笛を聞く

ぬかづけの手をケツトルの笛が呼ぶ

横笛に女は疼くものを抱き

笛吹けどもつ踊らない息子達

海女の笛夫婦のことは持っている

祭笛故里行きの汽車が出る

姉いもつと庇いつづける亡母の笛

男と女呼び合う笛を持っている

草笛につながる過去はみなぬくい

踊らせる笛なら妻が持っている

笛を吹いたらきつと貴女は泣くだろう

面影を重ね口笛吹いてみる

横笛が武蔵とお通語りつづ

草笛を鳴らすと友が寄ってくる

亡母の齡越しても母の笛恋し

椎の実を拾う口笛吹きながら

かつら橋渡ると笛の音が聞え

祭り笛ひとり来ていよいよ独り

人ひとりしのぶすがの笛を吹く

楓楽

健司

蕉露

白兎

金太

美幸

楓楽

浩一郎

頂留子

英比古

月子

天笑

春江

柳伸

美幸

英比古

翠公

浩一郎

美幸

風童

勝晴

春江

酔々

度

水客

智子

「夜市川柳」募集

第四回

「皮」

締切 9月30日

投句先 千593

堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

兼題「割引」

神谷凡九郎選

大学は割引証の発行所

思い切り割引くほかのない余生

割引いた分だけ品物良くながめ

割引きの殺し文句も夏の彩

早朝割引ひまな男のボルノ館

車座で学割の利く髪をなで

精一杯生きて割引知らぬ父

割引券通勤の道でまた呉れる

割引をしても妻には勝てません

まっければ只でくれそな五割引

めばしいものがなくなつたので五割引

酒癖も割引をした腕を買い

妻子あることは割引きしても愛

割引をしてもチンドン屋には負ける

割引きをされると買う気が失せてくる

幸泉

堕駄

山久

寿子

英比古

水客

美幸

悦郎

鬼遊

柳影

文秋

小路

律子

弘生

泰子

割引きのピラで作戦三転す

そばんがきつちりと合う五割引

割引と聞けば私鉄に乗ってまで

五割引のピラへ素通り出来ますか

仏滅の割引料で予約する

割引はしません安くしとります

半端だけ負けときますと追うてくる

難点がある割引でなっとくし

割引をせぬから好きな主婦の店

割引いて聞くと愉快な秘話実話

どのへんが原価でしようか五割引

おっさんが居ると割引きしてくる

割引きへ男は男の物を見る

割引きの野菜を食って生きのびる

二割引鱈一匹あ人生

割引くと健忘症に突き当たる

割引のできぬ男の顔さびし

割引に定価のカラクリませて売り

手形割引いて八月が越せそうな

商人の根性で割引決めて来る

割引へ商魂元の値札付け

訥弁の男で割引して聞けぬ

割引の人間ですが生きてます

割引の旅老人会はたのしそつ

割引の値札でのぞく万華鏡

翠公

重人

潮花

楓楽

寿美

美幸

紫香

冬葉

柳伸

浩一郎

天笑

度

悦郎

はつ絵

岳人

白兎

比呂志

幸生

智子

雅風

白水

幸生

美幸

三十四

凡九郎

兼題「余波」

笠原吸江選

スパルタの余波に揺れているヨット

村議選の余波で隣が口きかぬ

終戦の余波中国の孤児にみる

余波二つ重なり静かかいつぶり

水害の余波を八百屋で思案する

不景気の余波で小遣いカットされ

一石を投じた余波の後遺症

不景気の余波に多忙な警察署

余波受けて約束手形紙となる

犬の皿夫婦げんかの余波をうけ

自己主張しすぎて余波が恐ろしい

そして余波別の波紋もつれてくる

親会社の余波が手形を長くする

逢うてきた余波がくすぶる遠花火

余波うけて海が重たくうねり出す

サラ金に不況の余波は片手落ち

帽子掛の帽子に女の余波を見る

失恋の余波は明るく爪を染め

冤罪の余波真犯人は波の底

連敗の余波感じてる細い首

阪神が負けたら売れぬスポーツ紙

政治の余波米櫃の底にある

お隣は金持余波を期待する

会社から帰つて帰つたとばかり

お説教終わると咳が余波のよう

泰子

英子

軒太楼

墮駄

満津子

天笑

射月芳

弘生

岳人

景子

喜醉

凡九郎

英比古

美幸

白兎

滋雀

水客

潮花

大茂津

度

喜醉

雀踊子

和子

笛生

喜一

昭和58年度大阪文化祭

第35回 川柳大会

日時 昭和58年11月12日(土)11時開場

会場 中央公会堂(中集会室)

地下鉄「淀屋橋」中ノ島公園内

宿題

「宝」

永田 帆船選

「時事雑詠」

広瀬 反省選

「砂」

高橋 白兎選

「脈」

森中恵美子選

「友」

西田柳宏子選

「走る」

定金 冬二選

席題

二題 各題2句 締切1時

(出句は出席者に限る)

賞

大阪府知事、大阪市長、大阪府

会費

市教育委員長から「川柳賞」贈呈

五百円(作品集代を含む)

主催

大阪府

大阪市

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

毒舌の余波だと思つ席を立つ
 倒産の余波を二号はもろに受け
 戦争の余波で儲ける国もあり
 部下の余波かぶり配所の月を見る
 台風之余波へいきり立つサーファー
 不景氣之余波窓際の蟬時雨
 平だけが余波まぬがれた大異動
 円安之余波帳尻でぐねり泣く
 思慮深い男余波まで先を読み
 失恋之余波です秋の旅に出る
 コニヤック之余波で愛の巢おびやかす
 ストレスの余波飼猫のひげを抜き
 アメリカのくしゃみに列島氣をつかい
 台風之余波をきれいな月が追う
 紛争之余波を待てる鉄の冷え
 肩書を取つても余波がまだ残り
 百日紅デート之余波が華やいで
 軍拡之余波に泳がぬ鯉轍り
 落選之余波でダルマも横を向き
 余波だらう風呂の種火も付いてない
 人柄之余波があしたをあたためる
 核之余波時の流れに風化する
 余波しばし男の涙許しとく
 しわよせを見事に捌くいわし雲
 原爆之余波比治山に鐘が鳴る

兼題「信賴」

若柳潮花選

水客	兼治郎	文秋	律子	柳宏子	太茂津	みつる	はつ絵	翠公	萬的	英壬子	みつ子	度	紫香	律子	静歩	みつ子	泰子	喜醉	小路	美幸	静歩	与呂志	白兔	吸江	
信賴をされて戸惑う非行の子	どん底の信賴夫婦持つ絆	お互いに信賴し合う鍵二つ	善玉になったは信賴されてから	信賴をしてた造花が枯れてくる	我が社にも信賴おけるのが一人	信賴がこんな可愛い寝顔する	氣くばりも信賴するとくどすぎる	命綱信じてビルの窓を拭く	信賴をしても財布は別々に	信賴をしても裏書反古にさせ	總理の信賴パーセンテージで計られる	リーダーにいのち託して高懸	子の出した答えを黙って見ていよう	信賴をしてから肩の凝りが取れ	信賴を脆い鎖がつないでる	冤罪が晴れても信賴できぬ過去	高ぶりが見えると危ないなと思つ	信賴がないから判を捺せと言つ	信賴と欲がからんでいるみくじ	信賴を裏切る赤いバラの刺	信賴の重みがかかる背番号	白線を信賴してる対向車	吊り橋に来て信賴が揺れはじめ	信賴の人が二つの顔をみせ	白紙委任するほど甘くありません
英子	喜風	眉水	天笑	泰子	春蘭	三十四	太茂津	静歩	月子	英壬子	春江	翠公	智子	浩一郎	蕉露	太茂津	規不風	紫香	眉水	柳影	射月芳	健司	滋雀	笛生	

川柳塔柳箋

一冊 二百円
 送料 二百四十円

信賴の眼がよこしまをあぶり出し
 信賴を絵にしたような支店長
 梅酒注いで信賴してる訳でなし
 ハンドルを信賴しきっている寝息
 地球人信賴なくした日が最後
 信賴の男の胸は疑わぬ
 信賴の証しの指輪二つある
 父の背の広い子供は夢を見る
 信賴のおけるエースがいる強味
 信賴へ反骨まがり切れずいる
 信賴のサイクルが少しずつのびる
 信賴を裏切る頭下げておく
 受話器がちゃんと信賴の糸が切れ
 金銭に限り信賴されている
 頂留子
 喜一
 水客
 小路
 頂留子
 悦郎
 眉水
 三十四
 金太
 柳影
 比呂志
 水客
 英比古
 潮花

◇

(清記・楓楽)

《訂正》8月号34P吉川雄子郎の句「貧しさも拳句の果は笑いあり」は「笑いあい」の誤りです。訂正致します。



締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号を含めて20字まで。

(整理・香川醉々)

勝山双葉川柳会

鈴木 節子報

風鈴を軒につるして満ち足りる
軒下をかりて夢見るチェーン店
他人が聞けば何でもない話
リハビリへ神から貰う愛の鞭
年頃へ兎に角うるさい他人の目
ライバルに貰った品にとげがある
塩饅頭吉良の家紋もある包装
塩分をひかえめにして再起する
塩なめた頃を夫婦なつかしみ
貰ったあげたりしている垣根越し
面ざしの似た人形を買っている
姑にやっと似て来た塩加減
人形も少うし老いの影やどす
温い好意を貰う俄雨
塩壺がいつも手近にある安堵

川柳翠洋会

中西兼治郎報

大声で呼ぶと命がひき返し
マネキンはバントマイムで客に問い
心より不幸を託びて募洗う
母と呼ぶ其の一言にみなかける

勝子 頂留子 柳伸 寿美 喜美子 ヒサ子 ハル子 ふみ 秋子 千里 いくの 洋子 智子 智慧子 節子

兼治郎 登志実 風童

この線を越えると迷子になりそうで
マネキンが睡眠をとる倉庫の中
母の名を呼ぶ子に戻る回復期
点つなく線の強さを信じ生き
梅雨あける頃マネキンに冬が来る
線引きにいつもはみでる台飲の花
遊泳の蛙が波のおもつまま
線描きの裸婦から貰う熱い風
直線に走って損をす短気
宿ゆかた河童の里でうちわ抱き
魔法使いが見えない線を巧くひき

わかあゆ川柳会

小砂

老いて知るわが子にまさる嫁の愛
ガソリンの裏切り歓迎消費国
子に孫に美田残さぬ負け惜しみ
留守にできる伝言板へことは選る
急用ができたとか字が言う走り書
新茶の香ゆたかに甘さ残るなり
オイコラと九官鳥に暴かれる
ありし日の夫の残した走り書
竹に竹 継いだ話にだまされる
朝ごとに竹踏む足が指図する
竹ゆらぐ風の音符を知ることし
走り書伝言板は泣いている
若竹のすくすく伸びて天の川
たわめても性根曲けぬ竹の節
新茶の香やはり手もみの舌ざわり

京都塔の会

松川

五月晴れめだかも眠うなってくる
桜餅老舗は老舗の値で売られ

泰子 綾子 あき子 光子 宏子 美緒 照子 みつ子 よし子 景子 白丁報 朝子 世似 秀穂 英子 ヒデ子 敏明 恵美子 ふみ 輝水 民子 はるみ 清泉 鈴栄 歳栄 白江 杜的報 潮花 芳子

屑一つはかすところなしビルの街
若さといはいな御輿の鈴も酔う
夢を売る自販機がまだみつからぬ
はつきりと離婚のことが言える年
よく聞けばとても悲しい弾き語り
クラーは扇の涼を忘れさせ
隙のない踊りへ扇生きている
風送ることは知らない舞扇
あじさいがとても明かるい寺にする
聞きあきた話に扇子たたまれる
人知れず扇の風を向けられる
身に余るもの扇面の白で受け
大儲けすることもある向う見ず
特急に乗ってあわてた向う見ず
五月雨が書庫の小さい窓に降り
一雨を待って苧蒲へ客を呼ぶ
せんべいの湿りを嫌う雨の鹿
広重の雨は斜めに降っている

川柳高知

川竹

また仔犬抱いて戻った子に負ける
もう何も食べぬ位牌へ盛り上げる
日めくりも駆け足でくる老いの坂
叩いたり撫でたり顔に垂る美学
酒で遊んだ人にも酒を掛けてやり
勝ち負けを競う心に鬼が棲む
どんな世が待つか娘の旅立ち日
人妻が隙を見せてるクラス会
生活のリズムがちがう父子家庭
古里に星が降って高い空
長という椅子の重さがとばけさす
酒焼けの鼻だけ残る父の顔

松風報

花代子 杜的 美穂 武庫坊 春江 巨詩 白溪子 明代 求芽 紅陽 年客 飛鳥 紫香 笛珠 弘友 孝江 佳風 草野 菊吉 三子 節子 千鳥 春枝 岩男 登舟 弘生 幸泉

馬鹿になりきれずヒアガーデンに行く
二言も三言も多い妻の年齢
里親の苦勞笑つて口にせず
義理の二字爛れた恋が踏み躪る

川柳塔まつえ

恒松

町紅報

客遊子

ネクタイは緩み放しの終電車
ネクタイも地味に再婚話聞く
ネクタイが踊る新任教師です
ネクタイの色の重さに気付かない
週末のバスから降りる共犯者
言いあつて週末砂をかんている
週末を気圧の谷で寝るとする
歎だこと汗週末が過ぎてゆく

信頼を自負して聞く大金庫
陽が落ちて聞く花もある浮世
虫干しの扉を開くと亡父の声
開かれた福祉の門の灯が淡い
政治へ目開くと深みにはまりそ
うところを開くとグイ呑みが置いてある
ふと聖書開いて己が罪洗つ

雄々
嘉寿子
早苗
昭二
鶴丸
孤呂二
登美也

追力に旅を突らす能登太鼓
パパとママよく見ていてね僕飛べた
生み分ける記事見直して寒くなる
背景が変わる年が経つていた
茶柱の朝偶然を信じよう
偶然と見せた出会いにある誤算
見直してみても所詮はパンの耳
見直したなどと子供におだてられ
見直せば毒婦のはほに涙あと
見直して息子を旅に出してやり
見直して心の糸を解きほぐす
ワンマンの胸に結論秘めている
結論へ借りた文珠の知恵袋
判ばかり押して結論出ぬ役所
結論がつかず赤い旗を振り
結論が出たので女は強くなる
結論は石油ショックのせいにする
お断りの理由見付けてはつとする
感情の起伏結論左右され
結論は妻に委そう波立たぬ
結論はやっぱり金のいる話
結論に重味をつけている会議

与根一
田鶴
千代
千秋
千春
紫吻
通児

結論が出るまでゆれたマイホーム
結論が出たよそれからどないする
結論は出ませんみんなズレて居る
結論を出すと思ふんなの傷にふれ
エリーとの結論真夜中にたてる
結論は二つ辞表にベン走る
結論をすぐ出したが父の靴
結論がわからないから生きている
結論を急ごうお酒が待つてます
結論をいやいや綴るホツキキス
戸籍係へ結論持つてくる
そんなりと結論が出て茶がうまい
川柳ささやま

小
凡九郎
信義
雀踊子
白兔
萬樂
柳伸
萬幸
千代三
浩一郎
恒明
越山

走つても雲の流れに追いつけず
仙人のように乗りたい雲がある
黒雲へ死の商人が武器を売る
雲の上そんなくらしがある童話
信じたい友情梅雨の雲低く
飛行雲たどれば森に消えて行き
雲の色優しい色に母想つ
雲の峰きつい練習にも耐える
も一人の私見付けたあかね雲
手の温み肩に残つて二時を打つ
老いの目に頼る息子肩の幅
肩の荷を一つおろした酒の味
子の肩に妻は小さな夢をかけ
肩たたきされると脆い小役人
肩書を外して弾むコップ酒
自信ないのが肩を張る虚勢
亡母の歌きつと聞こえる肩車

白李
秋月
紅月
客遊子
愚童
嘉寿子
早苗
昭二
鶴丸
孤呂二
登美也

偶然と見せた出会いにある誤算
見直してみても所詮はパンの耳
見直したなどと子供におだてられ
見直せば毒婦のはほに涙あと
見直して息子を旅に出してやり
見直して心の糸を解きほぐす
ワンマンの胸に結論秘めている
結論へ借りた文珠の知恵袋
判ばかり押して結論出ぬ役所
結論がつかず赤い旗を振り
結論が出たので女は強くなる
結論は石油ショックのせいにする
お断りの理由見付けてはつとする
感情の起伏結論左右され
結論は妻に委そう波立たぬ
結論はやっぱり金のいる話
結論に重味をつけている会議

甘平
冬葉
規不風
綾珠
春蘭
勝美
翠秋
文公
頂留子
育園
悦郎
醉々
柳右子
射月芳
覺然坊
美人代
弘生
花仔
雅風
善信
柳宏子

結論は急ごうお酒が待つてます
結論をいやいや綴るホツキキス
戸籍係へ結論持つてくる
そんなりと結論が出て茶がうまい
川柳ささやま

恒明
越山

佳句地10選

(前月号から)

高田博泉選

美人とは言わず化粧をほめて去に
子に追われなきの蟹が縦に這い
五線譜に太鼓は暇な役でいる
ここからは他人同士のスリガラス
土に生き水の命を知りつくす
青い実がたしかな主張持つて居る
幸せな切手美人になめられる
切り花の余命どうあれ水を替え
握手した腹をてのひら感じとる
泥船に乗せる男を数えてる

富志子
芳泉
日満
澄子
一三
稚代
かすみ
六龍子
由郎
雀踊子

ここへ来て座れと父の目がきびし
足音を座り直して耳で追う

今朝とれたばかりと届く茄子の色
ライバルの今朝の微笑が気にかかる

棟上げに三粒を喜ぶ今朝の雨
雨しとど哀しい嘘が一つ出る

道連れに無口の続く父の意地
休まずに無口の続く父の意地

揚げ羽にも好きな花あり一と休み
休んでる友を訪ねるよもぎ餅

風は緑休みのとれた手弁当
母の日も母は誰より早く起き

早耳が兎角火種を播きちらし
雨の中出さねばならぬ母の棺

川柳後案

井上柳五郎報

ぬらりくらり鰻のような逃げ口上

薄笑い八十爺さん鰻ほめ
夏やせにうなぎ骨までしやぶられる

ピクピクと鰻の肝がまだ動き
居眠りも一役買った多数決

正論がはね返される多数決
多数決曲った橋を渡られ

反骨に油を注ぐ多数決
堅物がある日溺れてみたくなり

過信した力に溺れ命捨て
赤信号溺れるものの眼に入らず

賭事に溺れ妻子が反旗振る
一流のホテルに片寄る披露宴

ホテルでの計報が旅を止めさせる
ホテルまで行けぬ二人の永い青春

倉吉川柳会

渡辺

青銅

静子

貞子

さかえ

文子

和子

エキオ

房子

美智子

可住

テル

百合子

秋子

柳五郎

定平

哲郎

草風

番茶

幸好

頑なな手練り老舗の味保ち
熟年の積木音もなくくずれ
ひっそりと音もたてずにパンを焼く
瞳を閉じて砂丘大鼓の音に酔い
海の無い夜は眠れないヤング達
海鳴りを明け暮れきいて浜育ち
夕焼空大地に残る子を祈り
雨だれの音にうたた寝誘われる
音のない壁が聞える耳をもち
快音はミニ新党のホームラン
地球から音を取ったら餓死をする
月見草一つ二つは罪の音
生と死を繋ぐリングルただ見詰め
退院の生きる喜び土踏んで
七転び八起き生きよと教えられ
世智辛い世相の中に生きる倅
過去の悔い捨ててあらたに生きる道
まだ北の大地へ捨ててる愚痴がある
執念を鉄に託して大地打つ
熱燭をやめて冷酒にする真夏
いつの日か母なる大地に還る花
万民は大地に四季の詩育て
自信ある靴は大地を強く踏む
熱っぽく涼しく語る第三者
生きる術です鳥獣を野に放つ
温容の御嶽大地の意地を噴き
踏まれても大地に若芽の美しく

川柳わかやま

堀端

花の種いっぱい童話の中へ蒔く
成し遂げた汗祝福の風に会う
ご先祖の汗がしみてる千枚田

柳風

御前

みなと

弘朗

寿朗

満春

あや子

民人

秋人

一保

観洋

ゆり子

碧水

律子

かつみ

貞山

布堂

独歩

ロボットに汗の快感わかるまい
見てほしい汗へ社長はよそ見する
押さねばならぬ坂に女の汗がある
瀬戸際の命を救うオベの汗
運のない汗をかばっての夫婦
汗一つかかない生活辛せか
花道は明るくしたいタクト振る
愛を愛む編機明るく音弾む
良い話持つて明るい顔が来る
手のかかる大きなオトナならいてる
よく働いた手だ山の湯に浸り
手の届く位置で心がとどかない
心ない握手へ力入れておく
職人の意地が手抜きを許さない
辛抱を呉れたよ妻に無骨な手
手だてない老母へ唯々手をさすり
掌の温さに惚れてついて来た
荒れた手にこそ生活の詩がある
善人の迂闊さ手のうち透けて見え
母の手へ亡父を還してはしい夏
手を打てば何でも揃う不倅せ
手つかず亡母の形見の着物干す
自由化へ摘果の汗が立ちわかう
この汗が今夜のビール美味くする
心の灯明るい笑顔から貰う
明るさを取り戻してのデスマスク
シャンデリア誓詞の嘘を聞いている
出きった力明るい負けチーム
底ぬけに明るい男の太っ腹
明朗な嫁に取舵まかしきり
明るい妻に朝の五分をぬすまれる

三男報

幸

光代

稚代

信子

十郎

寿子

栄美子

緑良

凡九郎

太茂津

英子

照子

善太

きみ

桂子

紀美女

紀久子

豊太

登志代

正博

狂虎

和子

正子

公子

裕美

柳宏子

千寿子

武雄

白光子

勇太

信秋

三千代

雀踊子

血まなこで明るいニュース探す記者
明るくてそつない嫁が不満とか

川柳塔からつ

浜本

義美報

天彦

祝が来ハハア父の日かと思ひ
情からも貿易摩擦間をもたせ

栄光を忘れぬ人の自画自讃
糸帯がとれて花鑑賞す

何事ぞボケの天咲く老ホーム
妾心も変身も女すぐ出来る

老人の戦話が義歯ゆする
嫁ぐ日も間近呼び名を考える

柳俳に舞踊書道と妻多忙
方田の水に吞まれる家生命

人口は増えても米があり余り
腹の虫おさへ率直に賞めてやり

尼崎いくしま川柳会

角野かず子報

包丁をすんなりと研ぐ遊び人
音のない世界のきみはきれいな眼

退屈な男に速達便がくる
先々代からの時計のネジを巻く

里帰り名残り尽きない美術展
酔覚めの口が蛇口へかぶりつく

梅雨休み多い六月バラのびる
ドアみんな開いても降りたのは一人

ご先祖に夫に言えぬ事を言い
檀山へ後の雁が先になり

女捨てて涙で生きてる二児の母
そんなこと初耳ですと聞き上手

お中元そろそろ海の幸も来る
めぐり逢い女に話題かわされる

六月の海に捨ておく軽い罪

虹汀

素石

久仁於

四郎

一幸

正敏

広彦

紫泉

ちよ

義美

多々子

水声

伊三郎

郁栄

牧郎

静江

佳秋

玉子

紫香

君子

晴子

ハツエ

かね子

幸子

かすみ

年代

わてが耳になるワとついてきた女
悲しみの海で花束束るく揺れ

廃屋にひそと否が咲いている
耳の痛い話へボトルの栓を抜く

四季の厨女心を知る包丁
いしぶみを撫でて先祖と話する

法事に先祖を語る叔父がいる
露天風呂見ないでよくれよお月さま

博士の嫁ご見ないで使えませうか
外交の駆け引きのなか北の海

ご先祖の一字を貰う名を選び
僕の手で泳いでくれる妻であり

入社社長自慢は海の家
おじいさんの包丁研ぎがよくはやる

富田林富柳会

藤田

獅子の子になる時期失う母原病
来る筈のない封筒を待つ少女

封筒に納め切れないこの涙
封筒に愛のことはをとし込める

釣書の封筒くたびれ返される
青春がこめられている古封筒

税金の催促状か茶封筒
釣書をみては思案のつかぬ日々

私の足より早い夕立で
相合傘夕立止まぬ方がいい

夕立でロングスカートミニになり
そして夕立おとこには妻がある

早魃地夕立あつさり通りすぎ
夕立を避ける廂もない都会

夕立に頭かかえるアデランス
夕立に咽せて霊柩車が走る

一掬

定人

美智子

伊升

春子

すえ

貞子

保蔵

美代子

一郎

弘生

貞二

かず子

美緒

美佐子

幸一

泰子

治郎

勇

森子

トシエ

美代

維久子

為之助

冬二

柳太

与呂志

花梢

夕立の雨脚に背信の音を聞く
自慢した後でルージユを強く拭く

嫁が来て自慢の息子遠くなり
仏壇を親子で買ひに出るお盆

にた川柳会

西村

ナイターが雨で流れて飲みに出る
冗談じゃないよ単なる茶呑み友

エンジンの音が釣銭せきたてる
汗光る四番打者にある重味

縄のやつ叩かれたたく膳に来る
因縁がついて廻った曲り角

埋めてある愛たしかに来た砂丘
鼻風邪のクシヤミへ母の玉子酒

趣味ひとつ持って妻の愚痴が減り
悪ガキが教育学部志望する

お茶の間でいい客楽に座をくずし
目標のマリンボールが廻らぬ日

満開へ蜂は刺す事さえ忘れ
日傘手にポストへまでの娘に育つ

じゃが芋をふつくらと煮て独りばち
未練など残してならぬ北枕

たまご焼のこす美食になれた舌

慶子

章子

富美子

岳人

早苗報

登美也

独仙

鉄花

孝華

夢醉

栄

景子

千草

きみえ

幸一

多賀子

花子

紫吻

寿美子

雀踊子

雄々

田中正坊氏(豊中市)より

句集「はねぶとん」刊行記念として

金一封

拝受致しました

川柳塔社

赤飯でないところがね祝いごと
まだ別な貌をかくした初対面

むらくも婦人作家の会 藤井 明朗報

ひとり酒しむじみ過去の糸たぐる
誘われて夢が広がる決勝戦

春風に誘われおしやれしたくなり
母の忌へ酔えば亡母も酔い給う

悲しみをはらす酒なでめでたい日
電話ベルをたいて音でめでたい日

澄んだ瞳の心の窓を信じよう
ワンピース着れば空まで翔べそう

ワンピース嫁の見立て派手を着る
一杯の酒で明日への期待湧き

明日築く汗は惜しまぬ父の背
言訳をしながら汗をふいている

酒好きも固く同志の意気合い
汗出して働く姿に悔いはなし

はんのりとお酒たしなむ女の和
誘われるままになるのも若いひと

窓明り早く起きよと初夏の朝
旅の宿明日の献立電話する

ワンピース今年の夏へ夢を着る
見送りの窓母の目に涙見る

車窓からうつる景色も汽車の旅
バラの色の恋も電話が橋渡し

生きた汗じっとり帯に沁みてくる
朝の窓青と緑がとんでくる

窓あけて月の雫にひとりごと
酒の海およぶ男の孤独感

ウインドの心迷わすワンピース
鴉が三羽生話の電話掛けてくる

弘朗 早苗

秀子 孝華

芳子 錦文

みどり 多賀子

きみえ 正江

吉野 竹乃

ヤス子 千里

マサコ 雪路

よし美 静子

藤子 幸子

邦子 ハナエ

三喜子 松文子

保子 保子

ふさえ 満江

房子 房子

ゆき子 ゆき子

逢う色はどれにししようかワンピース
ダンスでも踊りたいよなワンピース

誘われてオンザロックの口あたり
南から売れて来ました花見酒

市場簗主婦にもどったワンピース
逢いに行こうれしき包むワンピース

悔いのない汗を流して夜の膳
川柳はびきの

妻も子も孫も補聴器買えと言おう
私小説消さねばならぬ行がある

父親の本心通夜の席で聞く
美しく枯れて行きたい日と思う

耳遠し無声映画のテレビ見る
この橋をわたって夜の顔になる

干拓へむつころうが病んでくる
夏ばてを浜名湖うなぎでく止める

静かだと思えばいたずら三歳児
しきたりと言われて黙る厚い壁

生活の重荷ポケット知って居る
耐えながらおんなは夢をふくらます

太い腰くねらす妻の美容術
亡き姑單笥の衣に声を聴く

デパートの水着の彩に夏匂う
役者一枚違つて喧嘩にならぬ仲

話声一つにつに聞いているパスの旅
初夏の天変地異に驚倒す

たわむれの愛紫陽花になじまない
太陽の光にうえる地下に生き

親馬鹿の自信で受験ランク上げ
青春を消したくないので日記書く

初対面胸襟ひらく国訛り

一葉 千草

嘉寿子 富子

百代 百代

よし子 敏報

はる代 白子

和子 与呂志

キミ 義一

伴子 龍子

司 美恵子

隆 美代子

隆二 忠宏

恵美 恵美

まさ 吐来

喜代子 喜代子

石橋義一 胡村

みつる 志津

昭子 昭子

寿美 寿美

宮任えした日泣いた日若かった
図書館の棚にちんまり柳書あり

嫁ぐ前親娘揃つて植木市
飛び切りの顔で見合の写真くる

想い出をためて重たい旅カバン
反核も反角もあり末世かな

表札に見合の彼の名は見えぬ
居酒屋で隣の人と税のぐち

ハワイ川柳ウイロー社 市岡 暁舟報

気楽そう天皇陛下下の田植かな
気楽にも程良き暮し有り難く

一人居の気楽渡世が捨てられず
音痴だが気楽に唄う妻の喉

常夏の気楽さ誇る島暮し
寝そべって本読む気楽な妻の留守

子も巢立ち気楽になった老夫婦
気楽には未だ未だ遠い子沢山

年金で暮す気楽で旅に出る
天下一気楽な心地釣の味

老いなお気楽に暮す術もなく
果し終え気楽に暮す人の世話

行く末はどうあらうともとは昼寝
温泉でやつと気楽な旅の空

気楽でも独り寂しい夢を抱き
気楽の極意を知って金が無く

気楽です言いつつ心の裏を恥じ
城北川柳会 野呂 右近報

血の流れ親父と同じ祭り好き
あの世への旅費稼ぎとは立派

七夕の星を見ながら貰い風呂
追伸にチラリ無心が透いて見え

つや 敏

三千代 喜醉

良絵 醉亭

末一 末一

さとし 暁舟報

拝山 香夢女

公女 蒼生

黄塵 万里歩

紅溪 紅溪

カロ女 嗣栄

虹宵 梨花女

秀山 十吉

一牛 張賀

彩民 彩民

曉舟 曉舟

右近報 右近報

静子 静子

三十四 左春

静歩 静歩

率直に言わして貰うと強腰で率直に言えば傷つく女がある

一仕事手伝った日の爽かき

丹精の花とりどりに笑顔見せ

故郷の歌出稼ぎの胸を打つ

率直に言えぬ自分がはがゆなり

平凡に稼ぐ子が居る妻が居る

率直な話に少し痛い耳

民謡も天神祭の列に入り

軍歴が率直な言葉にしてしま

御返事が遅いは嫌いと言うし

サラ金へ稼ぎは皆んな持つて

看板がよれて暫く休みます

深山のアサミは棘も柔かい

神棚にあげて稼ぎを労られ

毎日を稼ぐ達者を持つて

適当の弱さを持つて

炉 齊

右 近

ふ み

すみれ

公 一

八 重

山 彦

山 久

そとえ

悟 郎

節 子

達 一

た だ

道 子

笑 風

弘 生

子の弁当嫌いなものも一ついれ兄としてゴム風船をふくらます

金魚の死とつても寒い朝でした

遠い日のはやり唄など女酔い

乗り換えるの駅で待ち合う事にする

風船が割れると祭らしくなる

無花果の葉で芸術にする裸

お祭りの金魚はすぐに死んじまい

過疎の駅盆と正月だけは混み

ライバルの勝利今夜の苦い酒

父の日も同じリズムの弁当箱

湯舟から出る高峰を見たくなり

弁当を作らずママは金持たす

紙風船もうギリギリの胸のうち

停らない駅に私の家があり

カラオケに酔えば涙腺ゆるみだし

たまに服着せると漁師風邪をひく

シマ子

鬼 遊

雀 踊

気 代

凡 九

紫 香

射月芳

綾 珠

右 近

喜 風

勝 美

昭 子

み づ

柳 伸

悦 郎

冬 葉

親と子の対話心の窓を開け心臓がないからロボット疲れない

名園の牡丹へうっとり初夏の風

MとCコンビの息で合図する

膝枕うつとりしてる耳掃除

貧乏神背中を押した行きつまり

メーデーの空も心も浮かぬ顔

合格の裏に何やら黒い影

新築の一番風呂は祖父母から

うっとり暗着見とれて乗り過し

娘だけ門限時間厳守

少し目をふつり血圧意識する

四十年亡父の若さに嫉妬する

断絶で泣いた日もあり子の巣立ち

何時からか一人ぼっちが好きになり

霞草心の隅に活けて置く

老婆の内助は命令的になる

二天坊

鉄 心

伸 子

敏

だるま

洛 醉

三千雄

み づ

寿 鳳

晃 山

和 世

笑 風

キ ミ

雅 果

君 枝

ま さ

三十四

天 平

比 呂

金 太

道 子

武助報

浪速子

富 子

甘 平

由 高

照 江

せ 子

春 栄

佳 生

鬼遊報

柳宏子

満津子

午 郎

忠 夫

星 斗

倫 子

利 義

秀 村

正 之

新一郎

千世子

テルミ

弘 生

茂 樹

笑 風

菜の花句会

高杉

鬼遊報

柳宏子

満津子

午 郎

忠 夫

星 斗

倫 子

利 義

秀 村

正 之

新一郎

千世子

テルミ

弘 生

率直に言わして貰うと強腰で率直に言えば傷つく女がある

一仕事手伝った日の爽かき

丹精の花とりどりに笑顔見せ

故郷の歌出稼ぎの胸を打つ

率直に言えぬ自分がはがゆなり

平凡に稼ぐ子が居る妻が居る

率直な話に少し痛い耳

民謡も天神祭の列に入り

軍歴が率直な言葉にしてしま

御返事が遅いは嫌いと言うし

サラ金へ稼ぎは皆んな持つて

看板がよれて暫く休みます

深山のアサミは棘も柔かい

神棚にあげて稼ぎを労られ

毎日を稼ぐ達者を持つて

適当の弱さを持つて

炉 齊

右 近

ふ み

すみれ

公 一

八 重

山 彦

山 久

そとえ

悟 郎

節 子

達 一

た だ

道 子

笑 風

弘 生

子の弁当嫌いなものも一ついれ兄としてゴム風船をふくらます

金魚の死とつても寒い朝でした

遠い日のはやり唄など女酔い

乗り換えるの駅で待ち合う事にする

風船が割れると祭らしくなる

無花果の葉で芸術にする裸

お祭りの金魚はすぐに死んじまい

過疎の駅盆と正月だけは混み

ライバルの勝利今夜の苦い酒

父の日も同じリズムの弁当箱

湯舟から出る高峰を見たくなり

弁当を作らずママは金持たす

紙風船もうギリギリの胸のうち

停らない駅に私の家があり

カラオケに酔えば涙腺ゆるみだし

たまに服着せると漁師風邪をひく

シマ子

鬼 遊

雀 踊

気 代

凡 九

紫 香

射月芳

綾 珠

右 近

喜 風

勝 美

昭 子

み づ

柳 伸

悦 郎

冬 葉

親と子の対話心の窓を開け心臓がないからロボット疲れない

名園の牡丹へうっとり初夏の風

MとCコンビの息で合図する

膝枕うつとりしてる耳掃除

貧乏神背中を押した行きつまり

メーデーの空も心も浮かぬ顔

合格の裏に何やら黒い影

新築の一番風呂は祖父母から

うっとり暗着見とれて乗り過し

娘だけ門限時間厳守

少し目をふつり血圧意識する

四十年亡父の若さに嫉妬する

断絶で泣いた日もあり子の巣立ち

何時からか一人ぼっちが好きになり

霞草心の隅に活けて置く

老婆の内助は命令的になる

二天坊

鉄 心

伸 子

敏

だるま

洛 醉

三千雄

み づ

寿 鳳

晃 山

和 世

笑 風

キ ミ

雅 果

君 枝

ま さ

三十四

天 平

比 呂

金 太

道 子

武助報

浪速子

富 子

甘 平

由 高

照 江

せ 子

春 栄

佳 生

旧友は嬉しい言葉おいて去に
カーベットの所で息をひそめている

老夫婦やつぱり落ち着く畳部屋
畳での暮しに馴れてワンタフル

この子らの成長を知る畳傷
ふんぎりやつかぬまんまに酒となり

当確へ早やばく届くこもかぶり
酒が出てすしも届いて据えた腰

おろかさが淋しく敵意見せつける
優しさが仏の十指にあふれてる

せわしさへ半分嫁の知恵を借る
僕を救つてくれた一言の国説り

日歩でいう金利にうっかり乗った悔い
神様は酒豪酒樽又届き

川柳たけはら

森井

青居報

てでとつたホテルかごにいました
おでつないでホテルみましたよ

ホテルのおしりはかい中電気みただな
雨の日のかえりのみちはいやだなあ

ホテルさんしつぽが光っている不思議
くわがたのうんめいかわいそうになる

枕なげやつぱり父もしたと言つ
じいちゃんは見ても笑わな

暑からう植木に水をかけてやり
クラブは体操わたしたは四年生

紫の着物につながる母の思慕
北酒場からの電話も春の宵

膝抱いて眠れば北国朝早し
人違いされて私を考える

浮浪者の瞳に見事な夕陽
八十九年生きた証しの句集編め

ひで

こ

武助

玲子

真柳

白光

ゆずる

加代子

狸村

さよ子

射月芳

世界人

操子

あきみ

はるみ

珠算初段の原点にある陸上部
ラッキーな出場権をしんどがり

妻眠るぐすり眠る口あけて
あの頃の話になつてゐる蜜

水雨歌つてヒロインにひたり切る
宇宙遊泳蜜は詩人かも知れず

初夏の陽と風と乳母車の子が笑い
無欲にもなれず畠の草を引く

我武者羅な愛かもしれぬ平手打ち
赤白の旗を上手に振る男

打吹川柳会

奥谷

初化粧娘の外出が気にかかり
外出を急げば見えぬ探しもの

連立つて外出隣が目を丸め
盛装の外出見合いかと聞かれ

留守番は開いた本にたのみ置き
れんげ田でのんびり雲の行方みる

暮れかかるのんびり漕げぬ父の海
のんびりに添うてのんびり自嘲する

のんびりと道草食つてのランドセル
のんびりのようでも短針役がある

別居して孫の世話だけさせられる
恍惚の舅の世話に疲れてつき

隙のない世話女房で鼻につき
親ゆずり泡と知りつつ人の世話

世話好きを自認傍目はおせっかい
世話好きといわれ家事にはうとい妻

履歴書をもて余して人の世話
三日目も三朝の湯の香かいでいる

外出の好きな亭主を妻が妬き

南大阪川柳会

中川

滋雀報

紀愛

静水

笑子

蘭幸

比呂舟

純子

令子

節夫

弘朗報

香苗

康子

柳風

喜美子

梅朗

高代

俗人に果てなく続く数え唄
俗世を清めに蓮の花が咲く

俗人のひまと遊んだ砂時計
ゼニのない顔昼すぎの歯を磨く

イソップでする見本となる狐
退屈なポケットにある裸銀

結局は地味な女と結ばれる
ずるい奴おつてドラマは盛り上る

ゼニ勘定出来る男の生きた金
雑用の一つひとつにある誠意

ぬけぬけと口を拭つて舌を出し
ゼニ銭と愛の深さを忘れてた

一生を地味な女で生きた楠
里の母地味で内気で剛情で

雑用がいっぱい詰っているバッグ
雑用に追われる今日が幸せだ

要領は悪いが銭のことは汚え
職場から出ると地味になる女

やつと今着れます地味な母の柄
地味造り噂は消えぬままである

雑用に追われ凡人らしく生き
束ね髪亡母薄墨の色に溶け

凡人は勞せずするく賭を追い
雑用をまともに務め認められ

ゼニ貯めて江州説り抜け切れず
一円がゼニの權利を主張する

もう一人の自分が心に居るさ
小ずさが舌三寸に見え隠れ

雑用にただ忙しい日が暮れる
川柳化粧檯

良い事は指の先まで踊りだす
植村客遊子報

楓楽

鎮彦

文秋

恒明

慶三

柳宏子

勝美

滋雀

千里

雀踊子

善信

智子

悦郎

凡子

頂留子

凡九郎

度

鎮彦

文秋

恒明

慶三

柳宏子

勝美

滋雀

千里

雀踊子

善信

智子

悦郎

凡子

頂留子

凡九郎

笛舟にともつて蜚流れゆき
コマーシャル程に洗剤落ちもせず
緑日へ香具師の人垣崩れない
老いらくの恋が実つてお茶を飲む
クラス会二次会でもう夜が更け
玉手箱そろそろ開けてみたくなり
納骨の夫へ女と訣別す
羽ぶとん亡母の涙を取り戻す
古稀過ぎたおばば赤靴厚化粧
ビニールで植物の性欺かれ
百合に似た美人に保険の話聞く
つきはなす愛なら快く受ける
安全帽の汗信頼を裏切らず
たんまには静かでないな妻の留守
鍵っ子と見たか仔犬がつきまとい
大安の使者悉く酔つてくれ

川柳大原
雨降れば雨にはほえむ野の仏
待望の雨へ西瓜の深呼吸
握ること覚えた孫に指をやり
握られて今宵うれしい天の川
ハンドルを握れば別な顔となり
切り札の一枚握つて無口
負けとなる握りこぶしがおろされぬ
せい一ぱい生きまで手相を信じない
両親は僕の福耳まだ信じ
公約を信じる方が馬鹿にされ
代筆のレターボケツで落ちつけぬ
代筆は孫に頼んで鶴を折り
代筆の父挨拶で書きはじめ
代筆を頼めばナースきれいな瞳

白岩

文衛報

笛 珠 伊江坊 若葉 由紀 越山 輝月 みね子 永楽 葉香 大鷹 白李 紅月 秋月 岳詩 客遊子 文衛報 やよい きし子 朝代 敏子 宮子 ひでの 耕花 いさむ ゆきお 正巳 玉恵 妻子 寿恵子 はるみ

ハンカチの裏に仕掛けがあるらしい
裏口へいちこが届く五月晴
いたわりの言葉がぬくい老いの耳
聞こえない耳にしてから楽になり
神々のみ業にカメラ小さすぎ

尾浜川柳会

黒川

夢抱いて青年晴れの船出する
青春を南の島に捨ててきた
青年のむなしさにいる四帖半
おうむまで私の癖を覚えてた
異人館地下にひっそり古酒並ぶ
地下街で非常出口が目止まる
地下街を歩いて地下を忘れてる
親切過剰冷房が効きすぎる
ボーナスが家庭の平和とりもどし
ボーナスをくすくすし両親旅に出し
本棚に飾つただけの本もある
本棚で時代の流れ知らされる
立読みの本風格を捨てている
人生の旅路にも似た飛行雲
仏前のおさがり雀へわけてやり
伴れてきてやりたかったと旅に悔い
熱帯夜大も寝れぬか吠えつづけ
西宮北口川柳会 妹尾 春江報 笑女 紫香 水声 三笑子 春子 しげお 園歩

理恵 元江 辰江 文衛 紫香報 土岐 いわを 保 紫香 寅之助 すみ 江美 佳秋 よしつぐ 寧一 夢之助 かつみ 牧郎 弘治 昌子 清太 貞吉

夏祭り冷えたラムネにある郷愁
妻籠宿のラムネ夏涼し
ラムネ屋が夜の端を景気づけ
ラムネ玉コロコロ童心に戻る
せつちをたしなめているラムネ玉
玉おと玉おとしては飲むラムネ
ラムネ瓶昔噺がつめてある
下宿屋の隅にころけていたラムネ
よく笑う妻でよく食べよく眠る
合格の笑顔へ嬉しい酒が満つ
当選の笑顔テレビにこぼれそう
年老いて笑い声にもつやがなく
肥えているタレント身体で笑わせる
喜びの極致は涙つて来る
笑い袋終ったあとは笑わない
泣き笑いあはしたの句読点になる
裏面に笑い袋が落ちていた
年金で妻と笑える虹を見る
目も口もない紙人形の笑い顔
失意の日妻の笑顔に救われる
胎動の母の母親の笑みとなる
リハビリの一步一步に手を合わせ
函館の夜景 存分 旅終る
梅雨しとど夫在りし日の旅日記
座りだご浴衣の似合う人らしい
年金の生活に覇気は衰えず
邪魔したなこれを辞世の語としたい
バフ持つて女いくさの策を練る
ライバルへちよつと日傘で身をかはし
ユーモアに一番弱いくすり指
真っ直ぐな線が引けない日の焦り

隆子 紀雄 求芽 婦美子 一郎 杜的 春江 いわゑ トシエ 美津子 弘生 右近 眉水 伊代 伊三郎 伊三郎 光女 文平 てる きよ子 千世子 日の出 墮駄 かすみ 冬子 幽香 美智子

本社九月句会

日時 九月七日(水) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

おはなし

兼題

「彫る」

「びっくり」

「汚れ」

「浮沈」

席題 二題 当日発表
会費 五百円

野村 太茂津 選
児島 与呂志 選
玉置 重人 選
齊藤 三十四 選
橘 高 薫 風 選

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

10月の兼題と選者は表紙裏参照

10月は二賞発表句会2日(日)

御 札

NHKテレビ「よめやうたえや川柳天国」の放映に句を寄せられました皆様方、並びにご協力賜りました多数の川柳社に心からお礼申し上げます。

なお、当日の句集ご希望の方は、百円切手同封の上

〒540 大阪市東区馬場町三三四三

NHK大阪放送局 教育部

へ、句集希望と朱書してお申し込み下さい。

橘 高 薫 風

募集

十一月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
水煙抄(10句) 黒川 紫香 選
愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)

「理想」 里 小路 選

「プロ」 西村 早苗 選

「久じぶり」 高橋 千万子 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄の投句は「三」誌友の方です。

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
水煙抄(10句) 黒川 紫香 選
愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)

「花道」 川口 弘生 選

「測る」 浜野 奇童 選

「妻」 河内 月子 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を「使用ください」。

9月の常任理事会は1日(木)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十八年八月二十五日印刷
昭和五十八年九月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(二)六九一六九一四番

振替口座大阪・二三三六八番

レ、

天国”

☆親子のテーマで、全国からの電話投句は東電調子なマヒ状態になる程で、正に一夜の万句合せであった。

☆「BK川柳放送を担当されていた師路郎を思い出します。頑張って下さい」とは篠山の酒井ひか平氏。「たけはら」の配本時、会員に奨め一人でも多く参加して貰います。とは山内静水氏。しつかり食べて下さいと八木千代さん。他社からのご支援も有難かった。

☆当日は選者として柳宏子酔々、鬼遊、史好、智子の皆さんと私、出演者に天笑さんと誌友の赤木和子さん裏方の書き手に小路、滋雀両氏はじめ十五人の方、見物席からも多数の声援を得た。それに何よりも全国各地からの熱気あるご支援はスタジオにじかに響いた。心からお礼申し上げる。

☆NHKのプロデューサー

陣り、よい番組にするために感じ入った。そこ

☆NHKが応募句を編集して句集にしてくれる。川柳に貴重な50分だった(薫)

☆むかしの名前で出ています、といつても何も小林旭の演歌ではありません。歳時記を繙くと、むかしの名前が出てくるものがたくさんあります。9月ともなれば、豊作を狙って小動物が作物をあらしにやって来ます。威銃は、稲田を襲う雀や獸類を追うために、空弾を放っておどす銃のことで

すし、鹿火屋といえは、鹿らすのを防ぐために火を焚き、これらの動物の嫌う臭いものをくすぶらせる小屋のことです。また鹿垣とか猪垣(どちらもししがきと読みます)というのは、猪・鹿を防ぐためのかきです。さすがに、俳句の世界では、海彦が連れる鳥の威し銃(鷹羽狩行)淋しさにまた銅鑼うつや鹿火屋守

「原石題」湯の客も猪垣組みに加はれり(岡本ましろ)など、例句がありました。川柳歳事記(奥田白虎)を開いてみますと、猪垣の句が一つだけ見つかりました。猪へ碧をいそぐいい実り(畑中大三)川柳では作句しにくいのでしょうか。9月には岩手県花巻で鹿踊りがはじまります。日本の信仰には、鹿が神格をもっているに信じられていくようです。四国の宇和島地方でもハツ鹿踊りというのがあります。

(酔)

▼大新聞の三段抜きで買大

の一日一覽「西日本地区/大阪は第三土曜日/全国食肉消費推進協議会/後援は農林水産省畜産局・畜産振興事業団」で「肉の日」の広告が掲載された。その宣伝文句に「お肉が安く買えるうれしい日です」とある。それほど牛肉の値が高いのである。聞くところによれば世界一ともいう。牛肉の値を安く出来ない現状の政府など私は信用しない。今

よりもっともつと貧しかった戦前、外から家に帰って来ると牛肉の煮える匂いが漂うて来る。それがわが家であつた時の喜びは今でも記憶に新しい。十軒ほど手前からわかる程その匂いは強烈だった。貧しかった為だけにできなそうだ。近頃の牛肉ときたら換気扇に押し出されても隣りにいるの範囲しか匂わぬ様に思われる。百グラム千円も出せれば昔の匂いがするだろうが、特権階級でなければ無理なことだろう。豚肉は安いからゆけるが、鶏肉と来たら本来の味を失っている。何と不味い物を増産していることか、悲しい現実である。選挙ばかりが政治やないか「豊かな日本」を誇るなら本物であるべきだ。(き)

☆7月31日堺の夜市川柳大会で栗主幹がお祝いのことばを述べられた。祝辞といつても、会場を盛上げるような話を、との主催者の注文中に添えて、まことにくだらないおはなし。主幹が伊豆・熱川温泉で「文学あ

ま」がいろいろというので招んでもらう。目が不自由な彼女だが、表紙に手をさわるだけで、その雑誌の名前を当てるといふ。そこではなしは手近かの雑誌で実際に験すことになるのだが、オチをここに書くのは遠慮です。会場はどつと湧いた。☆熱川温泉には僕も思い出がある。訪れたのは昭和47年1月、ちょうどここを舞台にした新珠三千代主演のテレビドラマ「細うで繁盛記」が大人気だった。旅館では評判にあやかり、繁盛鍋」というのが出たが、これがチャチな鍋料理、燃料のアルコールドランぷにおいが鼻につき旅情どころではなかった。

(史)

☆ワニ園も見学した。「ワニ園の鰐動かない真昼」はこの時の作。後に伊豆大地震の直前、この鰐が一斉に騒ぎだしたとか。

☆同じ温泉の旅でも僕のは色気のない思い出ばかりである。

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

この夏、おいしさひとりじめ.....

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーシカ店
近鉄(アベノ・土六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大 阪・な ン ば



TEL (641) 0551